

『絹と明察』の光と闇を明察する

新出の三島由紀夫旧蔵書を手がかりとして

島内景二

【目次】

- 1 はじめに 新資料の出現
 - 2 『絹と明察』の輪郭
 - 3 新資料の概要
 - 4 『夏川嘉久次と紡績事業』 粉本・その一
 - 5 『人権争議』 粉本・その二
 - 6 『絹と明察』の本質
 - 7 おわりに 三島の旧蔵書群の調査の可能性
-
- 1 はじめに 新資料の出現

1・1 不幸なる名作

三島由紀夫の長編小説『絹と明察』は、講談社の文芸雑誌『群像』に、昭和三十九年一月号から十月号まで連載され、完結後すぐ十月に単行本として刊行された。この小説は、翌四十年一月に第六回毎日芸術賞（文学部門）を受賞した。その昭和四十年九月には、三島のライフ・ワークである「豊饒の海」シリーズの第一作『春の雪』の連載が開始された。そして、十月に三島はノーベル文学賞の候補になっている。

『絹と明察』は、人生の総決算期を迎えつつある三島にとって大変に重要な小説でありながら、正面切つて見据えた批評も研究論文も見当たらない。一つには『絹と明察』が昭和二十九年に起きた近江絹糸の人権争議を直接の題材としていることへの戸惑いのためであろう。

このストライキは、夏川嘉久次というワンマン社長が経営して急成長した近江絹糸という紡績企業で起きた。労働者たちの人権を不当に抑圧した悪徳資本家に対する抗議であると大々的にマスコミに伝えられ、「人権争議」と呼ばれた。む

ろん「人権」と、近江絹糸が製造している「人絹」との地口・懸詞である。しかも、会社側はストの工員たちに獐狂な犬をけしかけたので、「人犬争議」とも揶揄されたという。

小説の素材となった史実があまりにも明瞭であり、しかもそれが表面的にはストを打ち抜いた「左翼陣営の勝利」に終わっているように理解されているために、「保守派」と目される三島の創作意図がどこにあったか、かえって見えにくくなっているのだ。その一方で進歩的批評家からは、組合活動家たちの造型がステレオタイプ化されているのみならず、彼らが作者の悪意に満ちた揶揄と嘲笑の対象になっているという批判も蒙っている。

さらに言えば、『絹と明察』の随所に挿入されているヘルダーリンの詩やハイデッガーの哲学があまりにも高邁で深淵であるために、あまりにも現実的な近江絹糸の人権争議との有機的結合を見抜く批評家が少なかったことも、この小説の不幸であった。形而上と形而下とが向かい合い睨み合う構図の必然性が、これまでは十分には理解されなかつた憾みがある。

『絹と明察』の評価の混乱ぶりを、具体的に示してみよう。

進歩派の小田切秀雄は、『群像』の「創作合評」で（昭和三十九年十一月号、本多秋五・寺田透との鼎談）、『絹と明察』の欠点を指摘した。ただし、このような批評界の趨勢を予感した磯田光一は、批判される前に絶賛する戦略に出ているいち早く『図書新聞』の「時評」（昭和三十九年九月二十六号）で、『絹と明察』を大きく取り上げ、名作として称揚したのである。ところが小田切秀雄は、『文学』の「時評」（昭和三十九年十二月号）で、三島を称賛する磯田の批評原理それ自体を攻撃した。

この応酬は、即物派の批評家と美学派（浪漫派）の批評家との抜きがたい相互不信、そして乖離を証したるものだった。ただし、磯田が『絹と明察』の中に「怨念のリアリティ」を読み取っていることは、浪漫派と目された磯田にも、社

会的敗者への共感と理解があつたことを示している。

バランスの取れた批評家だつた奥野健男も、『東京新聞』夕刊（昭和三十九年十一月四日）で、『絹と明察』を称賛した。この書評は、『三島由紀夫伝説』（新潮社・平成五年）にも再録されている。労働争議という社会正義の側面に配慮しつつ、それよりも「芸術」として「人間」を掘り下げている点を評価する、という基本姿勢である。三島の芸術観が先で、それがたまたま近江絹糸で起きた社会的事象を掴み取つたという奥野の理解は、現在ならば妥当とされるであろう。

けれども、磯田も奥野も、いささか三島を称賛する文脈に、一抹の「躊躇」なしいし「戸惑い」が感じられる。彼らにとつても、やはり三島が労働争議を取り上げたのは意外であり、その必然性が完全には汲み取れていなかったのではなからうか。

国文学研究の分野でも、意外なほどに『絹と明察』の論文は少ない。研究者にとつても、『絹と明察』はそれほど魅力的な作品ではなかったのだ。

神谷忠孝「三島由紀夫」（『解釈と解釈』平成十六年四月号）は、「近代文学に描かれた父親像」という特集号の中の一編（依頼原稿）である。三島研究の新たなスタート・ラインを切るべく刊行された『三島由紀夫論集』シリーズ（勉誠社・平成十三年三月）には、第一巻『三島由紀夫の時代』に、竹松良明『絹と明察』論 天皇制にかかわる形象化をめぐる「が載り、『絹と明察』を正面から論じた。第二巻『三島由紀夫の表現』には、佐藤秀明「現実が許容しない詩」と三島由紀夫の小説」が載り、『絹と明察』にも触れている。いずれも近年の作品論であり、『絹と明察』の本質の解明がまさにこれからの課題なのだということがわかる。

なお杉本和宏の論文は、きわめて示唆に富む一方で、いささか残念に思われる点もあるので、ここでは触れずに次の「1・2」で紹介する。

その他には、柳瀬善治『絹と明察』・『月澹荘綺譚』・『天人五衰』 認識を越えるものの表象について（『近代文学試論』三十四号・平成八年十二月号）が目についた。『絹と明察』を論じた研究論文はきわめて少ない。だから、今後も『絹と明察』の本格的な論文が競って書かれるだろうという期待は、さほど持てないのである。

このように見ると、『絹と明察』は、不幸にして不運な作品だと言わざるをえない。批評家も研究者も、これまではこの作品の本質を十分には見抜けなかった。新潮文庫の『絹と明察』も、初刷発行の昭和六十二年から現在までに

わずか四刷を数えるのみである（それ以前の講談社文庫がどれだけ増刷されたかは未調査）。読者が手を伸ばさなかった理由の一つは、この作品の本質を読者に教える魅力的な批評や論文が書かれなかったからであろう。

どうにかして、作者の思いを体験して、この作品の創作心理に肉薄したいものである。本稿は、『絹と明察』という小説の探究を通して、三島文学の「故郷」へ回帰することを目指す。それゆえ、遙かなる地平線への「帰郷者」の心で書かれるであろう。この分析の結果が、『絹と明察』の名作たるゆえんを少しでも解明するものとなることを強く祈念する。

いささか揚言すれば、『絹と明察』という作品が放つべき絹のような光沢は、いまだ世界に顕れていないのではないか。まるで、アマテラスが岩戸籠もりを余儀なくされているように、この小説の真価は宝のままに地中深く眠っている。しかし闇と化した世界ではあつたが、タチカラオの豪腕で岩戸がこじ開けられ、世界は再び光を回復したと神話は語っている。拙稿は、宝に降り積もった埃の山を払い、この不幸なる名作小説の「岩戸」を開かんとする情念の発露なのである。

1・2 全体性を把握する必要性

経済史家の猪木武徳は、『絹と明察』の経済的側面にある程度の関心を示しながらも、経済活動が象徴している「現実」を、ハイデッガーやヘルダーリンという「抽象性」と縫合するのは「不自然」であり、「無理」だと断じている（『文学者の見た近代日本の経済と社会 三島由紀夫『絹と明察』』、『書齋の窓』五〇四号・平成十三年五月）。

ドイツ文学者（比較文学研究者）の館野日出男は、「三島由紀夫とハイデッガー」（『飯塚信雄教授古稀記念論集』平成三年）で、三島のハイデッガーとヘルダーリン理解の本質に鋭く迫っている。中でも、ハイデッガーの『存在と時間』のエッセンスを、三島が岩波文庫の翻訳からではなく、渡邊二郎の『ハイデッガーの実存思想』（勤草書房・昭和三十七年）から得たという指摘などは、有益である。けれども逆に、館野は『絹と明察』の経済的側面には、ほとんど関心を示していない。

それでは、経済史家でもなく比較文学者でもない国文学者は、『絹と明察』の全体像に迫る意欲を持っていたらどうか。国文学者の中で、近江絹糸の労働争議に強い関心を抱いたのは、おそらく杉本和宏ただ一人ではなからうか。『絹と明察』と近江絹糸争議のあいだ（『名古屋近代文学研究』第十号・平成四年十二月）、

および『絹と明察』の『日本』(『国際関係学部紀要(中部大学)第十二号・平成六年三月』)の二本の論文は、まことに労作であり力作である。

ただし、杉本は『絹と明察』の作品論ではなく、世相論あるいは現代社会論を指しており、作品論としての分析がほとんどなされていない。登場人物の心に分け入ることもないし、三島の心に迫ることも意図されていない。

杉本論文で特に惜しまれるのは、『定本三島由紀夫書誌』(薔薇十字社・昭和四十七年)によって、三島が所蔵していた近江絹絲関連図書タイトルの数冊突き止めていながら、それらの書物の記述と『絹と明察』の叙述とを比較する作業に なぜか進まなかったことである。

このように、論者たちの視点と分析方法は拡散している。作品の全体を統括する「三島文学の核心」の探究というには、もどかしいままの状態で、完成後四十年以上放置されてきたのである。繰り返し返すことになるが、『絹と明察』は批評家泣かせ、研究者泣かせの作品だった。

1・3 個人的な感想

かく言うつ私自身も、永らく三島の戯曲や小説に魅せられてきた人間ではあるが、『絹と明察』に込められた三島の深い思いを洞察する能力に欠けていたことを、率直に告白しておきたい。

恥を忍んで言えば、つい最近まで、『絹と明察』をたった一度しか読んだことがなかった。「豊饒の海」シリーズの第四作『天人五衰』は、何十回読んだかわからないくらいに繙読したにもかかわらず、『絹と明察』には繰り返し読むほどの魅力を感じなかったのである。

当然に、その読書時の感想は、簡単なものだった。「はあ、三島が大好きな神話上の英雄・スサノオの暴力を、労働リーダーのストライキとして現代に移し換えたのだな。これは、破壊するための祭だ。スサノオの近親相姦の対象である姉のアマテラスは、高天原で糸を紡いでいたはずだ。近江絹絲の女工たちが糸を紡ぐシーンは、彼女たちが現代のアマテラス(織女)であることを示している。ヒロインである弘子の入院は、アマテラスの岩戸籠もりと対応しているのだろう」、などという程度の単純な感想に過ぎなかった。

先程も述べたが、『絹と明察』が連載されたのは、昭和三十九年の一月号から十月号までである。三島がスサノオとアマテラスの神話を現代社会に蘇らせた異色劇『美濃子』は、前年の昭和三十八年七月十七日に脱稿され、黛敏郎の作曲で

オペラになる予定だったが、作曲が遅れたために中止された。その台本は、思想上の理由で文学座の上演が中止となった『喜びの琴』と共に、昭和三十九年二月に新潮社から上梓された『喜びの琴 附・美濃子』(この時期の三島が、「スサノオ」に取り憑かれていたのは、確かである)。

ただし、スサノオとアマテラスの神話を現代小説に置き直したとする私の直感も、直感のままで放置されていた。そして、それ以上突き詰めて『絹と明察』について思索することも中断されていた。

1・4 三島由紀夫の旧蔵書との遭遇

ところがつい最近になって、偶然にも笛吹川芸術文庫の幡野武夫氏から、何冊かの書籍を見せていただく機会があった。何と、それは三島由紀夫の旧蔵書であった。

むろん、前記の『定本三島由紀夫書誌』によって、三島が書架に収蔵していた書物の名前だけはこれまでも部分的に知られていた(同時代の文学者たちの著書はこのリストから除外されている)。だが、それらの実物に直接当たって作品論を展開することは、従来はまったくなされてこなかった。この度、私の前に現れたのは、三島が手に取った蔵書のまさに実物なのである。

脂性だった三島がページをめくった際に付いたと思われる指紋まで、約四十年の歳月を越えてくつきりと残っており、それを見るだけでわたしの胸は烈しく動悸を拍った。しかも、鉛筆や赤鉛筆で膨大な線が引かれ、何十箇所も大胆な折り込みがなされていた。むろん、執筆の際に利用するための折り込みである。しかも、万年筆などで三島の書き込みがなされている箇所があったが、それは『絹と明察』の「ストーリー」と深く関わっていた。

すなわち、これらは三島由紀夫が『絹と明察』を執筆する際に直接に参看した資料群(の一部)だったのである。幡野氏から精査と熟覧を許可されて、これらの書籍をページずつ繙いてゆくと、『絹と明察』の誕生の秘密が驚くほどクリヤーに解読されていった。それはほとんど、生々しいと言ってもよい感覚だった。文学者の創作工房は、ほとんどの場合は秘密のうちに消滅してしまう。だから、文学者がどういう本に影響を受けたか、何をヒントにして作品を構想したか、具体的な細部の叙述に際して「資料」として用いた文献は何だったかなど、すべては作者の死と共に曖昧になってしまう。だから批評家も研究者も、作品研究や表現研究を行う時には、推測によって仮説を提出するしかない。説得力に欠けるこ

と、このうえもない。

ところが、『絹と明察』の場合は、偶然にも三島が直接に手に取って参考にした資料が現存していたのである。信じられないくらいに僥倖である。もしかしたら、自分に関することはすべて「伝説」にしておきたかった三島は、自分の創作資料がこのように白田の下に曝されることを喜ばないかもしれない。

だが、三島由紀夫という不世出の天才文学者の創作工房の奥深くに分け入って、『絹と明察』の生誕に立ち会えるのは、文学研究者にとって又とない好機である。三島が『絹と明察』を書いてから四十一年後の今日、三島の小説作法を振り返ることは、大きな意義が見出されることだろう。

1・5 これからの三島文学研究のために

本稿は、三島由紀夫が「近江絹絲のストライキ」という歴史的事実をどのように活用して『絹と明察』を書いたか、どのように歴史的事実を改変・あるいは変更して脚色したか、そして近江絹絲の人権争議とは無関係の『絹と明察』のコアの領域はどこであったか、などを解明する。できれば、なぜ三島が近江絹絲の人権争議に関心を示したのかという根源的な理由を、突き止めることができればと願っている。

三島由紀夫の心には、三島の的と呼ぶしかない人間観や世界観が根強く巣食っていた。それが、ある現実社会の出来事や事件によって浮上してくる。そして、モデルを持つ小説群となって結実する。それが例えば、金閣寺の炎上であり（『金閣寺』）、東京都知事選であり（『宴のあと』）、光クラブの社長の自殺だったりした（『青の時代』）。近江絹絲のストライキも又、三島の心の深奥から「三島的なもの」を発動させて浮上させた。

近江絹絲によって浮上した（浮上させられた）三島の深層心理が、日本社会の現実と烈しく切り結ぶ瞬間の火花。それを「仮説」や「印象批評」としてではなく、「実証」としてここに提出できることを、わたしは大いなる喜びとする。

おそらく三島文学に関して、彼の旧蔵書の書き込みを紹介し、それを踏まえて本格的な作品分析を行うのは、本稿を嚆矢とするであろう。その分析結果が、三島文学の真実を浮き立たせる結果になるのであれば、三島の霊も納得してくれるだろう。三島が「現実」を描くためにどこまで資料を利用したか、そしてどこまで資料から離れて「普遍化」できたのか。その達成度を見届けよう。

2 『絹と明察』の輪郭

新資料としての三島旧蔵書を分析する前に、迂遠かもしれないが『絹と明察』のアウト・ラインを描いておこう。この長編小説の組み立てを知っておくことが、新出の三島資料の意義を考えるための出発点となるからである。この小説は、全部で十章から構成されている。

『絹と明察』の本文を引用する際には、新潮文庫『絹と明察』（平成十四年発行・四刷）による。『決定版・三島由紀夫全集・第十巻』（新潮社・平成十三年）も必要に応じて参照する。

なお、一刻でも早く新資料の概要を知りたい読者は、「2」を飛ばして、「3」の「新資料の紹介」へと進みたい。

2・1 第一章「駒沢善次郎の風雅」

【名前を持たない男たち】

『絹と明察』のすべての章には、「駒沢善次郎の」というタイトルが付けられている。この小説では、女性の登場人物にはフルネームが与えられている。ところが、男性の登場人物の場合はそうではない。

駒沢善次郎というワンマン社長の日本的な経営で、駒沢紡績は急成長した。この駒沢には、苗字と名前が揃っている。しかし、駒沢紡績で働く労働者で、ストライキのリーダーとなった逞しい若者は、「大槻」とだけ呼ばれる。

戦前の右翼崩れで、大槻たちのストを指導する労働運動の幹部は、「秋山」。

これまた戦前の右翼ながら、ヘルダーリンとハイデッガーに魅せられた知識人で、戦後は政財界の黒衣として跳梁跋扈し、なぜか駒沢に近親憎悪の感情を抱き、駒沢を破滅させるために大槻や秋山を陰で操った男の名前は、「岡野」。

その岡野に闘争資金を援助して、新興勢力の駒沢紡績を叩こうとした大手（大紡）の桜紡績の社長は、「村川」。

大槻・秋山・岡野・村川の四人の名前がフルネームで紹介されることは、最後まで一度もない。『絹と明察』の男たちは、駒沢善次郎以外は、符丁の如き苗字だけで呼ばれる。男とは、「名前」を必要としない存在なのだ。戯曲で言えば、「日本人A」「日本人B」「日本人C」「日本人D」に該当するわけだ。

男は、名前を与えられない点で、既に女たちに敗北している。なぜなら、『絹

と明察』の女たちには苗字と名前が揃っているからである。女には顔と肉体があり、男には観念しかない、ということだ。

【戦前の蘇り】

冒頭の時代設定は、昭和二十八年九月。末尾の時代設定は、昭和二十九年十月二十七日。日本が独立を回復し、朝鮮戦争も終息した直後の一年間が、三島によって選ばれた。戦前の「浴衣・日本髪・軍艦マーチ・女剣戟」などが、復古ブームに乗って復活していた。第八章でも「女剣戟から軍艦マーチまで、すべてがよみがえるこの時代」とあり、第十章でも「へんな、いつわりのよみがえりの時代」と繰り返される。

戦後にいち早く欧米的な経済理念を導入した十大紡（その欧米型の近代化路線のシンボルが、桜紡績の村川である）に対抗して、義理と人情、御恩と奉公をモットーとする旧式の日本型経営を展開したのが、駒沢善次郎。駒沢は、まさしく戦後社会に蘇った「戦前の亡霊」である。

駒沢という「戦前の亡霊」と対峙するのが、戦前に「聖戦哲学研究所」を作った政財界にたいパイプを作った岡野である。戦後の岡野は、今やフィクサーとして金儲けすることは世間から認められているが、彼の「聖戦哲学研究所」の思想の蘇りだけは絶対に戦後社会から容認されなかった。

岡野もまた「戦前の亡霊」なのだ、蘇りを禁じられて久しい。その岡野が、財界に頭角を擡げてきた駒沢善次郎という「戦前の亡霊」と出会うのが、『絹と明察』の第一章の山場である。岡野の思想は、どうすれば戦後日本に蘇りうるのか。もう一人の「戦前の亡霊」である駒沢を倒さねば、岡野の蘇りはない。

岡野が取り憑かれている「戦前の亡霊」とは、ドイツ浪漫派のヘルダーリンやドイツ哲学のハイデッガーと響き合う「日本的なるもの」を抽出しようとする姿勢である。すなわち、戦前の保田與重郎が高唱した「日本浪漫派」の世界である。

「戦前の亡霊」として、純粋に日本的な土俗派が駒沢善次郎、「戦前の亡霊」として、欧米思想と日本思想の一致点を見出そうとする折衷派が、岡野。とは言いながら、日本に存在するはずのないドイツ的な明澄さを、戦前の岡野は日本にもあると言い立てて、甘い汁を吸った恥ずべき過去がある。

この二人に対して、戦前も戦後も一貫して「日本的なるもの」を「亡霊」として忌み嫌い、排除しようとする純粋な欧米思想派が、村川。

岡野は、半身は駒沢と、半身は村川と重なる「鶴」の如き醜悪な怪物である。

彼らの「三つ巴」の思想戦争が、これから開幕する。その中に、若い大槻も乱入して、波紋と混乱がさらに拡大する。

【駒沢の風雅と、大惨事】

琵琶湖に面する彦根に工場のある駒沢紡績は、「十大紡」と呼ばれる老舗の紡績会社グループと肩を並べるところまで成長した。五十五歳の駒沢善次郎は十大紡の社長を招待し、琵琶湖遊覧に繰り出す。すなわち、天下の美景として名高い「近江八景」を遊覧船から存分に鑑賞してもらおう、というのだ。駒沢は、広重の浮世絵に關しても一家言を持っている。

その琵琶湖遊覧の最中に、駒沢紡績では新入社員歓迎行事の映画試写会が催されていた。不慮の失火から会場はパニックに陥り、二十一人もの死者と三百十五人の負傷者を出す惨事となった。駒沢の美しい風雅は、宿命的に若者の犠牲の上に立脚していたのである。

たまたまその場に居あわせた岡野は、近江八景の一つ「堅田の落雁」の点景である浮御堂の千体仏を見て、奇妙な思いに捕われる。

『仏教というのはおかしなもんだ』と岡野は考えていた。『慈眼で見張れば、湖上の船も人も難から救われるという考えなんだ。こんな死んだ金いろの目で』

『絹と明察』では、さほど仏教への言及は多くない。だがこの第一章では、駒沢の人間と世の中を眺める目を、千体仏という仏教に喩えている。この仏教的な戦前日本の亡霊に、ヘルダーリンを愛してやまない岡野という亡霊が戦いを挑むのである。亡霊同士の戦いに、果たして勝者はあるのか。

さて、この大惨事を、帰京した岡野は、新橋の「文学芸者」である「原菊乃」に話して聞かせる。菊乃は、芸者を止めて、琵琶湖のほとりの駒沢紡績の寮母に転身する決意を固めた。この菊乃が、これからの重要な「舞台回し」となる。

菊乃には、「文学趣味」と「節約精神」があった。文学趣味は駒沢の「風雅」と重なり、「節約精神」は駒沢の経営方針と重なる。彼女が駒沢と関係を持つのは、必然であった。

2・2 第二章「駒沢善次郎の事業」

【菊乃の転身】

文学芸者というのは、「嫌味な文学的修飾」で「節約精神」を糊塗する芸者の謂である。死んだバトロンから纏まった金額をもらった菊乃は、余生を琵琶湖のほとりですえようとする。本文には、「物語の美しい主人公のように、湖に入水する空想をも愉しんだ」とある。

ここで、菊乃の脳裏にあるのは、『源氏物語』宇治十帖の浮舟や、堀辰雄の『曠野』の女や、夏目漱石『草枕』の那美などの複合したイメージだろう。「近江」という地名からは『曠野』が最も近いが、「厭離の心」と三島が書いているのは菊乃の近江行を一種の「出家」と位置づけているからだろう。女性だけの空間である近江絹糸の女子寮は、「尼寺」に当たる。ならば、菊乃は浮舟か。

この菊乃を転身・変身させたのは、岡野の一言である。菊乃は、美しい湖畔で本当の「出家」生活を送ることができるか。それとも、「出家願望」や「入水願望」というのは、「物語の甘さ」であり、文学的虚飾でしかないのか。やがて、菊乃は文学に絶望し、現実の女になってゆく。つまり、「還俗」するのだ。

【絹でつながる人々】

駒沢善次郎は、「絹のような肌」を持っていた。そして、芸者である菊乃は、お座敷で毎晩のように絹の着物を身に纏っていた。菊乃は、自分の衣装の「故郷」である駒沢紡績を訪れて、寮母となる。

女子寮に住む女子工員たちは、いくつかの工場で苛酷な労働を強いられている中でも、悲惨な労働環境にあるのは、絹紡工場である。

そこに飛び散る屑繭の埃と異臭は、建物の古さと共に、陰惨の気を湛え、驕奢な絹の息つまるような出生の暗さがそこに滲んでいた。下端の針が絹紡糸からじゅんじゅんにごみを取除いてゆく鉄の水車みたいな機械に、中腰でのしかかって、その鉄輪をゆるゆると廻しつづける女子工員は、姿勢からして挫問めき、吐く息もその蒼ざめた顔から著くきこえた。

これが、「絹の秘密」である。「驕奢な絹」を産み出す女子工員たちの吐く息が「著く」聞こえたというのは、「絹＝シルク」と「著く＝しるく」の言語遊戯であるつか。

駒沢紡績の敷地内の井戸には、「すでに十何人の少女が身を投げて死んだ」と言われている。菊乃は文学的趣味によって、「入水願望」を抱いているが、現実の女たちは「文学」ではなくて厳しい現実に耐えかねて入水するのだ。

菊乃は、また「文学の側」にスタンスを置いている。だから、寮母となつてか

ら月に一度、駒沢に寮の実態を告白（密告）に行くことになつても、駒沢と男と女の関係を結ぶに至らない。なぜなら、駒沢は「現実」の化身なので、彼女の文学的趣味を満足させるような「修飾」に欠けると、菊乃には思われたからである。

【手紙の開封】

寮母の本務は、女工たちの監視役だった。信書の開封が、日常的に行われていた。寮母の一人である江木が、雨を利用して郵便物を濡らして開封する場面は特にリアリティがある。もしかしたら、三島の脳裏には、長塚節の、

春雨に濡れてとどけば見すまじき手紙の糊もはげて居にけり

という歌がよぎったかもしれない。

【大槻と弘子の紹介】

この第二章は、寮母たちの会話の中で「石戸弘子」という若い女子工員が登場させている。そして、寮母たちと菊乃の目に映った「まだ十九歳のくせに、結構大将ぶってる」「切れ者」の大槻が描写される。

駒沢紡績で働く若い二人の男女が、これからの『絹と明察』の展開の鍵となる。なお、弘子の苗字が「石戸」であることは、「天の石戸（菅戸）」からの連想だろう。前述したように、三島には『美濃子』という戯曲で、ササノオとアマテラスの神話を現代に蘇らせたことがある。弘子が紡績工場の中でも糸を結び屈指の名手であるように、アマテラスも織姫である。すなわち、弘子がアマテラスであり、大槻がササノオなのだ。

ならば、ササノオの如き大槻の怒りは、いつ、どのようにして爆発するのか。大槻たちが決起した争議では、会社側に「結婚の自由を認めよ」という要求がなされた。大槻と弘子の恋愛は「お家の御法度」であり、いわば「タブー」なだった。姉のアマテラスと弟のササノオの愛が「タブー」であるのと同じように、タブーへの挑戦。それが、ストの一つの原因だった。

2・3 第三章「駒沢善次郎の賞罰」

【岡野の画策】

駒沢善次郎の破滅を企む岡野は、スパイとして菊乃を駒沢紡績に送り込んだ。そして、業績の急成長の蔭で、破裂寸前になっている労働管理の軋みに乗じて、

「騒動」を起こすとする。

岡野は、視察のために彦根を訪れる。そして、ハイデッガーやヘルダーリンを口ずさみながら、彦根城の天守閣に登り、八景亭の名庭から天守閣を遠望したりする。「彦根城の天守閣」の勇姿は、三島のかつての名作『金閣寺』の世界を連想させずにはいない。

彦根城の天守閣は、「遙かなるもの」のシンボルであり、「子の前に圧倒的な権威をもって聳え立つ父性」のシンボルなのでもある。

彦根城で菊乃と密会した岡野は、偶然にも大槻と弘子の密会を目撃する。ちょっとした諍いの後に打ち解けた四人は、急展開で駒沢を含めて五人で話し合うことになった。

大槻と弘子は、男子工員と女子工員のそれぞれの立場から、駒沢紡績の労働条件の不備を社長の駒沢に訴える。このあたりの岡野は、まさに「黒衣」として登場人物のすべてを操っているような印象がある。

【ハイデッガーの実存】

岡野は、ハイデッガーの「実存」の意味を反芻する。「つまり、実存は、自己から外へと漂い出して、世界へひらかれて現実化され、その根源的時間性と一体化するのである」。また、「行動はただの行動で、それをしたたかに味わい直してたのしむには思想が要つた」ともあり、その「思想」が、たとえばヘルダーリンの「憧憬」だった。

これから、『絹と明察』は近江絹糸で起こつた一大争議を描く。その若きリーダーが、大槻である。『絹と明察』は、まず大槻が「行動」によって「世界へひらかれる」実存を獲得する経緯を語る。そして、最後には駒沢亡き後の駒沢紡績の新社長として「思想に生きる岡野」が、「行動の岡野」として現実世界へと漂い出すことになる。遙か彼方にあつたヘルダーリンの言う「憧憬」と、遂に岡野は一致するのだ。

この『絹と明察』を書き了えた三島が「豊饒の海」シリーズへと走り出し、楯の会の活動にのめり込むのは、必然だったかもしれない。

【駒沢善次郎という人物】

岡野・菊乃・大槻・弘子の四人が、駒沢と対面する。駒沢を除く四人について三島は面白い叙述をしている。

そこには人生の必須の諸要素、青春と正義感と恋と吝嗇と純情と野心と権力欲と世間智とが、ばらばらに配分されていた。これが一身に具わつていたら、どんなによかつたろうに！

そう、「青春と正義感と恋と吝嗇と純情と野心と権力欲と世間智」を、「一身に具」えている化物が、駒沢善次郎という人物だったのだ。「人間、正確には「日本人」全体の縮図が、駒沢善次郎なのだ。

日本国、あるいは日本民族の心性の象徴といえ、それは限りなく「天皇」のイメージへと接近するだろう。私は『絹と明察』を初めて読んだとき、「駒沢」という人物名の背後に、「熊沢天皇」との発音類似を感じて面白く思つたものだった。

【アイヒェンドルフ】

岡野から呼び出されて八景亭に現れた駒沢の目に、大槻と弘子の若々しい姿が映つた。この場面を演出した岡野の証言では、

この瞬間の二人は実に美しく、岡野はアイヒェンドルフの小説中の一場面を見るような気がした。

と称えられている。『定本三島由紀夫書誌』には、三島旧蔵書として、アイヒェンドルフ『タウゲニヒツ・大理石像』が載っている。武蔵大学図書館で閲覧したところ、大変に綺麗な、いかにも三島好みの装幀であった。独逸ロマンチック叢書の第十四巻で、青木書店から昭和十九年一月に上梓されている。関泰祐の訳で、「タウゲニヒツ」「大理石像」「デュランデ城物語」の三編が収められている。

三島が『絹と明察』で連想したのは、この中の「タウゲニヒツ」である。この作品は、後に同じ訳者の手によって「愉しき放浪児」と改題されて、岩波文庫にも入つた。その最終場面で、放浪児が「伯爵令嬢」と思い込んでいた門番の美しい姪と晴れて結ばれる浪漫的な場面が、三島の念頭をよぎつたのだろう。

【駒沢善次郎の賞罰】

大槻と弘子の勇気ある「社長への直訴」に対して、駒沢はどのような「賞罰」を下したか。大槻は、より苛酷な「梟労働」という深夜労働を課せられ、弘子は最も苛酷な絹紡工場へと転属させられた。

駒沢は、二人の勇気を称賛することなく、厳罰を以て答えた。その真意は、どこにあつたか。その真意は、若い二人に伝わつたか。それが、今後のストーリー

を左右する。

2・4 第四章「駒沢善次郎の家族」

【「強い女」としての房江】

第四章に到って初めて、駒沢善次郎の妻・房江が紹介される。彼女は治癒の見込みのない肺の病気で、京都の宇多野療養所に長期入院中である。しかも、医学の進歩で、死ぬこともできない。言わば、永遠の「岩戸籠もり」をしているのだ。そして、天の岩戸の間の中から、夫の経営する駒沢紡績を見守り続けている。なおかつ必要に応じて、この「烈婦」は病床から駒沢紡績を操作することすらある。岡野が「黒衣」でありながら最後には表舞台（実存）へと現れ出ようとするのに対して、房江は最後まで「黒衣」の役割に徹する。

彼女は、単純に駒沢紡績の発展を祈っているのではない。世界と人類の破滅をすら願っている。まさに、男たちの生殺与奪の権を握る太母神（グレートマザー）のようだ。本稿で、彼女をアマテラスに喩えるゆえんである。付添の野辺がいつも「毛糸の編み物」をしているのは、彼女が弘子と同じく「織女」であることを示している。

一年に一度しか夫の見舞いを許さぬ房江は、昭和二十九年一月四日に現れた善次郎に「変化の兆し」があるのを見抜く。この鑑識眼は、年に一度の死者を弔うための大文字の送り火を凝視することで鍛えられたものでもあった。駒沢は、大槻と弘子を罰したことに自信が持てず、自分の処置が正しかったかどうか、房江に尋ねたのだ。

ワンマン経営者である駒沢の決断は、「烈婦」強い女」である妻の房江の了解の下に初めて可能なものだった。これは、三島の男女観の根幹をなすものであり、『サド侯爵夫人』や『天人五衰』とも通じている。私はこれを「魔笛症候群」と仮称し、論文を書いたことがある（『文藝別冊・三島由紀夫』河出書房新社・平成十七年）。

【「家長」としての駒沢善次郎】

房江の納得と了解があれば、駒沢は自信を回復できる。

駒沢は家長として、まちがってはいなかった自分を信じたのである。

この「家長」という言葉は、重要である。「家長」は、家族意識によって結ば

れた企業の「社長」であるに留まらず、家族意識によって経営される「国家の長」天皇」をすら連想させるからだ。

奥野健男は、「この主人公駒沢善次郎は今の天皇（昭和天皇）のことを象徴的に書いたのだ」と三島本人から聞いた直話を書き留めている（『三島由紀夫伝説』新潮社、平成五年）。尤も三島は、いつの場合にも「仮面の告白」を信条としていたから、この告白を百パーセント真実だと信用するわけにはいかない。

ただし、十大紡と肩を並べた新興勢力としての駒沢紡績が、欧米先進国と匹敵する国力を回復しつつある戦後日本と相似関係にあることは、確かだ。しかし、天皇という「父系制」を奉じる国家が、アマテラスという女神を「天皇の権威の源泉」として仰いでいる点に、「男と女」の微妙な力学も読み取れる。

戦後、昭和天皇は「人間宣言」をした。してしまっただけで、三島は複雑な思いを抱いたに相違ない。天皇を愛するが故に、批判する。批判するがゆえに、深い愛情を再確認する。そういう三島の天皇観が駒沢善次郎として造型され、天皇が愛した（であろう）国民を「労働者」として描こうとしたのだらう。

【弘子の入院】

房江が入院している療養所に、絹紡工場で体を崩した弘子が入院してくる。これは、一時的な「岩戸籠もり」である。そして、彼女の入院中に「駒沢紡績のストライキ」が決行されて、世界は大混乱し崩壊の瀬戸際に立つ。彼女の退院は、ストライキの終結とほぼ同時期であり、世界の綻びは再び修復された。

弘子もまた、神話のアマテラスである。房江が「大アマテラス」とすれば、弘子は「小アマテラス」と言える。大アマテラスである房江の経済的援助で、小アマテラスである弘子は無事に健康な肉体を取り戻すことができた。そして、弘子は、ストライキの英雄・大槻を「子どものように慈しむ母親」の役割を發揮してゆく。

なお、弘子は入院に先立って、妊娠した胎児を中絶している。三島は、もしかしたら「ヒルコ」の神話を意識しているのかもしれない。中絶した母胎は、今後の受胎が脅かされるという恐怖に駆られる弘子は、「石女」だった房江と類似する立場に置かれることになった。

房江と弘子は、それぞれ駒沢と大槻を操る「黒衣」として共通している。この四人を結びつけるキー・パーソンが、戦死した駒沢善雄（駒沢善次郎の子）である。房江は、駒沢の心を悩ませている大槻が「ひよっとしたら善雄はんの亡霊か

もしれへん」と、言っている。

ここには、「豊饒の海」シリーズの鍵である「輪廻転生」のテーマが、透けて見える。継母の房江に懐かずに、そのまま戦死した善雄。そして、社長の駒沢に対する複雑な心境からあえて敵対した大槻。「善雄」大槻」という見立てを房江が行ったことで、『絹と明察』の人間関係は一挙に安定したのである。

2・5 第五章「駒沢善次郎の洋行」

【岡野の大槻への「手紙」】

『絹と明察』に大槻は「少年」として登場し、ストライキを了えて「青年」へと成長する。この脱皮に際して、良かれ悪しかれ、大槻は「父性の三形態」を目撃し体験した。

一つ目は、反発の対象としての「強制する父親」。これが、駒沢善次郎の役割である。

二つ目は、「入れ知恵する父親」。人生の先輩として、経験の乏しい若者に助言する存在である。この役割を、「表立って引き受けた」のが、全織同盟の幹部としてストを指導した「秋山」だった。

三つ目は、自分の口からではなく、他者の口を借りて大槻を導いた岡野。「黒衣として秘密裏に入れ知恵する父親」が、岡野である。

大槻は、「父親の三態」を知ることによって、自分もまた「父性」を自覚し、獲得してゆくのだ。

さて、岡野は、巧妙な手紙を書いて、大槻にストライキの決起を呼びかけた。「京都学派」の進歩派知識人を偽装したのである。岡野の老練な言葉は、若く純粋な大槻の正義感を攪り、鼓舞した。それが、「言葉の魔力」である。昭和四十五年十一月二十五日。三島が渾身の力を込めて書いた「檄」は、自衛隊員の心にほとんど響かなかつた。『絹と明察』の岡野の手紙は、「虚構」小説「なればこそ魔力を發揮し得たのである。そのことは、あるいは三島自身も知悉していたかもしれない。

【転機に立つ菊乃】

大槻が人生のターニング・ポイントを迎えつつある時、菊乃もまた大きな転機に立っていた。彼女は、「湖に入水する」という美しい死が自分には訪れるべく

もないという現実に直面した。彼女は、悲劇的なものに高い価値を認める「文学」に幻滅した。あるいは、彼女は文学から見捨てられたのだ。

菊乃の「文学趣味」は、「若さに対する恐怖」に根ざしていた。我が身から失われつつある若さを、花柳界の若い世代に発見することへの怖れである。菊乃は現実逃避の手段として「文学」を必要としていただけだった。だから、「理財の趣味」を發揮するのが、本当の姿だったのだ。

ここで菊乃は、文学から現実へと大きく舵を切った。彼女の転機は、岡野の岐路をも暗示する。そして、駒沢善次郎の人生の大きな岐路をも。

【ニューヨークでストの第一報を聞く】

駒沢善次郎は、ヨーロッパからアメリカへと洋行していた。岡野に資金を渡し駒沢紡績の攪乱を図っていた村川と、駒沢はニューヨークで出会う。「昭和二十九年六月」と、時間が明記される。ここからは、ストライキの進行状況と、駒沢善次郎の心に生じた複雑な波紋を描くために、時間の経過が重要なポイントとなる。時間ないし日付の頻繁な明記は、『絹と明察』のリアリズムを支えている。

ニューヨークでストの第一報を聞いて耳を疑った駒沢は、すぐに帰国しなかつた。ワシントンへとさらに視察の旅を続けたのである。それは、彼がフリー美術館の北斎を見たからだった。

第一章で強調されていた駒沢の「風雅」「風流」が、彼の早期帰国を阻んだ。それが、事態を悪化させた。

2・6 第六章「駒沢善次郎の胸像」

【若者たちの神話的な大冒険】

この章から、駒沢紡績で起こった人権ストの段階に入る。小田切秀雄は「批評におけるリアリズム」『絹と明察』をめぐる浪漫派の批評について（『文学』昭和三十九年十二月号）で、このストライキの描写にリアリズムが欠如していると指摘している。小田切は返す刀で、『絹と明察』を称賛した磯田光一と奥野健男の批評のリアリズムの欠如を指摘する。磯田論は『図書新聞』昭和三十九年九月二十六日の「時評」である。奥野論は、『東京新聞』昭和三十九年十一月四日夕刊の読書欄。磯田は、『絹と明察』の秀作ぶりを絶賛していた。それに、小田

切は猛反発したのだ。

磯田の批評眼への懐疑は、松原新一なども表明していたことではある。だが小田切の批判は、二十一世紀の現在でも有効だろうか。三島由紀夫という文学者が求めた「リアリズム」「リアリティ」とは、小田切が考えているような概念のものだったのだろうか。

三島は、ここで若きサノオが強大なヤマタノオロチと戦う神話劇が、現代においても迫真的に再現しうるのだということを書きたかったのだと思われるし、それが三島の考えるリアリティだったのだ。むろん、駒沢善次郎がヤマタノオロチである。駒沢善次郎の経営理念と賞罰方針によって、弘子は病んだ。これはアマテラスの岩戸籠もりであると同時に、人身御供になりかけたクシナダヒメの姿なのでもあろう。

大槻は、若者の代表として、サノオの神話を現代に再現する。第六章が「木村重成の首塚」のエピソードから始まるのも、ヤマタノオロチ退治の神話を読者に想起させるためだろう。「冒険」とか「秘密」とかの、神話・物語の必須の構成要件が『絹と明察』には鏤められている。

ストによって駒沢善次郎の胸像を覆っていたガラスのケースが破壊されるのは、むろんヤマタノオロチが退治されたという神話を再現したものである。ヤマタノオロチは、死んで「アメノムラクモ」「クサナギ」という名剣をこの世に残した。駒沢は、死んで何を残すのだろうか。

【大槻と岡野の成長あるいは変容】

大槻は、闘争の過程で「秋山」という大人を知り、「若さ」に加えて「人の悪さ」をわがものにした。三島が「人の悪さ」と言っているのは、世間智というだけの意味ではない。サノオがヤマタノオロチを騙して酒を飲ませて倒したように、そしてヤマタケルが女装してクマソタケルを屠ったように、「知恵の力」による怪物退治の手法を「必要悪」として容認したということである。

つまり、怪物退治とは、退治した者が退治された者の属性を我が身に吸収・併呑するというドラマだったのである。大槻は倒した駒沢の心を取り込み、岡野もまた駒沢の「泥沼」をわが精神世界の「明察」の中に注入せざるをえなくなる。

大槻や岡野の心に新たに宿ったもの。それが、アメノムラクモに対応する「宝物」だったのである。大槻に関しては、

実際、冒険と愛とがあったら、他に何が要ろう。

とある。「冒険と愛」に加えて大人の人生に必要なもの。それは、「芸術」である。広重や北斎を愛してやまない駒沢の「風雅」と「風流」こそ、スト勝利後の大槻の人生に必須のものである。

そして、ヘルダーリンとハイデッガーを愛する岡野。第六章では、洋行中の駒沢がヨーロッパから日本に送った花の種が日本の土壌に根づかない、と記される最終章で、岡野はわざわざ自分の口でその事実を指摘までしている。この時、岡野はヘルダーリンやハイデッガーが日本の精神風土では美しい花を咲かせることのないことを痛感させられるのだ。岡野は、自らの足を下ろしている大地が罅割れるのを感じたに相違ない。この大地の裂け目から落ちてゆく奈落の姿こそ、西洋的「明察」を経系とし、日本的な「絹」を緯系として織り上げられた「現代日本人の心」の引き裂かれた文様なのでもある。

ただし、その「奈落」と思われた所が日本人の真の「故郷」であったというのが、『絹と明察』の大どんでん返しである。

【六月六日】

スト決行は、昭和二十九年六月六日の深夜、午前二時だった（正確には日付が変わって六月七日になっている）。大槻たち若者は、彼らを高みから見おろす彦根城の天守閣の如き駒沢の権威に対して敢然と戦いを挑んだ。

決行後直ちに女子寮を占拠し、女子工員や寮母たちを監禁したのは、サノオがアマテラスに仕える女たちに狼藉を働く神話の再現である。むろん、『絹と明察』のモデルとなった近江絹絲の人権ストにおいて、事実として男子工員による女子寮への乱入は起こった。ただし、その事実自体にリアリティがあるのではなく、「サノオ神話と現実とが二重写しになっている」という見立ての中にリアリティが生起するのだ。

午前二時のスト決行は、電燈が消えることが合図だった。世界は、一瞬だが「常闇」となった。むろん、アマテラスの岩戸籠もりの神話が再現されたのだ。

【父の怒り】

ストの計画を事前に察知した工場の幹部たちは、執拗に大槻を籠絡しようとする。この時、大槻は駒沢の胸像を見ながら訊問に耐え切った。「大槻と胸像とのあいだの直接の無言の会話が交わされたようでもあった」とある。この会話が現実になされたのは、第八章「駒沢善次郎の対話」である。「その（駒沢の）

魂は今こそ呼び出し、青年にのしかかり、圧伏し、闘うべきだった」とも、ある。この父の怒りは、第七章「駒沢善次郎の憤怒」で描かれる。

これから、「子」としての大槻は、「父」である駒沢の怒りを体験し、対話する。日本人にとっての「父」は、血縁につながる「親子」ではなくて、精神的な紐帯に根ざす「親子」である。そして、それがアメリカ的経営と一線を画す駒沢の日本的な経営理念なのでもあった。同時に、「陛下の赤子」である日本国民が天皇に寄せる思いの実質なのでもある。

神話や物語で描かれる「天皇の怒り」の激しさ。勅諭を蒙ることの恐ろしさと忝なさ。一転して、天恩に感謝する歓び。戦後日本人は、ただの一度も天皇の憤怒を全身に浴びて恐懼したことがあっただろうか。

駒沢が当惑の段階を経て、純粋な憤怒に駆られたとき、『絹と明察』は戦後日本の現実を越えた。すなわち、小田切秀雄的なりアリテイを喪失した。にもかかわらず、神話や物語や御伽草子などで何度も描かれた「天皇の純粋な怒り」と重なることで、神話的なりアリズムに到達したのである。

【大槻に拒まれる菊乃】

スト決行を知って、菊乃は大槻の側に走ろうとする。自分の「美しい破局」を望む「最後の文学趣味」が発露して、彼女にそうさせたのだ。だが、菊乃は大槻に拒否される。

「我が身を犠牲にして若者たちを支援し、古い社会を破滅させる女」という菊乃のセルフ・イメージは、幻影だった。真実の菊乃は、「若者を抑圧する権力者の愛人」でしかなかった。

菊乃は、文学にすら拒まれたのである。なぜなら、彼女はただの一度も文学を純粹に愛したことなどなかったから。

2・7 第七章「駒沢善次郎の帰朝」

【創世記とハルマゲドン】

ストを決行する大槻たちに、外部から支援する繊維同盟の仲間が加わった。「それは谿谷の細流れが、ついに大河に合したよつな感動であった」と書かれている。この比喩には、もしかしたらヘルダーリンの詩が踏まえられているのかもしれない。

浄福のスエヴィエン、わが母よ！

輝かしい姉妹なるかなたのロンバルダに似て、

おんみもまた

百川の細流に貫かれている。 「さすらい」

そこには、険しい河岸に沿って

小径が行き、河の深みをめざして

細流が下る、（以下略）

「追想」

そこ、葡萄酒の

風吹く頂から

ドルドーニュが流れ下り、

そして壮麗なガロンヌと

合して海に拡がりつつ

河は流れ出る。

「追想」

奥山の源流の細流はやがて大河となり、海に注ぐ。「川」よって、「山」と「海」とが結合される。海員組合の仲間たちから、労働の苦悩を聞かされた大槻は、「世界はまだ生乾きなのであった」「思っていたほど、世界は竣工していないのではないか？」と考える。

昭和二十九年六月六日。喧噪と怒号の中で、大槻にとっての新しい世界が産声を上げようとしている。すなわち、創世記である。そして、駒沢にとっては世界の崩壊でありハルマゲドンの開始である。ただし、『絹と明察』を読了した読者には、大槻の創造した世界の中に、駒沢の世界がまさに合流している事実が気づかされるだろう。大槻自身がどんなに駒沢の世界を排除しようとしても、最愛の弘子が駒沢への情愛を隠そうとしないからである。

【ヘルダーリンの影響の大きさ】

闘争の支援に現れた海員組合の同志たちは、皆の雰囲気を変えた。

かれらは暗い絹の湿った世界に、荒々しい海の力を齎したのだ。

「絹の世界」は、「海の世界」と繋がっている。ヘルダーリンの「追想」で、山から流れ出した川が海に注ぐという箇所は、既に引用した。この「追想」には、次のような箇所がある。

祭の日には

同所の小麦色の婦人たちが

絹さながらの地面を歩くのである、

三島は、この箇所を『絹と明察』で引用していない。ハイデッガーは『ヘルダーリンの詩の解明』で、「祭の日とは『feier』「休業、祝祭」の日である。まず第一に『feier』「休業する」、「祝つ」は平日の行為をやめること、仕事を中止することを意味する」と語り始め、祭が「人間と神々の婚姻の祭である」と説き進め、「婚姻の祭の日、婚礼日が詩人の誕生日を規定し、則ち、開かれたものを照らしつつ明るくする夜明けを規定し、その結果詩人は自らの言葉が云わねばならぬもの、聖なるものが来るのを見るのである」と結論づける。

三島の心の深層には、ヘルダーリンの「追想」などの詩が住みついていた。「婦人」と「絹」のイメージ結合は、「近江絹糸の女子工員」という存在を三島に親しく感じさせたことだろう。そして、「休業する」、「仕事を休止する」ことはそのまま近江絹糸の女子工員たちの「ストライキ」を意味している。これは、彼女たちの「祭」なのだ。

少し先回りするが、第八章で、病床で争議勃発を聞いた房江のことが書かれている。

房江は目を閉じて、若い荒々しい力があの古い工場を片端から叩き壊してゆく新鮮な響きをきいた。それはもしかすると、彼女が望んできたお祭りだった。

房江は、病によって「休業」を余儀なくされている。それに、工場の労働者たちが加わって、巨大な「お祭り」となった。この「お祭り」の中に、ヘルダーリンの「追想」の「祭の日には」というフレーズが響いていないだろうか。「ヘルダーリンの詩の解明」には、「あたかも祭の日に……」という詩も注解されている。

駒沢紡績で絹を紡いできた房江と、弘子。二人は、入院という点で人生を休業する者同士である。だからこそ、連繋できるのだ。

そして、私は思う。三島由紀夫が「近江絹糸の人権争議」という社会事件に興味と関心を示したのは、彼の心の中に記憶されているヘルダーリンの「追想」という詩ゆえではなかったのか、と。

【「明察」という言葉】

『絹と明察』には、「絹」という言葉は何度も出てくるが、「明察」という言葉は一度も使われていない。だから、昭和三十九年十一月号の『群像』でなされた本多秋五・寺田透・小田切秀雄の鼎談では、「明察」という言葉がどこからきたかはつきりしない、という批判を受けたのである。

「明察」という言葉は、ヘルダーリンの詩に頻出する「明澄」あるいは「澄明」と深く関わっているのではないか。「光」と強く結びついた言葉であり、光によって明るく照らし出すという意味の「Licht」「Lichtung」「geleuchtet」などという言葉が浮かび上がる。ヘルダーリンの詩を解明したハイデッガーの文章にも、しばしばこれらの言葉は見られる。ハイデッガーの思想を研究した渡邊二郎『ハイデッガーの実存思想』にも、日本語で展開される叙述の中にこれらのドイツ語が何度も挿入されている。

三島由紀夫は、学習院時代からドイツ語を学んでいた。ゲーテの翻訳も、発表しているくらいである。三島と交遊を結んだドナルド・キーン氏から直接伺った話によると、三島は「ドイツ語文化圏の人」だったという。

『絹と明察』というタイトルは、ドイツ語ではさしずめ「Seide und Lichtung」とでもなる。ハイデッガーは、ヘルダーリンの詩「追想」の注解の中で、

地面は絹のようである。それは殆ど触れられぬ大地の隠された富の豪華なる光沢を繊細に静穩に放っている。

とも、述べている。第九章で大槻と新婚初夜を迎えた弘子は、次のように描写される。

彼女は青年のこつこついう虚栄心をも、柔らかく包み込むことができた。むしろ弘子は、しらすしらす母性的なものを身につけていたのだ。

大槻を「柔らかく包み込む」弘子は、まるで「絹」のような存在である。そして、「大地の豪華な富」を象徴する「母性」「地母神」なのでもある。弘子の「赤みがかった岩乗な手」の下には、絹の如く「安らかな優雅」が眠っている。

【五日後の帰国】

『絹と明察』のストーリーに戻る。六月六日に、スト開始。八日に、会社側の「工場封鎖」。そして、「争議勃発五日後」、すなわち十一日の夜に駒沢がアメリカから帰朝した。「五日後」というのは、絶妙の間合いであった。

ストの情報を得てすぐに帰国しなかったのは、経営者にあるまじき誠意の欠如と見なされても反論の仕方はなかった。「北斎を見たかった」という理屈は、世

間に通用しなかった。かくて、駒沢は「公然たる化物」として帰朝した。羽田に飛行機から降り立った駒沢の姿は、さしずめ襲来したヤマタノオロチである。

【菊乃と川舟】

記者たちに取り囲まれ、「新聞記者は赤だ」という失言をしてマスコミの餌食となった駒沢を、岡野と菊乃が救出する。むろん岡野は、これから駒沢をどん底に突き落とすために、偽りの救出劇を演出したのだ。

文学に裏切られた菊乃は、すっかり文学が嫌いになっている。そして、岡野が用意した駒沢のための隠れ家で、菊乃は彼と初めて結ばれる。この時、二人は「川舟」と「海の舟」の違いについて語る。川舟には虫が付かないが、海の舟には虫が付く。

「私なんか、さしずめ川舟ですね」と菊乃が言ったのへ、駒沢は「海へは出たし、虫は怖いし、いうところやな」と応じる。

菊乃は、水に身を投げて死ぬ女に憧れていた。たとえば、三角関係で傷ついた浮舟が宇治川に身を投げようとした物語のように。芸者という職業自体が、「川面の浮舟」のように、不特定多数の男たちを相手にする定めである。だが、菊乃は本当の厳しい「世界」である「海」へは一度も出たことがなかった。「生きる」ことへの恐怖が、それを妨げていたのである。

駒沢は「海老」のように、菊乃と交わる。彼は、海の世界を生きていた。

二人の「初夜」の様子は第八章で詳述されるが、菊乃は「弓なりの、桜いろの日本列島」という「風景」と化していた。菊乃は「日本」の風景であり、土である。駒沢は、日本の風景の美を風雅に眺め、土の上に宮殿を築いて繁栄する。「男＝天皇」である。すべての男は、天皇の分身なのだ。

【死と天皇制】

駒沢は、これまでの会社の発展の陰に、昨年事故のように「二十一人のうら若い死者を出した恐ろしい事件」があったことを思い出す。

この「影＝負」の領域をこれまで一手に引き受けてくれたのが、駒沢の妻の房江だった。第四章で、病身の房江は、「昔から、うちの工場で、胸を悪くして、国へかえって、若死しやばった女工さんは数知れずあったさかい、今あてが、一身に同じ病を享けて、罪亡ぼしをしとるのんや。そないな娘たちの怨念を、一身にさすこつてるのが、あての役目や」と吐露していた。

この第七章では、駒沢は唐突に皇居で起きた事故を連想している。

『恐れ多いたとえやけど、ついこないだも、一重橋の年賀の人波が、十六人も死人を出したもんや。まことに恐れ多いたとえやけど』

常に「若き死者」の存在を必要とする天皇制の負の領域が、駒沢紡績の世界とオーバー・ラップされている。駒沢は、すべての男がそうであるように、彼もまた一人の天皇なのだ。それも、かなり巨大な。

2・8 第八章「駒沢善次郎の憤怒」

【新旧の両雄の睨み合い】

この第八章は、『絹と明察』の最大の山場である。危機感が、最高度に盛り上がる。駒沢は、帰朝した翌日ではなく翌々日、すなわちスト開始七日目に、工場に姿を現す。「話せばわかることやし」と対話を求める駒沢の頭部を、問答無用とばかりに女子工員が竹竿で殴打し、駒沢は血を出して負傷した。

駒沢は、決して若き叛逆者たちを「返り討ち」にしようとしたのではなかった。融和し、和解しようとしたのだ。しかし、それは断固として拒否される。そう言えば、直前に語られている駒沢と菊乃の情事も、権力者が若い女子工員の生き血を啜り生肉を啖う「生贄の儀式」のカリカチュアだったかもしれないのである。

スサノオたる大槻が、自らの手でヤマタノオロチたる駒沢を退治したわけではない。だが駒沢は、「子どもたち」のように愛してきた工員たちから、見事なまでに否定された。このような父の否定願望こそ、大槻の心奥の衝動だった。

ただし、大槻を愛し、かつ大槻が愛する弘子の心は、それと違っている。弘子は、駒沢をすら自分の世界に取り込み、許容していたのである。

【天守閣の嵐と、父の怒り】

家族原理を会社経営に援用して、父の慈愛と敵罰を「子」に施してきた駒沢は、子どもたちから屈辱的な暴力を受け、負傷する。駒沢も、激怒の余りに、食堂閉鎖・給食停止の兵糧攻めを決断した。

この凄まじい怒りを表現するために設定されたのが、彦根城の天守閣の場面である。「風が募るに連れて雨が加わり」「風雨の窓」と本文中で書かれている嵐が、駒沢の怒りを象徴している。さすがに、雷鳴までは書かれていない。

天守閣からスト工員に占拠された工場を見下ろす駒沢の心に、真実の怒りがこ

み上げてくる。自分は彼らの「父」として、日照りと雨の最良のバランスを案分する勤めを誠実に果たしてきた。日照りと雨が、時として早魃や洪水という天の怒りになるように、彼らには時として嚴罰を与えることもあった。だが、それ以上の恩恵を施すことで、父としての「賞罰」は公平無私だったという自信がある。それが、「子」にはわかってもらえなかったのだ。

逆から見れば、大槻は「父を捨てた子」になることで、「父から見捨てられた子」もしくは「父を持たぬ子」となった。

これが、象徴天皇制の名のもと、真の天皇を頂点に戴かぬ戦後日本社会の比喩であり、父性原理（父親の権威）の崩壊した戦後日本社会の縮図であることは論を俟たない。

【女たちの力】

宇多野療養所では、社長夫人の房江と、大槻の恋人の弘子とが不思議な「協調関係」を作り上げていた。

ストの勃発した知らせを受けた房江は、「世界が確実に崩壊してゆく音」を枕の下に聞いた。そして、それは房江が烈しく望んでいたことでもあった！

大槻の背後にあつて、村川・岡野・秋山たちの権謀術数が駒沢の世界観を崩壊の危機に直面させていた。村川はそのために、二千万円もの資金を使った。一方の房江は、ただ病床に伏しているだけで、世界の崩壊を呼び寄せたのだ。この世界は、動き回る男たちや思索する男たちではなく、「ただそこにある」だけの女たちが創り上げ、維持し、滅亡させ、なおかつ再生させるのだ。

房江は弘子に、駒沢と大槻の対話の機会を作らせる。むろん、ストを収束させて、駒沢紡績を守るためではなからう。二人の対立が抜き差しならぬものであることを双方に骨の髄まで納得させるためである。女たちが、それぞれの世代で夫や恋人を操縦する術を身につけてさえいれば、世界は確実に維持できる。そのためには、男たちに挫折や敗北の味を教えねばならない。

ヤマタノオロチは、毎年一人だけ、人間たちが美女を人身御供として捧げていさえすれば、彼らをそれ以上には苦しめない。それどころか、外敵から人間を守る役割さえ果たしてくれるだろう。その世界観も、いつかは疲弊する。そして、若きスサノオの出現により、ヤマタノオロチは退治される。退治した側のスサノオは、何をするか。ヤマタノオロチに食われるはずだったクシナダヒメを、自分の妻とした。つまりスサノオは、クシナダヒメを食う「新たなヤマタノオロチ」

となった。それだけのことだ。世界の本质は、男たちの格闘が終わっても、何も変わらない。

第九章で、争議終了後に晴れて大槻と弘子は結婚する。大槻は、駒沢の酷使によって入院し、退院後間もない弘子の肉体を烈しく求めた。その直後に、駒沢は死の床に就く。駒沢の地位に、大槻が替わった。世間を騒がせた駒沢紡績の争議は、たったこれだけのための争議だったのだとも言える。

【岡野たちの述懐】

争議の拡大を見て、村川は「葉が利きすぎた」ような感じがした。駒沢を倒す側の岡野と秋山は、駒沢善次郎の失墜は「最後の共同体原理の崩壊」だと断じつつも、「自然」を体現した駒沢的なものに奇妙な親近感を感じている。しかし秋山と岡野は、まだ自分たちは勝者だと信じている。

岡野が信奉している「血と名誉」は「作られた不合理」であり、秋山が信奉している「進歩主義」も「作られた合理精神」である。男たちの知性が観念で作ったのが、岡野と秋山の世界だと言つたのだ。

「女の生み落せし者は、みんな滅びますよ。死にます。敗北します。とにかく、勝つのはわれわれ、女に生み落されない男だけだからね」

ところが、岡野も秋山も村川も、そして大槻も、三島の描き出した『絹と明察』の世界観では勝者ではない。そして、駒沢も敗者ではない。勝者は「女たち」であり（ここに菊乃を含めても良い）、敗者はすべての「男たち」なのだ。

2・9 第九章「駒沢善次郎の対話」

【三箇月間の停滞】

六月六日に勃発した争議は、解決せず、政府の調停も不調に終わった。それだけ、駒沢の怒りが強かったのである。

約三箇月間の膠着状態を打破したのが、九月三日の駒沢と大槻の対話だった。このお膳立ては、房江と弘子が調えた。そもそも、対立関係にある父と子が対話を交わすことは滅多にないことである。言葉という理性による解決ではなく、「無言」の和解、あるいは「行動力」による打倒という選択肢の方が好まれることは確かだ。

『源氏物語』の第一部。光源氏は、父の桐壺帝の女御である藤壺と過ちを犯し

てしまう。桐壺帝が二人の不義を知らなかったはずは、ない。しかし、この二人が面と向かって対話することはなかった。

同じく、『源氏物語』の第二部。今度は父子ではないが、親子ほど年齢の離れた男同士の戦いが設定される。准太上天皇として権力の頂点にある初老の光源氏。その光源氏の正妻・女三の宮は幼い少女だった。若き柏木は、女三の宮と過ちを犯す。その事実を知った光源氏は、柏木を酒宴の席に呼び出す。そして、「酒の無理強い」と「睨み付ける視線」によって、柏木の心に恐怖を起こさせ、彼を死に至らしめた。二人の男の間にも、会話ししい会話はなかった。

『絹と明察』は、世代が上の権力者と、世代が下の叛逆者との間に対話があった場合に、どのような和解と決裂になるかを如実に示したものである。

大槻は、労働運動のリーダーとして尊敬する秋山にも告げずに、自分自身の判断で駒沢と対峙する。大槻は、今や若き争議指導者として、すべての行動が「公的」な色合いを帯びている。駒沢を「老いた天皇」とすれば、大槻もまた「若き天皇」である。

この対話の結果は、『源氏物語』第二部とは違って、「老いた権力者の死」となった。この結末は、二人を会わせようとした房江にとって、決して不満ではなかったろう。継母の自分を愛さぬまま死んだ「善雄」の転生が大槻だと信じることで、大槻の勝利を房江は納得できるのだ。そして、大槻を支える根源の力を弘子に譲り渡せば、房江の人生の意義は見事に果たされたことになる。

【人生の夏という季節】

六月六日から、九月三日まで。この三箇月が、大槻を「青年」（少年の面影を留めた青年）から「男」へと変えた。すなわち、争議の期間は、季節として「夏」と重なっていた。「夏は終わった」のである。来るべき「秋」は、駒沢にとっては凋落と滅亡の季節であり、大槻にとっては収穫と祝祭の季節だった。

大槻が駒沢と対話した時、もはや夏は終わり、遠雷が弱々しくなっているだけだった。食事停止を決意した駒沢の激越な「父の怒り」は消え失せ、「父の権威」は完全に失墜していた。遠雷は、その力関係の変化を巧みに示している。

【駒沢の大槻への警告】

駒沢の言葉は、大槻の耳には逆らい、その心には到達しなかった。そもそも、駒沢の思いは「言葉」にならない「思い」なのだった。その駒沢が、必死になっ

て大槻に伝えようとした思いは、何だったのか。

駒沢が、決して巧い表現とは云えないが、云おうとしていたのは、簡単に自明な事柄だった。つまり、男が自由や平等や平和について語るのには、自らを卑しめるもので、すべて女の原理の借用にすぎぬということ。少しでも自尊心のある男なら、自由や平等や平和の反対物、すなわち屈従や権威や戦いについて語るべきだということ。男があんなことを言い出したとたんに、女にしてやられ、女の代弁者として利用されるようになるということ。……

駒沢は、戦前の「日本浪漫派」と近い思想を抱いて生きてきた。だから、岡野の思想とも限りなく近い。駒沢の日本的土俗と、岡野の西欧的高尚とは、外見だけの違いで、一皮剥いてみれば中味は同じものだった。

大槻は、これから知らず知らずのうちに、「弘子」女なるものの「支配下に入る。かつての駒沢が「房江」に支配され、発病後の駒沢が「菊乃」に生殺与奪の権を握られるのと同じように。

だが、大槻には駒沢の真意がわからなかった。それがわかった時、大槻は自分の次の世代の若者の叛逆に遭うことだろう。そして、自分の失敗を踏まえて「最後の説得」を若者に対して試み、物の見事に跳ね返されることだろう。この「失敗せる男たちの連鎖」が、日本文化の柱を形成してゆく。「父子」は、わかりあえなくてもよい。いや、わかりあってはならないのだ。

決然と去ってゆく大槻の「ドアへ歩む青年の白いシャツの背」に、駒沢は「まざれもなく息子を見た」。この時に、駒沢の憤怒は大いなる諦念へと変化したのである。

【争議の解決】

駒沢は、全身全霊で大槻に語りかけ、それが拒絶されたときに、彼の生命力は燃え尽きた。だが、たとえ大槻を「返り討ち」にして打倒できたとしても、そこで駒沢の命運は尽きたであろう。

十月に、駒沢は中労委の斡旋案を受け入れ、ここに争議は解決した。十月九日、大槻と弘子は結婚式を挙げ、晴れて夫婦となる。弘子は、既に母性的なものを身につけており、大槻のすべてを柔らかく包み込む。大槻は争議に勝利したが、弘子には敗れた。敗れたとは気づかず、女なるものに取り込まれたのだ。

【紫式部は狂人だったか】

大槻たちの新婚旅行先は、近江工場の近くの石山寺だった。だから、紫式部が『源氏物語』を執筆したという「紫式部の間」も二人で見た。そこは「座敷牢」を思わせる陰湿な空間だった。大槻は、紫式部は「狂気」だったのではないかとすら想像した。

しかし紫式部は狂気ではなく、大いなる正気の人だった。あるいは、「狂気」をどこまでも徹底して突き詰めて正気へと反転させることのできる人だった。

ここには、三島の『源氏物語』観と紫式部観の本質が表明されている。紫式部が、現代に生きていたならば、さしずめ女子工員である。弘子が、狂気としか思えない駒沢紡績の綿綿工場の悪環境で肉体を痛めつつ美しい絹を織り上げたように、紫式部は彼女の独房で『源氏物語』という夢の物語を織り上げた。

そして房江も、宇多野療養所のベッドの上で、「女たちの勝利」という狂気の夢を織り上げている。

女たちは、悲惨な環境の紡績工場で絹を織り上げる。血にまみれた産屋で、子どもを産み落とす。不治の病床で、夢を紡ぎ出す。そして、座敷牢を思わせる陰惨な執筆部屋で、華麗な恋愛絵巻を書き上げる。「狂気」という闇の領域が、「光の誕生」のためには必須なのだ。ならば、言葉の深い次元で紫式部は「狂人」だったであろう。紫式部は、平安時代の「女子工員」だったのだ。ならば、藤原道長が「駒沢善次郎」なのか。

【三島の家族たちのイメージの投影】

『絹と明察』の読者は、どうしても登場人物について三島の個人的体験を重ねたい欲求に駆られてしまうだろう。

駒沢善次郎＝平岡定太郎

駒沢房江＝平岡夏子

大槻＝平岡梓

大槻弘子＝平岡倭文重

なかんずく、病床にある駒沢房江の性格描写には、三島の祖母・平岡夏子の晩年が色濃く投影されているように思われる。

『絹と明察』は、天皇制の象徴劇であると同時に、平岡家の歴史でもあったのだ。小説家としての三島由紀夫と、実在の平岡公威とは別人格と考えるべきだが、「岡野」あるいは「村川」が、「三島」公威「だったのかもしれない。

さらに、ジョン・ネイスン『新版・三島由紀夫・ある評伝』は、「三島は私に

自分の二児の父親としての感情をすべて作中に書き込んだと語った」というエピソードを紹介している。それならば、どうなるか。

駒沢善次郎＝平岡公威（三島由紀夫）

駒沢房江＝平岡瑤子

大槻＝平岡威一郎

大槻弘子＝平岡紀子

特に、病床にあつて、大槻を許し、弘子に感謝する駒沢善次郎は、二人のわが子に寄せる私人・平岡公威の万斛の思いを託されているのだろう。そのような個人的な思いを封じ込めつつ、『絹と明察』は近代日本の歴史と思想の象徴小説へと昇華していった。

そして、「父子の闘いの連鎖」に着目すれば、次のようにも考えられる。

駒沢善次郎＝平岡梓

駒沢房江＝平岡倭文重

大槻＝平岡公威（三島由紀夫）

大槻弘子＝平岡瑤子

『絹と明察』は、単なる個人的な私小説でもなく、単なる思想小説なのでもない。だからこそ、これまでの批評家や研究者には三島の真意が伝わらなかつたのである。しかし、日本と西欧、公と私とが分かちがたく緋い交ぜになって収拾のつかなくなっているのが、現代日本および現代日本人の真実なのだ。岡野の「鶴」のような二つの心性が端的に示しているように。

ともあれ、大槻が石山寺を新婚旅行していた時に、駒沢が倒れた。十月十日のことだった。

2・10 第十章「駒沢善次郎の偉大」

【駒沢の死を見届ける岡野】

駒沢の発病から逝去までは、「わずか十七、八日」だった。この間に、岡野は三度駒沢を見舞った。九月三日に「父子の対話」が物別れに終わってから二箇月と経たずに、十月下旬に駒沢善次郎は死んだ。岡野の三度目の見舞いは、駒沢の死んだ当日だった。

駒沢の死を見届けることで、岡野の心の何かが裂けて、何かが生じた。駒沢は死んで「大槻」の中に蘇っただけではなく、「岡野」の中にも蘇ったのである。

「明察の人」であった岡野は、『絹と明察』の最終部で駒沢の替わりに駒沢紡績社長への道が開かれる。それは、岡野が「絹の人」の要素も兼ね備える変貌の瞬間だった。

【風雅を忘れぬ駒沢、風雅を忘れた菊乃】

京都大学病院に入院中の駒沢は、持ち前の風雅の心を忘れずに、鐘の音を聞いて物思いに耽る。スト発生の報を聞いた後、駒沢はワシントンで北斎を見た。その回想から、「（北斎の）色彩は罰せられず、（自分の）言葉は罰せられる」という結論に達した。ここに、言語芸術としての文学と、視覚芸術としての美術との最大の違いがある。言語は、ロゴス（理性）の武器であるがゆえに、女なるものの総攻撃によって敗退せざるを得ない。駒沢の敗北は、「明察の人」岡野の敗北でもある。岡野は、駒沢を滅ぼすことで、自分自身を滅ぼしたのかもしれない。

さて、駒沢のさまざまな風雅な想念を妨害するのは、文学的教養のすべてを捨てた菊乃の野声だった。作者は、「疑いもなく菊乃は幸福になったのだ」と断定している。その手伝いをしたのが、岡野である。岡野は好意からではなく、自分の打算から行動した。その結果が、菊乃の幸福である。作者は菊乃を戯画的に描いているが、身動きの取れぬ病人である駒沢の献身的看護人として、彼女は遂に人生の最良の幸福を感じているのだ。駒沢が死んだら、自分も後追いつする覚悟の「誠実」さをまで獲得している。

岡野の利己的な行為は、既に大槻の成熟の手助けとなっている。そして、何と岡野が滅ぼしたはずの駒沢本人をも幸福にしたのだと知って、岡野は大きな衝撃を受ける。駒沢は、すべてを赦す心境に到達していた。

駒沢は、大槻との対話の後で、「当面の勝利を得た大槻も、いつか自分のように女なるものの前に敗者になる」ことを悟った。ならば、大槻はかつての自分自身である。赦せなくて、どうしよう。

潔い敗者となった駒沢は、菊乃の大音声の野に包まれ、自らの輩出する尿にも包まれ、女なるものにくるみ込まれて厳肅な死の刻を迎えつつあった。

【何物かに吸い込まれる岡野】

岡野は、十月二十七日に、駒沢の逝去を見届けた。そして、鴨川べりで物思いに捕われる。まず、ハイデッガーの言葉を念頭に浮かべた後で、「（ハイデッガーは）見かけは清澄な言葉で語りながら、実はもっとも不気味なものに行き当った

のではないかと疑った。岡野もまた、「もっとも不気味なもの」、つまり女なるもの、日本的なるものの本質に行き当たったのである。

鴨川の水は、友禅染の色彩に染められていた。岡野は、自分の心もその色に染められ、その水の中に「社会も思想も人間もみんな吸い込まれる」という感覚的体験をした。なおかつ、それは彼にとって初めての感覚ではなかった。

岡野は、やはりマクベスであり、「女の生み落せし者」だったのである。そして、「日本に産まれた者」だった。最後に、「男」でしかなかった。

岡野がまぎれなき敗者としてこれからの人生を生きることが覚悟した瞬間に、村川が声をかける。岡野には、「駒沢紡績の社長の椅子」が準備されたのだと言う。すべてのまがい物が蘇る昭和二十九年の世相の中に、「岡野」というまがい物の人間もまた経済人として蘇った。岡野は、自分の固有なるもの（「まがい物の日本」と遂に一体化した。彼はやっと心の郷里へと帰郷を果たしたのである。

3 新資料の概要

3・1 笛吹川芸術文庫

『絹と明察』は、以上見てきたような作品だった。それでは、いよいよ新資料の紹介に入つてゆこう。

三島由紀夫の直筆原稿や初版本などのオリジナル資料は、山梨県山中湖村の三島由紀夫文学館に売却・寄託され、研究に活用されている。また、三島の旧蔵書のうち全集類は、学習院時代の恩師・清水文雄が勤務していた広島県の比治山大学（旧比治山女子短期大学）に移管されたという。

そして全集類以外の三島の旧蔵書の多くを所有しているのが、幡野武夫氏である。幡野氏は、三島が残した単行本・週刊誌の切り抜き・旅行パンフレット類などを所有・維持し、散逸を防いでおられる。本業の古書店「三茶書房」の経営の傍ら、郷里の山梨県甲州市に旧武藤酒造・主屋・米蔵（国の登録有形文化財）を保存・公開し、まもなく芸術・文化・歴史文献資料のコレクションを「笛吹川芸術文庫」として展示することを計画中である。

そのコレクションの中核を形成しているのが、三島関連の資料群である。その全貌が明らかになる時、謎に包まれ伝説に彩られた三島文学の生成の神秘が、一挙に白日の下に曝されるであろう。三島文学の真実の開示によって、わが国の現代文学史は大きく書き改められるに違いない。

ここで、三島の旧蔵書が幡野武夫氏の所有となつた経緯について、紹介しておきたい。幡野氏が母校の東洋大学の校友会誌（平成八年十月四日号）に寄せた「山梨県山中湖村における『三島由紀夫文学館』と私」、および三島由紀夫文学館の第一回運営委員会（佐伯彰一委員長）で行つた「ご挨拶」（平成八年四月二十一日）によつて、三島家の意向と交渉のプロセスが明らかにされている。

幡野氏の岳父である岩森亀一氏は、三茶書房の創業者として古書業界では知らぬ者のない有名人だつた。岩森氏が独力で蒐集した膨大な芥川龍之介のコレクションは、散逸を防ぐためだけでなく、公共の文学館に収められて研究に活用されるために、一括して山梨県立文学館に寄贈された。山梨県は、岩森氏の郷里である。平成元年のことである。

信頼できる文化人からこの事実を知らされた三島瑤子夫人は、三島由紀夫の貴重な資料群も「信頼できる公共機関に一括して移管したい」という希望を強く持つようになり、岩森氏とその女婿である幡野氏に相談された。平成二年から各方面と交渉が続ぎ、受け入れ先候補が三箇所に絞られた。瑤子夫人は亡くなつたが、その三箇所の中から、三島家の希望で山中湖村が選択され、遂に平成八年の「三島由紀夫文学館」の開館に漕ぎ着けたのである。

ただし、三島の自筆原稿・初版本・創作ノート等の貴重な資料が膨大な分量だつたので、三島の残した旧蔵書やパンフレット類は三島由紀夫文学館に収蔵することができなかつた。そこで散逸を防ぐために、幡野氏が一括して購入し、これまで維持・管理してきたものである。

私もその管理状況を見せていただいたが、膨大な蔵書の一冊一冊が丁寧に紙で包まれて湿気から保護され、貴重書はそれぞれの本の大きさに合わせて造られた立派な帙に収められていた。かくて、三島の旧蔵書群は、いつの日か「三島の心」に触れたいと望む研究者の出現を待っていたのである。

私は、これまで幸いにも笛吹川芸術文庫のコレクションのいくつかを紹介する機会に恵まれた。本自体は図書館等でも閲覧可能な図書ではあるが、三島の書き込みや落書きが施された実物を手にした時に、図書館で調査していたならば決して思いつかなかつたであろう着想がいくつも浮かんできた。旧蔵書とは、そういう不思議な磁力を秘めたものである。三島の強大な磁力は、没後三十五年を経た今日でも、弱まる気配はない。

まず、三島の少年時代の愛読書である中島孤島訳『アラビヤナイト 上』、鈴木三重吉編集の世界童話集『黒い騎士』『湖水の女』、かるたの王さま』などの

童話集を閲覧し、『文豪ナビ・三島由紀夫』（新潮文庫・平成十六年）に収録された三島の評伝を書くことができた。三島が『仮面の告白』の冒頭部で熱っぽく回想している、まさにその愛読書群である。

また同書『文豪ナビ・三島由紀夫』には、学習院初等科時代の三島に綴りなどを教えた鈴木弘一氏の教案簿も紹介することを認めてもらった。これらによつて、三島の幼少年期が鮮やかに蘇つた。

ついで、前衛歌人の塚本邦雄が三島に献呈した歌集『感幻楽』を精査させてもらい、『塚本邦雄・全序数歌集解題』（『塚本邦雄の宇宙・詩魂玲瓏』所収・思潮社・平成十七年）で紹介できた。三島は、塚本や春日井建たちが推し進めた前衛短歌運動の最良の理解者なのでもあった。

そして、この度の、『絹と明察』関連の資料群である。

なお三島由紀夫以外では、山梨県の産んだ幕末期の異色の神官歌人である生山正方の詠草一式も、笛吹川芸術文庫の所蔵である。これに関しても調査する機会を、幡野氏から与えられた。現在では忘れられた歌人である生山正方だが、彼の残した膨大な詠草群や京都までの旅日記は、江戸から明治へという歴史の一大転換期における「日本文化の連続性」や、「転換期に神職者が果たした文化的役割」について考える際の一級資料であり、京都と甲斐国の文化的交流を追究する際にも有益である。この調査結果は、『新出資料・生山正方詠草研究 近世後期の甲斐国の神官歌人』として、『電気通信大学紀要』十八巻一号・二号合併号（平成十七年一月）に発表した。

3・2 四冊の執筆資料

さて、三島が『絹と明察』の創作に関して、依拠した資料は具体的には何だつたか。杉本和宏『絹と明察』の「日本」（『国際関係学部紀要（中部大学）』十二号・一九九四年三月）には、「近江絹糸労働争議関係文献目録稿 同時代の新聞・雑誌」という膨大なリストが付載されている。貴重なリストだが、三島本人がそれらをどこまで参照したかは不明である。おそらく、ほとんどは目を通していなかつたであろう。

杉本はまた、『絹と明察』と近江絹糸争議のあいだ（『名古屋近代文学研究』第十号、平成四年十二月）の「注」において、近江絹糸の人権争議と関連する三島の旧蔵書のタイトルを三冊指摘している。確かに、それらは『絹と明察』の直接の情報源となつている。すなわち、本稿が紹介する「新出資料」は、既に学界

にはその書名自体は知られていたものである。だが、それらと『絹と明察』を比較して考察する作業は、ほとんどなされてこなかった。ましてや、それらの本に対する三島の書き込みやチェックの痕跡を調査した論文は、皆無だった。笛吹川芸術文庫の幡野武夫氏から示されたのは、次の四冊であった。

高宮太平『夏川嘉久次と紡績事業』（ダイヤモンド社・昭和三十四年）。
 青年法律家協会・宮嶋尚史『人権争議』（法律文化社・昭和三十年）。
 ダイヤモンド産業全書・第7巻『紡績』（ダイヤモンド社・昭和三十六年）。
 近代商品読本・第6巻・水野良象『新訂 綿・羊毛・絹 読本』（春秋社・昭和三十二年第一版・昭和三十五年新訂第一版）。

このうち「は古本と見えて、「宮田」という旧蔵者の印鑑が裏見開きに押されている。三島は、この四冊以上の文献に目を通したであろうが、とりえず今回の調査対象は、この四冊だったのである。

は、『絹と明察』の主人公・駒沢善次郎のモデルとなった近江絹絲社長・夏川嘉久次の伝記である。むろん、争議の経過に関しては、経営者の夏川の側に肩入れして記述してある。なおかつ、この書を熟読すれば、「駒沢善次郎」以外の『絹と明察』の登場人物の「モデル」が何人も判明するし、『絹と明察』のストーリー展開のヒントも見えてくる。三島は、この書をまさに熟読している。

は、争議を労働者側に立つて記述しているのが、特色である。争議に関する記述は具体的に詳細であり、これまた三島が熟読した痕跡（書き込み・線引き）が膨大に残っている。

との視点は相互補完的であり、この二冊を併読し熟読することで、三島は労使双方から見た近江絹絲の人権争議の全貌を知り得たのだと思われる。それゆえ、本稿はこの二冊の紹介に最も力を注ぐ。

なお、は社名を「近江絹絲」と旧字体で表記し、は「近江絹糸」と新字体で表記している。本稿では、社名は「近江絹絲」を用いるが、などの引用文に「近江絹糸」という新字体表記がなされている場合には、それをそのまま用いることにしたい。本稿の読者には「近江絹絲」と「近江絹糸」が不統一であるかのように見えるかもしれないが、そうではないことを最初にお断りしておく。ちなみに、現在の社名は「オーミケンシ」である。

とは、『絹と明察』のストーリーを三島が構想するに際して、紡績産業、

特に絹織物に関する背景を知るために購入した文献だと思われる。とが人権争議の各論とすれば、とは総論である。

これら四冊の新資料の紹介については、『絹と明察』という作品に及ぼした影響力が比較的少ないとを先にして、影響力の甚大なとを後にしたい。なお杉本和宏『絹と明察』と近江絹糸争議のあいだ」が、との他に、三島の旧蔵書として書名を指摘している本がある。

嶋津千利世『女子労働者 戦後の紡績工場』（岩波新書）（岩波書店・昭和二十八年）。

である。さらに、杉本は触れていないが、『定本三島由紀夫書誌』の「蔵書目録」からは、

政治経済研究所編『日本の繊維産業』（産業シリーズ）（東洋経済新聞社・昭和三十七年）。

繊維研究会編『繊維小事典』（岡崎書店・昭和二十七年）。

細井和喜蔵『女工哀史』（岩波文庫）（岩波書店・昭和三十七年）。

横井雄一『紡績 日本の綿業』（岩波新書）（岩波書店・昭和三十七年）。

などの書名を発見することができる。の五冊の三島旧蔵書の実物は、

今回の調査では閲覧できなかった。笛吹川芸術文庫の全貌が姿を現す日を、心から待ちたい。

ただし、三島のアンダーラインや書き込みは調査できなくても、は図書館等で簡単に閲覧可能である。

ちなみに、の三冊に関しては、わたしは東京大学経済学部図書館でもじっくりと閲覧した。と同時に刊行された本（二冊でペアだったと思われる）も、この時に新たに発見できた。

今泉正浩編『夏川会長をしのぶ』（ダイヤモンド社・昭和三十五年）。

である。夏川嘉久次の子息・令嬢・兄弟・親友・部下たちが、故人の人となりを通じて語っている。『定本三島由紀夫書誌』には、の記載がないので、あるいは三島

の目には触れなかったかもしれないが、いくつも『絹と明察』と関連しそうな箇所がある。

は、東京大学附属総合図書館で閲覧した。のみ、未見である。

3・3 ダイヤモンド産業全書・第7巻『紡績』の紹介

【リンク制】

経済史家の猪木武徳は、本稿「1・2」で紹介したエッセイで、三島の経済動向に対するリサーチが行き届いていることの一例を挙げている。

原綿を買うためには外貨を獲得しなければならない。そのために輸出の成果に応じて外貨を割り当てるといふ制度が取られていた。この「リンク制」に言及しているのは、さすが大蔵省経験のある三島だと思ふ。

簡単に言えば、輸出と輸入を「リンク」させるのが「リンク制」である。ダイヤモンド産業全書『紡績』の「わが国紡績業の現在の姿 b 紡績業の復興と現状」の項目に、激しく赤鉛筆でアンダーラインが引かれている（本書は横書きである）。かつ、大胆に紙を折り曲げている。十五頁から十八頁までである。具体的な表現は、「（昭和28年）7月以降は輸出用原綿については輸出実績にリンクし」云々である。

『絹と明察』の第二章。

「たとえばこの会社でも、原綿を買うには外資が必要だが、リンク制と云って、輸出の多い会社でなくては政府が外貨を援助支給してくれない」

という駒沢の新人社員への講話がある。この文章の直接の出典は、後述する『夏川嘉久次と紡績事業』などではあるが、「リンク制」に三島が関心を抱いたのは、『紡績』の読書とも関連していることだろう。

三島は、昭和二十年代後半の紡績産業の直面していた実態を、マクロに把握しようとしている。単に、近江絹糸という一企業の盛衰ではなく、戦前から戦後の激動期にわが国の紡績産業全体がどのような状況に置かれていたかを、知ろうとしたのである。

だから、三島の興味は「リンク制」という経済学用語のみに向かっているのはなかった。（昭和二十八年以降は）ここに設備増加の足どりはほとんど停止するにいたった」という文章に、二重のアンダーラインが赤線で引かれている。『絹と明察』では、こういう紡績産業の苦しい状況にも拘わらず、駒沢紡績だけ

が積極的な設備増加を行うことができた理由を、駒沢善次郎という事業家のワンマン経営のプラスとして描き、それゆえにこそ十大紡の老舗の経営者から嫉妬・嫌悪されたのだと、作品の大枠を作り上げるのだ。

また、十八頁では、三島の自筆で、「cf. p. 36」という欄外の大きな書き込みがある。三十六頁には、昭和二十九年にはデフレによる引き締め政策で、在庫の異常な累増が顕著になり、綿製品価格も先行不安人気で凋落したことが記されており、三島の赤鉛筆でのアンダーラインが六行にわたって引かれている。

【昭和二十八年前後の紡績産業】

三島は、昭和二十八年前後の紡績産業の実態について触れた文章に、アンダーラインを引き続ける。近江絹糸の労働争議は、昭和二十九年六月の勃発。そして、『絹と明察』の書き出しは、昭和二十八年九月である。

現実に三島が『絹と明察』を起筆したのは昭和三十八年十月二十六日だが、『群像』に掲載されたのは昭和三十九年一月号からだ。執筆の十年前の経済状況を、三島はグラフと数値を満載した『紡績』の読書から体に染みこませるよううにして吸収したのだらう。それは、十年前の「日本」や「日本人」について、三島にさまざまなことを思い出させたに違いない。

大きく折り曲げられているのは、四十八頁。そして、「翌昭和28年には綿製品輸出額が前年をさらに32億3800万円下回り」という箇所、赤いアンダーラインが施されている。

3・4 近代商品読本・第6巻『新訂 綿・羊毛・絹 読本』の紹介

この本には、赤鉛筆によるアンダーラインと、黒万年筆によるアンダーラインとの二種類の読書の痕跡がある。少なくとも二回にわたって、三島は読んだことがわかる。

昭和三十年前後の産業界の動向に加えて、絹糸の具体的な製法に三島は大変な興味を示している。例えば、百八十一頁は、ページ全体が大きく折り込まれている。絹の製作過程の中で「繰糸」について説明された箇所に、三島は黒万年筆によるアンダーラインを十二行にわたって施している。

自動繰糸機以外の繰糸法では、工女が繭から正しい糸口を探し、目的とする糸の太さに応じて一定本数を集め、その本数が変わらないように糸の切れる

のや、なくなつた繭を絶えず補充しつないでゆく（接緒）ことが必要で、その接緒の巧拙によって糸ムラや節ができる。

この箇所では、『絹と明察』で具体的に使われてはいないが、「絹紡工場」の中の苛酷な工女たちの労働を描くために、彼女たちの作業プロセスを知悉しておく必要があつたのだらう。

ただし、『新訂 綿・羊毛・絹 読本』は業界側の視点で書かれたものなので、女工史的な記述は皆無である。そこに、資料としての限界があつたのかもしいない。

けれども、重視したいことがある。昭和三十年前後の紡績界は、「綿」が中心であつた。にもかかわらず、三島は「絹」に執着した。美しい光沢を持つ絹は、苛酷な女子工員たちの労働から生み出され、「日本」のシンボルとなつた。小説のタイトルは、『絹と明察』ではなくて、『絹と明察』でなくてはならなかつた。絹の歴史についても、三島は本書から学んでいる。

3・5 その他の三島旧蔵書について

今回は三島旧蔵書の実物を調査することはできなかったが、図書館で閲覧した書物について、簡単に報告しておく。

【嶋津千利世『女子労働者』】

この岩波新書は、近江絹糸の人権争議の起きる前年の昭和二十八年の刊行であり、紡績産業における女子労働者の労働環境の具体例をレポートしたものである。

『絹と明察』と関連しそうなのは、次の二点。

二十八頁の「食事時間の嚙り取り」で、会社側がベルやサイレンの鳴る時間を操作して、労働時間を長く、休憩時間を短くすることが恒常的になされていると指摘される。ここは、『絹と明察』第五章で挿入される岡野の大槻への手紙内容と類似している。

また百四十四頁で、寮生と寮母の生活水準の違いに触れ、「洋服屋、すし屋、化粧品屋」に至るまでそれぞれの得意先がまったく違っているとされている。ここは、『絹と明察』第三章で彦根を訪れた岡野が、地元の婦人服飾店で、「あそこ（注、駒沢紡績）の子には、可哀想に、うちとこみたいな高級品は買えんですわ。ガリガリ社長さんに搾り取られてるさかい」と聞かされる場面を連想させる。この店で、岡野は寮母の菊乃のためのネックレスを買ったが、成り行きで女子工員

（寮生）の弘子にプレゼントしようとして、一悶着が起きた。

【政治経済研究所編『日本の繊維産業』】

二点、気づいたことがある。

まず、百四十一頁、「合理化における十大紡と中小紡」の項目で、「中小紡における低賃金苛酷な労働条件にたいする労働者の反撃は二十九年の近江絹糸の抗争となつて爆発し、それはひろく一般の人々の注目するところとなつた」とあるが、具体的な争議の分析はない。

次に、百四十三頁以下、「アメリカ式合理化の意義とその限界」の項目は、『絹と明察』でアメリカ式経営をモットーとする「村川」の人物造型に何らかの参考となつた可能性がある。

【細井和喜蔵『女工哀史』】

大正十四年に上梓された女工物の古典である。三島は、岩波文庫版で、「女工」「紡績産業に従事する女子工員」の環境と歴史を知るために読んだのだと思われる。大正時代の『女工哀史』の世界が、昭和二十八・九年を舞台とする『絹と明察』とそれほど違っていないのには驚かされる。

三島は、細井が総論部分で「農民は人類の父」「紡績工は母性的いとなみ」と述べている部分を、決して読み飛ばさなかつたであろう。そして、「日本は昔から絹の国であつた」という一文にも、必ずや心を留めたに相違ない。女工たちは「綿織物」に従事しているのだが、根本には「絹」があつたのだ。

また、二百四十三頁から、「工場歌」の実例が六つ載っている。「高く聳ゆる金城の」「その名も高き藤波の」などの美辞麗句が並んでいる。『絹と明察』の第一章などで、「湖畔に聳ゆる絹の城……」という駒沢紡績の社歌が記されるが、『女工哀史』に列挙されている空疎な工場歌からヒントを得て創作された可能性がある。

以下、女工たちの生活を記述した中から、『絹と明察』のストーリーと類似する箇所を列挙しておく。

共働きが多い（二百七十九頁）、同性愛の傾向がある（三百十六頁）、結核に罹る確率が高い（三百十八頁）、苛酷な労働の結果として不妊症が多い（三百二十三頁）、出産率が低い（三百二十四頁）、流産が多い（三百二十七頁）、新婚旅行が夢（三百五十一頁）。

大槻と弘子の恋愛生活、そして結婚生活は、これらと多くの部分で重なる。弘子の結核、妊娠中絶、不妊への恐れ、ささやかな新婚旅行などである。そして里見という寮母の同性愛とも、関連がある。

確かに、『女工哀史』は、『絹と明察』の肥やしにはなっていると考えられる。

【横井雄一『紡績』】

この岩波新書は、『綿』に焦点を据えているのが、特色である。「絹」のロマンではなく、綿の現実のみを経済的に記述している。

巻頭の写真口絵で、糸をつなぐ重労働に従事する女子労働者の写真がある。弘子の「糸をつなぐ技術」などに、活かされた可能性がある。

三十七頁に、「十大紡」と「中小紡（新紡・新々紡）」の解説がある。改めて、十大紡の社名を見てゆくと、「大日本」「大和」「敷島」「富士」などというナショナルリズムに訴えるネーミングが多いことに気づかされる。

『絹と明察』で、村川が社長を務める「桜紡績」は、敷島の和心を人間は朝日に匂ふ山桜花」という本居宣長の和歌から連想されたものだろう。その桜紡績の社長が、「反日本」的な設定であるのは、まことに皮肉である。

『絹と明察』には、「峯紡」という十大紡の一つも出てくる。これは、「鐘紡」のパロディであろうか。「峯」は、「富士」の連想には違いないのだが。

四十六頁や六十七頁では、近江絹糸の人権ストについて言及されている。ここで、男子工員を夜間勤務させた「フクロウ労働」についての解説がある。夏川社長のアメリ力視察の成果だという点は、後に述べる『人権争議』の記述と同じである。ただし、それが十八歳未満の少年の労働を禁じた労働基準法を逃れるために、「満十八歳以上の男子」に就役させていたという記述は、『人権争議』にはない。

三島は、この箇所を読んだ可能性がある。それで、『絹と明察』が書き始められた段階で、「大槻」十九歳」という年齢設定がなされた可能性が高い。

七十一頁に、「リンク制」についての解説がある。興味深いのは、この「リンク制」が十大紡に有利に、近江絹糸などの新紡には不利に作用したという指摘である。リンク制によって、十大紡は高品質の原綿の輸入が保証され、新紡・新々紡は糸切れを起こしやすい低品質の原綿しか輸入できなくなった。近江絹糸は、十大紡トップの日清紡の「半分」の生産効率しかなかった。これで、近江絹糸が十大紡に太刀打ちするためには、労働の苛酷な強化以外には方途がなかった、と

いうのだ。この記述を知っていれば、『絹と明察』第三章の、「あそこ（注、駒沢紡績）は増産に無理に無理を重ねて、労務管理がかなりガタピシしている」という村川の発言が真実味を帯びてくる。

夏川社長をモデルとする駒沢社長の唱える「家族主義」と「報恩意識」の効き目も、限界に近づいていた。

4 『夏川嘉久次と紡績事業』 粉本・その一

本章のタイトルの副題に用いた「粉本」という言葉について、説明しておく。これは本来、美術の世界で「下絵」を意味する用語である。美術の世界では、白黒の粉本の輪郭を忠実に再現して、彩色の美術作品が描き上げられる。ところが、文学の世界では、「粉本」種本の記述を最大限に利用しつつも、大きく異なる人物造型、ストーリー構築、さらには主題設定がなされる。ではあるものの、三島が『絹と明察』の執筆に際して、粉本から得たものは非常に大きい。このような創作の秘密に、本稿では迫ってみたい。

4・1 粉本と『絹と明察』との相違点

本稿でたびたび引用した猪木武徳のエッセイは、「種本」粉本」としての『夏川嘉久次と紡績事業』を実際に読んで、簡単ではあるものの『絹と明察』との比較を試みていう点で、大変に貴重である。国文学研究者は、誰一人として行っていない。

「繊維産業の経済史・経営史の大家である同僚の阿部武司氏に教示いただいて高宮太平『夏川嘉久次と紡績事業』（ダイヤモンド社、一九五九年）を読み、三島の小説がいかにこの本に多く依拠しているかがわかった」と、猪木は記す。そして、高宮の本と『絹と明察』とが「酷似している」あるいは「ほとんど同じ」具体例として、彦根工場の圧死事件と、帰朝した社長が争議中の工場へ戻ってくる箇所の二つを挙げている。これらの指摘は、その通りである。

確かに、『絹と明察』と『夏川嘉久次と紡績事業』の類似箇所は多い。膨大と言ってもよいだろう。その指摘も具体的にやりたいが、まず両書の相違点から確認しておこう。

【彦根工場に限定する】

『夏川嘉久次と紡績事業』を読み始めて印象的なのは、巻頭の夏川嘉久次の肖像写真に続いて、全国各地の近江絹糸の工場のパースが掲載されていることである。実際に、近江絹糸には大阪の本社と創業地の彦根の他にも、長浜・岸和田・中津川・大垣・津・富士宮・東京・名古屋に事業場があった。昭和二十九年にはそれらの工場が一斉に争議に突入したのだ。

『絹と明察』は、駒沢紡績の彦根工場にのみ、争議の舞台を設定している。大槻や秋山は他社の労働者の支援を受けるが、同じ会社の他の工場との連繋には触れられない。というか、『絹と明察』の読者は、「駒沢紡績」彦根工場のみという前提で、読み進めているはずだ。

このように三島は、彦根工場のみを舞台に据えて、駒沢善次郎的な世界の膨張と消滅を描こうとしている。その分、彦根工場の争議指導者としての大槻の存在感が高まる。そして、大槻が闘う相手としての駒沢の「父性」は、彦根城の天守閣という明瞭きわまるシンボルとなって聳え立つことになる。

駒沢が「子どもたち」同様の工員たちから暴行を受け激怒する場面は、『夏川嘉久次と紡績事業』百七十六頁によれば、何と岸和田工場での出来事だった。日本各地に分散する近江絹糸の工場群を、彦根一点に集約することで、『絹と明察』には凝縮性が発生する。彦根は、日本の縮図となった。

【琵琶湖の象徴するもの】

彦根は、琵琶湖に接している。駒沢にとっての琵琶湖は、第一章で語られる「近江八景」の地に他ならない。すなわち、「日本の風雅」の本拠地である。ところが、駒沢の破滅を画策する岡野にとっての琵琶湖は、ヘルダーリンの「帰郷」という詩に歌われているような、「西欧的澄明」の象徴である。

遠くひろがる湖面には

帆影に起る喜悅の波。

払暁の町はかなたに

今花ひらき明るみかける

そして、舞台廻し役の菊乃にとっては、「入水して死ぬ」という女の悲劇性の象徴である。

同じ琵琶湖が示す三つの世界は、最後の第十章でどうなるのか。駒沢の肉体と共に、「古い日本」が滅びる。菊乃は、「悲劇」文学の夢を捨て果てた。

岡野は駒沢の死を見届け、菊乃を見捨てる。彼は一人、ヘルダーリンの「帰郷」

を思い、その詩を解釈したハイデッガーの注釈を思う。ハイデッガーは、澄明な詩句の中に、澄明ならざる「ドイツ的なもの」の蠢動を感じ取っている。岡野もまた、日本人でありながら、ドイツ的な観念世界の明澄さ、すなわち「明察の世界」を激しく憧憬して生きてきた。しかし、駒沢の死や引き続いて起こるであろう菊乃の死が岡野の心に伝染し、岡野もまた日本的なるもの、すなわち「絹の世界」に引きずり込まれてしまいつつあるのを感じる。

岡野がハイデッガーの『ヘルダーリンの詩の解明』の愛読者であることは、何度も強調されている。だからこそ、三島が『絹と明察』に引用しなかった「帰郷」の一節が、大変に重要な意味を持つてくる。「遠くひろがる湖面には」の直後である。

そうだ、これこそは生みの地、ふるさとの国の土なのだ。

おまえの探ねるものは、まじかだ、もうおまえにまみえている。

訳は、手塚富雄による（『ハイデッガー選集』・ヘルダーリンの詩の解明）。理想社・昭和三十年）。ちなみに、この本も三島の旧蔵書である。帰郷とは、ある場所に空間的に移動するという表面的な運動ではなく、世界の本質に、ある経験を蓄えることによって到着する（帰着する）精神的な行為だと、ハイデッガーは注釈している。

岡野は日本人でありながら、「日本の本質」に到達できていなかった。むしろ、それを避けて生きてきた。ところが駒沢善次郎という男の生と死をつぶさに見届ける体験を積むことで、岡野は遂に「日本的なるもの」への帰郷を果たそうとする。それが、『絹と明察』の結末である。彼は、京大病院の近くの鴨川のほとりに、うずくまる。

ヘルダーリンは、ボーデン湖を渡って帰郷する。岡野は、琵琶湖の水と鴨川の水によって、日本に帰郷するのだ。『絹と明察』が、琵琶湖を重要な舞台背景とするゆえんである。

三島の心の奥底のヘルダーリン嗜好が、琵琶湖畔の彦根を小説の舞台として選び取ったのだ。同じように、ヘルダーリンの詩に親しんだからこそ、「絹」の世界に心を抱いたのではないかと思われる。この点については、後述する。

4・2 『絹と明察』の主要な登場人物たち

【駒沢の両親や兄弟には触れず】

『夏川嘉久次と紡績事業』を読むと、駒沢善次郎のモデルとなった夏川嘉久次の家族関係が詳しく書かれている。特に、嘉久次の父・熊次郎は、近江絹糸の前身たる近江絹綿の創立者の一人で、名望もある優れた経営者だった。

『絹と明察』には、駒沢の父親のことはほとんど触れられない。一方、『夏川嘉久次と紡績事業』では、熊次郎の子「だった夏川が進取の気性を発揮する経営の舵取りをして、ついに「十大紡」と肩を並べるに至った道のりを詳しく描く。戦時中には、国策としての航空事業にも力を注いだ。

三島が駒沢に求めたのは、「大槻の父」としての役割だった。だから、「熊次郎の子」だった戦前のことは丸ごとカットされ、駒沢がいかにして駒沢となったかの「駒沢前史」は無視されたのである。

夏川嘉久次は、七男二女の九人兄弟（長兄は早世した）の次男で、血を分けた弟たちを近江絹糸の要所要所に配置していた。『絹と明察』で、争議勃発後にアメリカから帰朝した駒沢が初めて会社に入る場面。ここは、労働者に監禁されていた工場長が「アンダーシャツにステテコだけ」という惨めな姿で駒沢に抱きつく滑稽さが、印象的である。この「工場長」は、実際には夏川嘉久次の末弟の要三だった。近江絹糸は、一族経営の古い体質だったのである。男兄弟の一人はノモンハンで戦死し、一人は僧侶になったが、残りの兄弟は近江絹糸の幹部社員であつた。

三島は、駒沢の係累に触れないことで、「孤独な家長」として駒沢善次郎を造型したかったのだらうと思われる。駒沢にとっては、会社の男子工員と女子工員のみが「わが子同然」だったのである。ただし、駒沢の方では、一人一人の「わが子」の顔を間近に眺めたり、一人一人に直接語りかけることはしなかったのではあるが。

【駒沢の妻子について】

『夏川嘉久次と紡績事業』を読んで驚かされるのは、夏川嘉久次の妻が争議以前の昭和二十五年三月十五日に没していたという事実である。なぜかわからないうが、『夏川嘉久次と紡績事業』にも、『夏川会長をしのぶ』にも、亡妻の名前が明記されていない。一方の『絹と明察』では、「駒沢房江」という名前を持った妻が、昭和二十九年の争議勃発の時点でも、病床から駒沢紡績を操縦する健在ぶりを発揮している。ちなみに房江の「房」は「総」は、糸を束ねて垂らした物という意味だから、「絹」の縁語である。

『絹と明察』における房江は、「石女」である。「生きぬ仲」である庶子の善雄はフィリピンで戦死した。駒沢善次郎は、子どもがいなかったため、大槻と弘子を「養子にする」という思いつきにも駆られたのである。ところが、現実の夏川嘉久次には、一男一女がいて、戦後も健在であった。これにも、驚かされる。

長男の浩は、近江絹糸に勤め、父の後継者の地位を予定されていた。『絹と明察』で、駒沢の洋行に同道したのは「営業部長」とされ名前は記されないが、実際の夏川の洋行には「長男の浩」が付き従っていた。

娘の澄子も、夏川嘉久次が東大病院に入院した時に、病室で献身的な看護をしている。『絹と明察』では、文学芸者上がりの寮母である菊乃が、女房取りで病室に詰めているのとはあまりにも違っている。

現実の夏川嘉久次は、糟糠の妻にこそ先立たれたが、弟たち・息子・娘に囲まれて強固な「血の共同体」を形成していた。しかるに、三島が描きたかった「父と子」の確執は、「血のつながり」を越えたものだった。すなわち、子どもを持たない駒沢善次郎。南九州から就職して、父を持たない大槻。その駒沢と大槻との「血はつながらないが、心では親子である」という擬似的な父子関係が、『絹と明察』のテーマである。

天皇と国民の血が繋がっていないにも拘わらず、「父子関係」以上の精神的紐帯できつく結ばれ、かつ反発し合うのとよく似ている。

『夏川会長をしのぶ』の冒頭で、息子の浩は亡父・嘉久次の霊に「あなたは」と呼びかけ、少年時代には「放尿行為」によって父に反発したと告白している。『絹と明察』の第九章は、ストを決意した大槻の激しい放尿の回想で始まり、大槻が駒沢を「あなたは」と呼ぶ対話が山場である。

さらに、『夏川会長をしのぶ』によれば、夏川の亡妻は少女時代に「継母」から徹底的に苛められたという。「夏川の妻が継母から苛められる」という事実を知った三島が、「駒沢の妻が継母として継子の善雄を愛せない」というストーリーに変更して、『絹と明察』を構想した可能性がある。

【夏川嘉久次の死去】

夏川が死んだのは、昭和三十四年四月八日だった。すなわち、人権争議の終結から五年後のことである。三島は、駒沢の急逝を争議の終結直後へと変更した。大槻に精神的に打倒された時点で、駒沢の存在意義はなくなっている。三島は、「父性の消滅」を、「駒沢善次郎という人物の死」で象徴させたのである。

ちなみに、夏川嘉久次は東大病院の沖中内科に入院した。『絹と明察』では、京大病院に入院した駒沢が、黒谷の鐘の響きを聞いている。『絹と明察』の舞台が彦根に限定されたことから、彦根に近い京大病院が選ばれたのだろう。

黒谷との関連で、ここで指摘しておきたいことがある。『夏川嘉久次と紡績事業』によれば、夏川家は井伊家に仕えた武士の子孫であり、土族の多くがそうである浄土宗の熱心な信者だった。近江絹絲は、仏教の理念で経営されていた。西本願寺の松原致道師には、たびたび会社で法話をしてもらったくらいである。

『絹と明察』第二章では、「社長さんのお宅、日蓮様じゃありません?」「よう知ってるな」「私のところもそうですから」「こりゃまあ、何たる奇縁やろ」という菊乃と駒沢のやりとりがある。駒沢の宗旨は、日蓮宗に変更されている。

それだけではなく、『絹と明察』における駒沢は、仏教徒としてよりも、言わば「日本教」の宣教師(あるいは神主)として造型されている。駒沢善次郎の信奉する最大理念である「報恩」は、仏教の教義をはるかに越えている。三島は、夏川嘉久次という実在の人物から大きなヒントをもらう一方で、思い切った改変を施しているのだ。

むしろ、「改変」とは、モデルが大きな意味を持っているからこそ可能なのである。岡野が既に「まみえている」はずの故郷の意味を探究してやっと発見するよう、三島は夏川嘉久次の「既にある」人生の意味を探究することで、その本質に到達した。そのあかつきには、「既にある夏川の人生」よりも、もっと本質的な「あるべき駒沢の人生」が表現されることになる。

三島もまた、自分の心の故郷への帰郷の途上にある永遠の探訪者であった。

【菊乃について】

粉本としての『夏川嘉久次と紡績事業』と、文学作品『絹と明察』の相違点をいくつか挙げてきた。読者は、「共通点」の指摘を待ちわびているかもしれないが、作品の構想をめぐっては、もっと大切なことがある。それが、人物造型である。

三島は、『夏川嘉久次と紡績事業』という本を何回も熟読したに相違ない。なぜならば、三島の旧蔵書である『夏川嘉久次と紡績事業』には、かなりの数の傍線が引かれ、何箇所かには書き込みがなされ、頁の角が折り曲げられていたりするのだが、それは構想がある程度固まり、具体的なストーリーや具体的な叙述を想定し始めた段階でのアンダーラインであり、書き込みであり、折り曲げだと考

えられるからである。あるいは、現実に原稿用紙に向かって書き進めている時点での「参照」と「アンダーライン」も交じっている。

ところがそれ以前に、三島は書き込みなしで『夏川嘉久次と紡績事業』を通読したに違いない。その際に、「登場人物」についてのヒントを得ただろうし、文学者としての想像力を羽ばたかせて自由な改変を施す愉しみも味わったことだろう。

たとえば、夏川嘉久次には、「新橋の花柳界などには、古い馴染の芸者が沢山いる」という何げない記述が十二頁にある。そして、重病に陥った夏川の病室には、娘が詰めていたということも、三百一頁には書かれている。

さらには、『夏川嘉久次』の次に紹介する予定の『人権争議』には、近江絹絲の寮母たちによる「信書の開封」などの記述が詳細になされている。

これらのバラバラの散発的な叙述を、絹糸のように細いけれども強靱な「一本の糸」で繋ぎ合わせれば、「菊乃」という興味深い性格の女性が発生してくるのだ。粉本類に目を通していううちに、「新橋の芸者が製糸工場の寮母となり、ストの直中に放り込まれ、社長の最期を看取る」というストーリーが三島の脳裏で明瞭になった。その時に、『絹と明察』は一気に書き下ろしが可能となったのである。

菊乃という一人の人物を設定して、駒沢善次郎の真実と盛衰を見届けさせようとしたアイデアは、三島の小説家としての発想の大胆さを垣間見せてくれる。

【岡野という男は、どこから発想されたか】

菊乃の他に、もう一人「岡野」の存在を忘れてはならない。彼は、三島文学にたびたび顔を出す「認識者」である。だから、三島の深層心理の奥底に眠っているキャラクターであると言ってしまうは、それまでである。

だが、三島の創作心理の奥底から「岡野像」を浮上させる何らかの契機が、必ずやあったはずである。創作とは、そういうものだ。そういう問題意識で、『絹と明察』の粉本である『夏川嘉久次と紡績事業』を熟読してみよう。

すると、丹波秀伯という人物が発見できる。二百三十七頁から始まる第六章「仏縁か、救いの手現わる」の項である。夏川嘉久次は、近江絹絲の人権争議が終結しても生きていた。しかし、労組だけではなく、銀行が送り込んだ経営陣に実権を握られ、悶々の日々を送る。そこに現れたのが、新聞記者上がりの丹波秀伯である。かつて朝日新聞の経済部長を務め、ゾルゲ事件の波及を最小限度で食

止めたとされる。「財界、官界、戦時中までは軍人仲間にも多数の知己をもっている」人物である。だから、俠気に駆られて、口利きすることも多かった。彼が、夏川の窮地を見かねて、助け船を出してくれた。

おそらくこの丹波が、『絹と明察』の岡野の直接のモデルであろう。三島は、『夏川嘉久次と紡績事業』を最初に速読した時に「むろん、書き込みなどせずにストの全体像を知るための速読である」、「丹波秀伯」という人物像に強い興味を持ったのだろう。夏川にとつて大恩人である救済者の丹波を、「ストを扇動して駒沢を破滅させる人物」へと大転換させれば、岡野になる！

三島は、これくらいのことでは平気でやる人間である。なおかつ、丹波が近江絹糸を再建する際に協力を要請した相手は、十大紡の中でも屈指の影響を持つ日清紡績の宮島清次郎である。彼は紡績業界だけでなく、財界の首脳であり、吉田茂首相とも深い結びつきがあった。この宮島が、『絹と明察』では悪役の「桜紡績社長・村川」となった可能性がある！

雑然とした資料の山の中から、丹波と宮島という興味深い人物を意識した瞬間に、三島は自分の心の中に昔から巣食っている「認識者」という観念の恰好の「宿主」を発見したのである。

【労働指導者の秋山】

こう考えてみると、『絹と明察』の主要人物の多くが『夏川嘉久次と紡績事業』から発想されたと推測される。では、大槻を指導する労働活動家「秋山」の出所はどこだろうか。

同書の百五十三頁からは、彦根工場における争議の実態が日時を追って具体的に記されている。ここに、「全織同盟本部のオルグ六井某、加藤某」、「全織同盟の六井某」、「全織同盟の六井某」、「加藤某」という人名が出る。どちらかといえば、「六井某」が、重要な役回りのようである。

たったこれだけの「種」から、三島は戦前の右翼崩れで、労働組合指導者に転じた「秋山」という人物を造型したのでろう。

【主だった登場人物】

昭和三十九年十一月二十三日の朝日新聞の読書欄には、「著者と一時間・三島由紀夫氏」が掲載され、三島本人が『絹と明察』のテーマについて語った記事がある。それほど数の多くはない『絹と明察』に関する論文では、必ず言及される

貴重な作者の証言である。ところが、そのインタビュー以外の紙面では、執筆者名を明記しない『絹と明察』論が載っている。これが、なかなか面白い。

その記事によれば、『絹と明察』は「通俗材料を昇華」させたものだという。主要な登場人物が、要領よく整理されている。

滋賀県彦根に本社のある駒沢紡績の社長駒沢善次郎を主人公とする小説である。（中略）作者は、どこからどこまで、計算ずくめの計画に基づいて、以上のごとき駒沢善次郎像を刻もうというのである。そのためには、駒沢紡績の進出を喜ばぬ桜紡績社長村川、村川の意を体する、政財界に顔のきく面妖（めんよう）な人物岡野、岡野と長い知合いで、だんなに死なれて、いまは駒沢紡績の寮母に住みこんでいる元芸者菊乃などの人物を登場させなくてはならない。

大変に的を射た人物紹介である。そして、ここに名前の出た「駒沢善次郎」「村川」「岡野」「菊乃」のモデルの原型については、『夏川嘉久次と紡績事業』の中から発見できることを、本稿では既に指摘済みである。

この記事の「通俗」とは、登場人物の配置が普遍的で、多くの読者に受け入れられるという意味で使われている。彼らは、三島のなキャラクターであるに留まらず、日本文学の伝統中で頻繁に顔を見せる「読者に毎度馴染み」の人々なのでもある。

村川に関して、一つだけ補足しておく。『夏川嘉久次と紡績事業』の百五十六頁の六行目から七行目にかけて、次のような一文がある。

そうすれば、他の紡績会社 この場合は所謂十大紡に属するものは若しかすれば争議によって近江絹糸を叩き潰そうという意図が何処かにある。この文章に、三島は傍線を引いている。そして、頁の右上の部分折り曲げている。この文章を読んで、「桜紡績の村川」の陰謀という構想を具体化したのだらう。

【大槻と弘子のモデル】

先程引用した朝日新聞の紹介記事には、なぜか『絹と明察』の重要人物である大槻と弘子が抜けている。大槻と弘子もまた、「通俗」的なキャラクターなのだ。岡野たちとは作品内部における位相が違う。しかも、興味深いことには、大槻と弘子の「出所」は、『夏川嘉久次と紡績事業』とは違っているのである。

三島は、大槻のモデルを『人権争議』の方から得ている。三島は、経営者側の観点に立つ『夏川嘉久次と紡績事業』だけでなく、労働者側の観点に立つ『人権争議』をも熟読し、両者を刻明に付き合わせて事件の全貌に迫っている。

『人権争議』の詳しい紹介は次章で行うが、大槻のモデルだけではここで指摘しておきたい。近江絹糸のストは、各地の工場で起こった。最初に大阪本社、ついで近江工場である。その記述に、次のようにある。

彦根工場はなんといっても近江絹糸の本丸であつて会社側の必死の防戦が行なわれた。(六月)六日夜には後に新組合の支部長になつた朝倉氏を工場長夏川要三氏が呼出し、強硬な態度で全織は赤だ、会社をつぶそうとして、ただちに運動を停止せよと要求し、ほとんど軟禁に近い状態におかれた。大阪本社の争議開始を受けて、近江工場でもストが起きた。近江工場は、近江絹糸の人権争議の魁を為した名誉を担っていない。だが、『絹と明察』では舞台を近江工場のみ絞つてあるので、朝倉たちの行動がより英雄的な高みへと引き上げられるのだ。

この「朝倉氏」は、別の箇所には「朝倉克巳」とフルネーム出てくる。人権争議が勃発する前の年、会社側の御用組合に対抗して労働者側の新組合が結成されようとしたが、会社側の圧力で失敗した。『人権争議』の原文を、さらに引用しよう。

同日夜には第一第二応接間において、谷口工場長、夏川副工場長、勝間田工務部長、労組選挙管理委員長Hが、立候補をなした朝倉克巳他七名を呼び、立候補辞退勧告を強要している。

『絹と明察』の第四章には、次のようにある。

去年の夏、御用組合の改革の動きがあつて、彼は十九歳で執行委員に立候補しようとしたが、純粹に会社の為を思つたこの改革への動きは、芽のうちに刈り取られ、おそらく社長の耳にも届かぬうちに片附けられた。彼は忍耐の必要を教わつた。その代り、十一人のひそかな同志を得た。弘子と知り合つたのはそのあとだつたのだ。

この二つの文章を照らし合わせれば、「朝倉克巳」が、大槻のモデルであることは確実だろう。彼の中に、三島は自分好みの「少年像」と「青年像」を吹き込んで、文学的に生きた人間とした。

弘子には、結論を言えば、特定のモデルがない。近江絹糸の争議をめぐる諸書に登場する何人、何十人、何百人もの「女子工員」たち全員を集合させ、その善

良な側面のみを濾過すれば、作られたキャラクターとしての「現代の織女」弘子」が出現する。三島は、諸書の女子工員像を汲み上げて抽象化・純粹化した。ただし、最も柔らかな女性性、最も恐ろしい女性なのだという三島の女性観が強く投入されていることを忘れてはならない。

三島は、駒沢善次郎の世界を描く際には主として『夏川嘉久次と紡績事業』により、大槻の世界を描く際には主として『人権争議』によつてゐる。そして、二つの世界の「結び目」として、「房江と弘子」の女同士の世界が粉本に直接には依拠しない第三の世界が設定されているのだ。

4・3 三島は、どう読んだか

【三島の引いた傍線 折り曲げ、そして書き込み】

『夏川嘉久次と紡績事業』という粉本の重要性は、三島の書き込みやアンダーラインのない箇所からも、『絹と明察』の登場人物たちが一人一人姿を現していることからもうかがえる。

それでは、本書に三島が加えた人為的な痕跡を紹介しておこう。三島が原資料をどのように活用したかが、明瞭に見取れるからである。

【苦境の中での設備投資】

四十七頁。頁全体が、大胆に折り曲げられている。「折り曲げ」というよりも、「たたみ込み」である。そして、そのたたみ込まれた頁を払ってみると、次の箇所傍線が引いてある。

熊次郎を説得して東洋紡機から新鋭機を購入した。大正十四年頃である。

夏川嘉久次が父・熊次郎のもとで経営を学んでいる時代である。紡績業は絶えず不況による経営難と闘つてきたのだが、嘉久次は若い頃から新しい設備投資を惜しまなかった。

この箇所は、姿を変えて『絹と明察』の第五章に出てくる。十大紡の一つ、名門の桜紡績社長の村川が、中小の新興勢力(新紡)の駒沢紡績が「十大紡のどこもまだ使っていないアメリカ製の混紡用のプレディング・マシン」を稼働させている事実を見学して不快に感じる場面である。

アメリカ的経営の村川よりも、日本の経営の駒沢の方に、進取の設備投資が用意であつたという皮肉である。

【ビス・屑繭】

五十三頁。ここも、頁全体がたたみ込まれているというが、くるみ込まれている。開いてみると、傍線が引いてある。

ビスというのは屑繭から取った細い弱い糸である。蚕が口から吐く糸は精密に検査してみると、大きい所、小さい所、強い所、弱い所がある。

この文章の冒頭から「精密」までが、傍線の引かれた範囲である。夏川が原料の不足を乗り切るために、「品質」の劣る「ビス」を集めて糸にして利益を上げようと決心するくだりである。

「屑繭」という言葉は、『絹と明察』第一章に「わしは事業をしとつても、屑繭を集めてきて、こないこないにしたら絹紡糸が出来よる、こないこないしたらなんぼ儲かる、いう風に考えまへん。こりゃ仕組ですねん」とあるほか、第二章などにも見える。

駒沢にとつては、「綿」ではなく「絹」が大切なのだった。その絹は、工場の寮母となった菊乃が足を運ぶのも躊躇するような劣悪な環境の絹紡工場で作られる美しい宝物なのだつた。

【操短との戦い】

五十四頁。激しくたたみ込まれていた五十三頁の裏側である。「三千鍾内外の近江絹糸で二割操短すれば、二千四百鍾しか動かせなくなる」という部分に、傍線が引かれている。

昭和初期の不況の最中、操業短縮（操短）が業界ぐるみで実施されてはいるが、大手の十大紡と、近江絹糸のような中小企業とに一律の割合での押しつけはよくないという文脈である。

夏川は積極的に動いて、大手と違う低い操短率を獲得する。そして、操短に耐えきれなくなつて経営不振に陥つた中小企業を幾つも買収して、戦前の段階で既に近江絹糸は各地に工場を擁する「準大手」へのし上がつてゆくのである。

この箇所も、駒沢の積極果敢な経営手腕として、『絹と明察』の背景となつている。

【日本一に憑かれた男】

五十七頁。ここも大胆に折り込まれている（巻末の写真①を参照されたい）。

「それには品質の向上が第一だ」という文章に傍線が付されている。

「日本一の品質を誇る絹糸を作つておれば、必ず先方から頭を下げて売つてくれ」というようになる」という趣旨。これも、時代は戦前。夏川嘉久次と紡績事業の四頁には、夏川が「日本一」に憑かれた男だ、と紹介されている。

「日本一」という言葉は、『絹と明察』第二章で、女子工員たちが「品質本意！日本一の製品を作りましょう！」などと、目標を唱える場面などにも使われている。

【刻苦勉励の日々】

六十五頁。ここも、大きなたたみ込みである。傍線の箇所は、長めである。

彼は熊次郎在世中から、朝は五時に会社に出る。直ぐ工場に行つて工員の顔を見、機械の運転状況を見る。食事も工員と同じものを摂る。それから事務室に行き、執務をしたり来客との応接をする。外出して取引の商談をする。夕方になるとまた工場に出かけたり、寄宿舎を回つたりして、帰宅するのはたいてい十時である。（中略）

昭和四年には女子工員の深夜業が廃止された。夜の十時から朝の五時までには作業が出来ない。（中略）従業員は会社の苦しい経営を見兼ねて、自発的に午前三時に起きて就業した。

ここは、若かりし頃の夏川の精励ぶりを強調する箇所である。『絹と明察』第二章には、「今でも朝は午前五時に会社へ出る。すぐ工場に行つて工員の顔を見てまわつたもんやが、社長になつてから、そこまで手がまわらんよつになつた」云々と、駒沢の回顧がなされている。

【十大紡の罫を摩す】

百二十頁。次の百三十一頁と同じく、頁の角が小さな三角形の「耳折り」になっている。三島の傍線が付されたのは、次の箇所。

絹糸、スフ紡を細々とやりながら、夏川は紡績界の情勢を凝つと観察していた。（中略）

果然二十二年末になつて、一社一万鍾、全国で二十五万鍾だけ許すことにした。（中略）一万鍾の許可を得た。

ここは、戦後の紡績業の再開に当たつて、夏川の近江絹糸が「十大紡」と肩を並べる野心を持ち、準備を怠らなかつたことを述べる箇所である。この文章は、

『夏川嘉久次と紡績事業』の第三章「十大紡の壘を摩す」に含まれる。『絹と明察』の第二章では、駒沢の菊乃への言葉の中に、「そらそつや。その勢いで十大紡の壘を摩するまでになつたんやからな」と見える。

なお、これまで本稿が自明のように使ってきた「十大紡」という言葉であるが、第二次大戦中に国家が統制して残した十社のことである。この他に、「新紡」が約二十四社、「新々紡」が約九十八社存在することが、『人権争議』の「序にかえて」などでわかりやすく説かれている。

【日付の書き込み】

百五十四頁。頁の角に小さな耳折りがあつた。いよいよ、近江絹絲の彦根工場にも「人権争議」が波及してきた。その状況が日時を追って整理されている。ここに、三島の書き込みがある。本文は、次の通り。

六月九日 第二組員約二百名が正門に押寄せ、前日同様門扉を破壊して乱入した。

この記事の下欄の空白部分に、三島の書き込みがある。

(後十一時 ロック・アウト)

三島は、労働者側の視点に立った『人権争議』と突き合わせ、その本の百三十八頁の「彦根工場 六月九日午後一時ロック・アウトが通告され、組合は翌一日組合運動と食事確保のため正門を強行突破」という記述内容を簡潔に要約して、ここに書き込んだのである。『人権争議』のこの箇所の「ロック・アウトが通告され」の部分は、丸く囲まれている。

丸で囲んだ直後に、『夏川嘉久次と紡績事業』の百五十四頁に「後十一時 ロック・アウト」と書き込みながら、三島は彦根工場の争議の実態を、ありありと脳裏に焼き付けていたに相違ない。二つの粉本を同時に机の上に並べながら、『絹と明察』の構想が固められ、表現が紡ぎ出されていったのである。

ちなみに、「第二組合」というのは、会社公認の「組合」に對抗して労働者が自主的に結成した組合の呼称である。現実の近江絹絲では、会社側が第一組合に對抗して、「第三組合」「第四組合」を結成させ、争議終結後にまでシコリを残したが、そのような煩瑣な事実が『絹と明察』ではばっさり捨てられている。

【十大紡の陰謀】

百五十六頁。ここも、角が小さな耳折り。『夏川嘉久次と紡績事業』の著者の

高宮太平は、夏川の人間性を高く評価し、労働者を「親の心、子知らず」の恩知らずとして描こうとしている。だから、争議に關しても、背後で誰かが糸を引いていたと推測する。ここに、三島の傍線がある。

そうすれば、他の紡績会社 この場合は所謂十大紡に属するもの は若しかすれば争議によつて近江絹絲を叩き潰そうという意図が何処かにあつたのではあるまいかという推測が出来る。

本稿では既に、「桜紡績の村川社長」の策動のモデルとして、引用済みである。三島は、この箇所から「村川」という人物の存在を確信したのである。

【日付の書き込み・その二】

百五十七頁。争議開始時点で外遊中だった夏川は、当初の予定を全部こなしながら帰国した。その箇所の本文。

夏川社長は六月十一日、羽田着の飛行機で帰国した。

三島は、その左側の空白部分に、

五日後

と、書き加えている。『絹と明察』の第七章「駒沢善次郎の帰朝」の、

駒沢と営業部長の乗った飛行機が羽田に着いたのは、争議勃発五日後の夜である。

という一文は、ここから発生した。三島は、争議の推移を日時を追ってきちんと整理している。ただし、近江絹絲の大阪本店がストに突入した六月四日ではなく、近江工場が突入した六月七日を起点としている。そもそも近江に焦点を絞った『絹と明察』の世界では、大阪本店の争議など存在しないからである。

なお、後の『人権争議』の影響について述べる時に詳述するが、『絹と明察』では駒沢の外遊がこの時が最初だったとされているのに対して、モデルの夏川嘉久次は何度も外遊を経験している。

特に、争議の前年に外遊した際のアメリカ土産として、「鼻労働」という夜間労働制度を持ち帰った。近江絹絲のみの、特異で苛酷な労働である。そのため、女子工員の比率の高い十大紡とは違って、近江絹絲の労働者に男子工員が比較的多くなり、彼らが人権争議の主体となった。皮肉といえば、皮肉である。

この争議の前年の外遊の際には、夏川は「花の種子」もヨーロッパから持ち帰って、工場の敷地内に種を植えさせた。『絹と明察』では、駒沢の外遊を一度で済ませているが、「花の種」のエピソードは使われた。

さらに現実と創作の差異を言えば、夏川が争議勃発の第一報を聞いたのは、『絹と明察』のニューヨークではなく、パリだった。同行していた営業部長が、夏川の息子・浩であることは既に述べた。

【ストーリー構築の書き込み】

百六十一頁。ここは、夏川が争議中の彦根工場に入る場面である。十三日の朝である。帰国して一日の空白を置いたので、労働者側が肩すかしを食ったという記述も、『絹と明察』第八章「駒沢善次郎の憤怒」でそのまま使われている。なおかつ、工場長が「アンダーシャツとステテコ」という悲惨にして滑稽なスタイルで夏川と再会する場面が、『絹と明察』にそのまま利用されていることは、猪木のエッセイが指摘済みである。

さて、三島はこの箇所に変に重要な書き込みをしている。本文から示しておくと、彦根工場に入ったものの、労働者たちと激しいやりとりがあったことを記しているくだりである。

「社長の自分が、工場を視察しようとするのを阻止するのは怪しからんじやないか」
といくら怒鳴っても「社長を通すな」「やっつけてしまえ」などの暴言が群集の中から聞える。

この時、夏川が彦根工場の工員たちから暴行を受けた事実はない。ただし二日間、労働者たちから監禁されて、十五日の早朝に、洋服とズボンを脱いだ姿で裏門から脱出して大阪へと向かった。

この箇所における三島の最初の書き込みは、

P. 177 擲る。 食料絶ち。 断交せず。 天守閣の嵐。

である。ついで、「擲る。 食料絶ち。」の間に、吹き込みで「医師」と挿入している(巻末の写真②を参照されたい)。

これによって、この彦根工場の敷地内で、六月十三日に駒沢が工員たちから殴られるという暴行を受け、医師の治療を受け、報復として工場の食堂を閉鎖して食料断ちの制裁を与え、断交にも一切応じない、という『絹と明察』の第八章のストーリーが確定したのである。このストーリーが意味しているのは、駒沢の憤怒だった。その駒沢善次郎の怒りを象徴するのが、「彦根城天守閣の嵐」なので

あった。

三島が参照せよと記している百七十七頁では、次の箇所が大きく囲い込まれている(巻末の写真③参照)。

六月二十九日、夏川社長は(中略)岸和田に入った。(中略)中に数人の者は旗竿を以て社長の頭部を強打した。頭から血が出て洋服からワイシャツは鮮血に染まった。運転手は自動車の前に立ち塞がっているピケ隊を突破して、フルスピードで現場を脱出した。帰途医院に立寄り応急の手当てを受けて大阪に着いた。

この箇所が、『絹と明察』第八章では、彦根工場での暴行として描かれたのである。日時を変更しただけでなく、三島は打擲した工員を「女子工員」に変更している。そして、頭部を抑える駒沢の指が「嬰兒の指のように、五本をはっきりと無邪気にひるげ」ていたという印象的な比喻表現も、三島の独創である。

もう一つ、補足しておく。三島の書き込みに見られる「食料絶ち」という言葉は、いかにも過激である。『絹と明察』のもう一つの重要な粉本である『人権争議』百二十八頁には、「戦国時代にみられるような糧道を断て 戦術である」とある。三島は、こちらを当然読んでいただろう。『人権争議』では、暴行を七月四日のこととしている。しかも、労働者の側に立って、彼らが夏川社長を意図的に殴打したのではなく、「プラカードや旗は前の態勢がくづれただけで、このときあるいは社長とぶつかったかもしれないが、皆笑っていて組合側から意識して殴ったとは思えない」という記述がある(同書百三十六頁)。

彦根城の天守閣の嵐と、戦国時代の苛烈な戦法を思わせる食事停止。駒沢善次郎は、現代人であるだけでなく、古き日本人の「畏るべき父性」のシンボルへと昇華していったのである。

【なぜ駒沢は女子工員に殴られたか】

やや脱線するが、『絹と明察』で駒沢を殴ったのはなぜ「女子工員」でなければならなかったのだろうか。ここは、大切なポイントである。『夏川嘉久次と紡績事業』では殴った工員の性別を明記していないが、実際には男子工員だったはずである。

『絹と明察』は、女子工員という「女たちの祭」としての争議を描いていたのだ。そこが、この小説の要である。男子工員である大槻の勇ましい活躍や、駒沢と大槻の「父子対決」とは別に、「女たちの祭」という大きなテーマがあったこ

とを忘れてはならない。

弘子は肺を病み入院したので、「織女」としての責務を遂行できない。他の女子工員たちも、ある者は争議に積極的に関わって職場放棄し、ある者は仕事に就くことを組合員に妨げられて発狂し、「織女」たりえない。

『絹と明察』は、倦まず休まず仕事をし続けた織女たちの仕事をしない「休日」を、壮大な「祭」として描き上げる。男同士の戦いの構図よりも、あるいはこちらの方が三島の創作心理の根源に根ざしていたものと考えられる。

実は、この三島の創作心理の根源に光を当てるものが、ヘルダーリンの詩である。『絹と明察』の総括をする際に、改めて触れたいと思う。

【社会党右派の影】

粉本である『夏川嘉久次と紡績事業』の紹介に戻る。百七十二頁。中労委の調停が始まる箇所である。三島が傍線を引いているのは、次の三箇所である。

(全織同盟は) 闘争の場を政界に持込んだ。社会党の右派にとつては、全織同盟は大切なスポンサーである。国会で問題を探りあげる。代議士を送って現地調査をさせる。(中略)

吉田内閣の小坂労相も処置に困った。(中略)

普通の労働争議なら労資紛争処理の公的機関である中労委が乗出すのが、正常な労働慣習であるが、近江絹糸の争議は、こうした労働問題以前の争議であるから、いきなり中労委が飛出しても成功は覚束ない。

「社会党の右派」の影は、『絹と明察』の第九章「駒沢善次郎の対話」にも揺曳している。駒沢と大槻の「父子の対話」が訣別したことを記した直後の文章。

それから一ヶ月のちに、駒沢がとうとう屈して、中労委の斡旋案を呑んだのには、別段、この朝の何らかの影響があったとは思われない。

銀行筋の圧力がかかって、無理強いに駒沢にそれを呑ませたのであるが、こうして銀行がわざわざ乗り出して、組合側に有利な解決を計ったわけは、大銀行にまで波及しかねないいくつかの地方銀行ストの火を鎮めるために、大銀行と社会党右派とが取引をしたのである。

三島は、「社会党右派 全織同盟」(『絹と明察』では「織維同盟」となっている) というラインと、「大銀行」のラインとの挟み撃ちで、日本の経営者の駒沢が敗北するという図式を描いている。

【争議の終結まで】

百七十八頁。三島の傍線があるのは、次の文章。

(前略) 十五日、小坂労相は中山中労委会長に職権斡旋乃至は強制調停の何れかを採るよう要請した。

百八十九頁。三島が傍線を付した文章。

八月十一日から十三日まで、新潟で全織同盟の大会が開催された。主要な議題となったのは、近江絹糸の争議問題である。而して夏川一族の追放を正面切って打出したのもこの大会の席上であった。

百九十二頁。同じく、三島の傍線。

九月十二日に中労委から左の斡旋案が提示され、十六日に労資双方受諾した。

【争議の終結後の銀行との軋轢】

この後は、第五章「銀行派遣重役執権時代」となる。『絹と明察』では、既に駒沢社長は死去しているが、現実の夏川嘉久次は生存して閑職に追いやられていた。夏川を追い込んだのは、大手銀行だった。以下は、三島の傍線のある箇所を引用する。

労組の背後には社会党が控えている。労働省がある。(二百五頁)

それは三菱銀行を始め、七次融資銀行が銀行という立場と大株主という二つの立場から、近江絹糸に経営陣の更新を迫って来たのである。(二百六頁)

九月から十月の初までは、争議後の事務処理に追われていたが、十月半ばになって少し会社も落ちついた。その時期を見計らって、千金良、堀の両頭取は夏川社長に会いし、会社の経営陣を変更してはどうかという話を持出した。両頭取はこういう風に話した。(二百七頁)

夏川社長は銀行の話が、だんだん大きくなるのに意外の感を持った。最初は労務、經理の二人程度だと考えていたのに、その下に各々一名の重役をつける。(二百九頁)

銀行との数度の折衝によって、「それがいやなら銀行に考えがある」という威圧的態度が見られる。(二百十頁)

一方、本社においては組合との交渉条件が山積しており、(二百十二頁) これらの箇所は、『絹と明察』のほとんど最後の箇所に投影されている。村川の岡野への発言である。

「今朝は大阪で三友銀行の頭取に話してね、駒沢紡績の次の社長に君を推薦してきた。頭取は賛成だよ。これで駒沢が死んだとなれば、君は銀行筋の圧力で明日からでも社長になれるわけだ」

【最後の折り曲げ】

ずっと数字が飛んで、三百一頁。「逝去」の項。頁の角が三角形に折られている。これが、三島の最後の折り曲げである。ここで語られている夏川の具体的な病状は、『絹と明察』でも利用されている。ただし、入院したのが京大病院から東大病院へと変更されたことは既に指摘した。

なおかつ、夏川の死去が争議の五年後であるのに対して、駒沢の死が争議と同じ年であったという違いについても、前述した通りである。

4・4 三島の脳裏にあったもの

【三島の書き込みのない部分の利用】

三島由紀夫は、『絹と明察』の粉本の一つである『夏川嘉久次と紡績事業』を、繰り返し読んだと思われる。その証拠に、書き込みや傍線のない箇所からも、『絹と明察』へはおびただしい影響が及んでいる。それを、紹介しておく。書き込みなどがないので、確実にそうだと「実証」できないけれども、ほぼ確実に推定されることを列挙してゆこう。

「主要な人物」の造型には触れたので、それ以外の指摘に留める。

【接待】

百二十二頁。夏川は、会社を大きくするために、昭和二十四年頃から、証券界・金融界に対して、猛烈な接待攻勢をかけた。「彦根荒神山の松茸狩り」と「長良川の鵜飼」の二つが、具体例として挙げられている。

本書の姉妹版である『夏川会長をしのぶ』には、岡野のモデルと思われる丹波秀伯の回想の中に、「長良川の鵜飼」と共に、「琵琶湖を案内しましょう」と、率先して琵琶湖回りをして、その間でも実に痒い所に手の届くような接待をされる」と書かれている。

三島は、こういう箇所から、『絹と明察』第一章の琵琶湖周遊による近江八景巡りを発想したのだと思われる。

【集団圧死事件】

前掲の猪木正徳エッセイが指摘しているように、『絹と明察』第一章で語られる集団圧死事件は、上映された映画のタイトルが「産業日本の乙女」から「明日を荷つ乙女」に変えられているほかは、『夏川嘉久次と紡績事業』百二十九頁以下と、火災の経緯や死傷者の人数までほとんど同じである。

ただし、実際の事件は昭和二十六年六月三日に起こったが、『絹と明察』では昭和二十八年九月一日に変更されている。

争議の直前に事件が起こったことにしないと、小説から緊迫感が失われるからであろう。

【社長の講話】

百四十二頁から百四十六頁まで、延々と夏川社長の「講話」が引用されている。この中の一部が切り出されて、『絹と明察』第二章の「新入社員歓迎講話 駒沢善次郎著」という「一冊のパンフレット」の文章となっている。

【新組合からの要求事項】

百四十八頁。人権争議が始まった直後、新組合からは二十二項目の「要求事項」が会社側に示された。三島は、『絹と明察』の第六章で、この中から七項目だけ抜き出して利用している。

項目数が絞られたのは、いたずらに煩瑣になるのを避けるためである。『絹と明察』で六番目の「結婚の自由を認めよ」という要求は、実際には十二番目の項目であり、「結婚の自由を認めよ、別居生活を強制するな」であった。近江絹糸では、社員が結婚したらどちらかを強制的に他の工場に転勤させて、事実上の別居を強制していた。

【御用組合と新組合の女子工員の争奪戦】

百五十七頁。新組合が結成されても、女子工員たちは「私たちにはストをやる余裕はない、生産を上げ、よい品質の糸を作ることが使命です」と叫んで工場に入ろうとする女子工員がいた。

『絹と明察』第七章の冒頭に、ここが引用されている。「私たちはストをやる余裕なんかないわ。生産を上げ、良い品質の糸を作ればいいのよ。」

私は今、このように両者を書き写して、表現の酷似には驚かされる。こういうデーターテイルに関しては、三島は「粉本」資料」にほぼ全面的に依拠している。明らかに「文学的でない」味も素っ気もない粉本の文章を、ほぼそのまま再利用して「文学的」な文章に仕立て直す三島の魔術を見せつけられる。ごくわずかな、大胆な一捌けで、雑文が洗い流される神秘には、これまた驚かされてしまう。

だからこそ、『宴のあと』では、プライバシーの侵害として訴えられたのは、文学者である三島にとっては驚天動地の事件であつたらう。

【芝生の花】

百五十九頁。帰朝してストのピケが張られている工場を訪れた夏川は、芝生が荒らされているのを見た。ここには、「前年外遊したとき」に買った花の種子を蒔かせた場所である。

『絹と明察』では、ストの年と駒沢の外遊とが同一年に変更されていることは既に指摘した。

【新聞記者を「赤」呼ばわりする】

百六十一頁。大阪本社で報道陣に囲まれた夏川は、「今日までの報道振りを見ていると、新聞社には赤い人も居るんだらう」と失言してしまった。ここを利用して、『絹と明察』第七章の駒沢の「今日までの報道ぶりを見ると、新聞社には赤い人がいるのやろつ」という放言が書かれた。

三島は、この発言を「大阪」ではなくて、帰国直後の羽田空港でのインタビューへと変更した。最も効果的な時間と場所を選んだからであらうし、そもそも『絹と明察』は大阪本社を消去して彦根のみに駒沢紡績の世界を限定しているからであつた。

【思想性なき争議】

百六十五頁。新組合員ですら、「インターナショナル（の歌）」も知らないし、「アカハタ」も立てない、とある。それは、指導した全織同盟が、総評とは違つて過激な労働争議を嫌つたからでもある。

『絹と明察』でも、大槻を指導する秋山は、務めて左翼の思想語を口にしないようにしていた。ただし、それは「公憤」にこだわる大槻の心を傷つけないため

の配慮だつた。

【銀行の斡旋】

百九十頁。近江絹絲の争議の長期化を嫌つて、銀行筋も斡旋に介入してきた。「当時地方銀行の中で争議状態にあるものが幾行もあり、その銀行ストが大銀行にも波及しそうな形勢であつた」からである。

『絹と明察』第九章には、「こうして銀行がわざわざ乗り出して、組合側に有利な解決を計つたわけは、大銀行にまで波及しかねないいくつかの地方銀行ストの火を鎮めるために、大銀行と社会党右派が取引したのである」とある。以前に「社会党右派」の影を指摘する箇所でも触れた部分である。

ストが終了するあたりの会社側の疲労困憊の模様も、『夏川嘉久次と紡績事業』と『絹と明察』は類似している。

【総括】

『夏川嘉久次と紡績事業』は、『絹と明察』の重要な粉本である。経営者・駒沢善次郎の視点に立つて小説が展開する部分は、ほとんどこの粉本に依拠していると言つてよい。

三島が直接に書き込みなどを施した箇所だけではなく、粉本全体が大きな影響を与えている。三島は何度も繰り返しこの本を読むことで、『絹と明察』の主要な登場人物の輪郭を掴んだし、自分の文学的な想像力によって彼らの人間性に厚みを加え、『絹と明察』を完成させたのである。

5 『人権争議』 粉本・その二

5・1 三島は、どう読んだか

三島は、『人権争議』からも、多くの材料を得た。ただし、『絹と明察』の大枠となる骨格部分は、『夏川嘉久次と紡績事業』から得たと思われる。大枠が形成された後の、肉と血の部分を、『人権争議』は担つた。

近江絹絲の人権争議を支援した青年法律家協会という進歩的な法曹家たちの共著である。三島は、大槻たちの組合活動と、女子工員たちの労働環境については、本書から実に多大の知見を得ている。

三島の書き込みや傍線や折り曲げなどの「痕跡」を、これから具体的に紹介し

よじ。

【東北と南九州からの就職者】

二十六頁には、近江絹糸（本書では「近江絹糸」と表記しているので、その本文の引用のみ「糸」を用い、社名は「糸」を用いる）には、労働者を供給するための「駐在員」が、岩手・宮城・秋田・福島・長野・新潟・鹿児島・山形・山梨の九県に置かれていた。

ここには、三島の傍線や頁の折り曲げなどの痕跡はない。ただし、三島が読んだことは確かだと思われる。『絹と明察』で、大槻は「南九州」、弘子は「東北」の出身だと設定されている。確かに、東北各県と鹿児島には、駐在員が置かれていた。

【社員応募のパンフレット】

二十八頁の角を、三島は折り曲げている。青年子女を勧誘する入社パンフレットの「いたれりつくせりの条件」が列挙されている。「寄宿舎」「食堂」「衛生施設」「教育」「その他」の五項目にわたって、会社側の「人寄せ」の美辞麗句では最高の職場であることが強調されている。

このパンフレットは、羊頭狗肉の代表例として、嶋津千利世『女子労働者』にも紹介されている。

【会社膨張と苛酷な労務管理】

三十四頁。三島は、傍線を引いている。近江絹糸が「十大紡の五番目か六番目」に匹敵するほどの急成長を遂げた理由を、説明した箇所である。

綿紡の綿代が為替管理により統制されているため、原料費の競走条件が他社と一定であるという出発点にたつてこれを見る時異常な競走に打勝って企業の拡大を行うには労務費の切下げによる以外には方法がないことに容易に気づくのである。

『絹と明察』第三章で、村川は「あそこは増産に無理に無理を重ねて、労務管理がかなりガタピシしていることは、われわれの見学の印象でも、何となくわかったじゃないか」と、岡野に語っている。

【手紙の代筆】

三十六頁。角が折り曲げられている。傍線が付されているのは、次の文章。

このような不安におののく新入生に対して「寮母さんが親切に故郷の安定所、父母、はては学校にまで私の出す手紙文を作って下さいました」と別のT子は書いている。

この箇所から、三島は「寮母となった菊乃が女子工員たちの手紙を代筆する」というストーリーを発想した。

寮の庭にありもしない花を「寮の花が色とりどりに咲きほこって」などと代筆したという。

三十頁には、女子工員が学校に宛てた手紙の一例がある。

この二つの箇所を合成すると、『絹と明察』第二章で菊乃が代筆した手紙の文面ができあがる。三島は、粉本の表現を巧みに圧縮し、「白、黄、臙脂の菊をはじめ、コスモス、強烈な紅い鶏頭、紫苑など……」という花の名前を書き足したまさに、「文飾」である。

【苛酷な労働時間】

三島が傍線を付した箇所。

さて工場には先番、後番、昼番があり、男子には深夜番があるが、まず一番の一日は「鐘の音と共に」「まだ明けやらぬ午前四時から始まる」「うす暗い室にパツと電燈がつく。いやだ……」（三十六頁）

「それでもまあこの様な事はいい方で生産競技になったらもつとつらい」と異口同音に述べる（三十八頁）

太鼓に合わせて社歌をうたい体操を行い社憲を唱え、「品質本意、日本一の製品を作りましょう」というような目標を唱えて、二時半から三時過ぎに昼食を終えて寮へ帰って行くのである。（中略）

後番は起床が八時出舎が午後一時、退場が夜の十時半であり、昼番は起床が六時、出舎が六時四五分、作業開始七時半、退場午後四時一五分となっている。深夜番は起床が午後三時、出舎午後七時五〇分、入場午後八時、退場は朝の五時である。（三十九頁）

三島は、「生産競技」「二時半」「午後一時」「入場午後八時、退場は朝の五時」の箇所に傍線を付している。おそらく、三島は女子工員の弘子と、男子工員の大槻とが「デート」しうる時間帯を知るところとして思われるのだと思われる。

三島の傍線は、さらに次の箇所にも引かれている。

二八年夏、夏川社長がアメリカの繊維産業視察後採用したのが、フクロウ残業である。(三十九頁)

合法的に機械の二四時間廻転を計らんとしたものである。(四十頁)

極度の睡眠不足から睡眠薬を買って来て飲む者もあるといつていたが、どうやらこの方に信憑性がありそうである。(四十頁)

『絹と明察』第三章も、「鼻残業」について、大槻が駒沢に直訴する場面がある。

「鼻労働で、僕なんか丈夫ですから平気ですが、中にはひどい睡眠不足になつて、睡眠薬を買つて嘔んでるものもいるんです」

既に何回か指摘した事実ではあるが、近江絹絲の夏川社長の外遊は、人権争議の起きた二十九年の以前にもなされていた。『絹と明察』では、駒沢社長の初めの外遊の留守を狙つて、争議が勃発したことになっている。

『絹と明察』が争議の舞台を近江工場一点に絞つたように、時間背景も圧縮して一度の外遊で済ませたのである。

『人権争議』に戻ると、五十頁と五十一頁にも、三島の傍線が付されている。「その上に対抗競技という年少労働者の若い心理を利用して労働密度を極度に増大せしめる」「休日毎週一回の輪番制による休日のほか、一年を通じて正月二日間が与えられているにすぎない(一月二日が次週の休日の繰上げとなり一斉に休んでいる)」の二箇所である。

ちなみに「対抗競技」については、四十八頁に「出来高競技、クレーム絶滅競技、品質改善競技、糸切減少競技、清潔整頓競技、保全競技などが、工場対抗、科別対抗、番別対抗、班別対抗で行われている」とある。『絹と明察』第二章には、「各種の生産競技、出来高競技、クレーム絶滅競技、品質改善競技、糸切減少競技などのモットーが、運動会のピラよろしく、貼りめぐらされているのである」とある。

【皆動手当】

四十七頁の「皆動手当」に三島の傍線がある。四十九頁には、「勤続一年に達した者 へら台」「一年半」「二年半」小袖箱」「二年」「姫鏡台」「二年半」針箱」「三年」鏡台」という皆動手当の具体例が示される。ここには、アンダーラインはない。ただし、三島はしっかりと活用している。

『絹と明察』第三章で、岡野が大槻に向かって、「へんな誤解をしちゃ困るよ。駒沢紡績の女子工員勤続奨励法で、どんなものをくれるか、私は一寸調べて知ってるんだ。勤続一年に達したる者、へら台一ヶ。一年半に達したる者、……」などと得々と語る場面がある。『人権争議』のこの箇所が、典拠である。

【労働時間の一覧表】

五十頁には、「昼番」「先番」「後番」「交代制深夜番」「専門深夜番」の五通りの労働時間一覧表が、わかりやすく図時されている。ここに、三島の大きな書き込みがある。

昼番、土曜日、交代制深夜番などを、三島は困っている。そして、欄外に三島

一時

土えう

という二つの大きな書き込みがなされている(巻末の写真④を参照されたい)。

すなわち、昼番の弘子は土曜が休日であり、交代制深夜番の大槻は午前七時十五分に仕事が終わっている。だから、二人がデートするのは「土曜日の午後一時に時間を設定するとよい」というアイデアである。

『絹と明察』第三章で、岡野と菊乃が、デート中の大槻と弘子を目撃して意気投合するのは、「十一月のよく晴れた土曜日」「十一月の午下りの日光の下」だとされている。

「いいよ。勤務時間じゃあるまいし。昼番は今日はお休みだし、大槻さんも深夜番で今朝まで働いたあとなんだし……」

という菊乃の発言は、この書き込みから発想されていたのである。

それにしても、「土曜」を「土よう」ではなく「土えう」と歴史的仮名遣いで表記している点に、三島の真骨頂を感じる。三島は、「メモ」でも歴史的仮名遣いを用いていたのだ。本稿は、最も広く読まれていると思われる現代仮名遣いの新潮文庫で、本文を引用している。三島に申し訳ないという思いもあるが、新潮社の『決定版三島由紀夫全集』ですら歴史的仮名遣いこそ採用しているものの漢字は「新字体」で妥協している。これから、三島の文章がどのような仮名遣いと漢字体で読まれるべきか、大変に難しい問題である。

【察の実態】

五十四頁には、近江絹絲の富士宮工場の女子寮の部屋の平面図が載っている。この箇所を、三島は大きな枠で囲っている。十二畳の部屋に、床の間と押入が二つある。ここに平均十四人が詰め込まれていた。

『絹と明察』に、ここを利用した場面は見当たらないようだが、女子工員たちの生活環境を記憶するために、囲み込んだのだらう。

【手紙の無断開封】

六十六頁。近江絹絲の「人権侵犯」の事例として、『人権争議』が挙げているのが、「信書の開封」である。三島の傍線がある箇所。

その目的は「寮生の行動を事前に知る事」であり、「主として転職防止であった」。また風紀取締のための無断開封や、……

近江絹絲の信書開封は、労働者の逃亡防止が主要因だったようだが、三島は「風紀取締」の側に力点を置き、しかも女性の同性愛者である「江木」を寮母の一人として戯画的に描いている。

三島の小説には、江木のように滑稽な役回りの登場人物がしばしば交じっている。それは、芝居の世界の「笑われ役」の必要性とも関連している。評論家の中には、ここに三島のリアリティの不足ないし欠如を見る向きもある。しかし、きちんと「現実」と「モデル」を抑えたうえでのカリチュアなのである。

【私物検査】

『絹と明察』第三章で、弘子は駒沢に直訴する。

「毎週一回、私物検査がありますけど、先月とても辛かったわ。盗難があったって、みんな、シユミーズ一枚に脱がされて、体にさわられて、検査されたんですの」

粉本である『人権争議』六十七頁。

それに基づいて毎週一回私物検査が行われる。盗難があった際には「シユミーズ一枚に脱がされて徹底的に検査を受ける」という。

三島が傍線を付したのは、最初の一文のみだが、二つ目の文章も、『絹と明察』に取り込んでいる。

【組合の役員選挙】

七十頁。近江絹絲が、彦根労組の役員選任選挙に介入したことが記される。昭

和二十八年七月十六日、夏川社長は自ら意に満たない立候補者七名を強制的に辞退させた。この箇所を、三島はマークしている。以前に、「大槻」のモデルとして朝倉克巳の名を挙げるために引用したことがあるが、今一度示す。

同日夜には第一第二応接間において、谷口工場長、夏川副工場長、勝間田工務部長、労組選挙管理委員長Hが、立候補をなした朝倉克巳他七名を呼び、立候補辞退勧告を強要している。

この箇所は、『絹と明察』の場面設定に利用された。ただし、昭和二十九年六月六日の、争議開始直前に、大槻が「応接間」で「工場長」「居並ぶ部長たち」「旧組合長」たちに取り囲まれた場面である。いわゆる「転用」である。

【人権ストの展開】

いよいよ、近江絹絲の人権ストが開始した。『人権争議』七十八頁から八十一頁までに、このストを第一期から第三期までに分けて整理してある。ここの箇所に、三島の赤鉛筆の傍線と、赤鉛筆の書き込みが見られる。

これまで「傍線」と述べてきた箇所とは違い、『人権争議』のこのあたりから、赤鉛筆のマークが目立つてくる。少なくとも二種類の書き込みがあることになる。すなわち、三島が参考資料として何度も読んだであろう『人権争議』であるが、赤鉛筆は執筆の直前になされたものと推定される。

三島は、「争議の第一期の時期はスト突入より財界三氏の調停までである。この時期はいわば闘争の初期的段階であり」に傍線を引き、上欄に「」と書き加えている。むしろ、「第一期」の意味である。

「第二期は争議の中期の段階であり、長期化の様相を呈する半面、これまで事実的にたたかわれてきた諸々の面に国家権力があるいは争議の『解決』へとあるいは弾圧へとくさびをうった時期であった」にも傍線が引かれ、「」と書き加えられている。なおかつ、第二期の解説の中の、「再びストに突入した（八月一日）」。この頃労働者、市民の応援共闘カンパは大きく展開され」にも、傍線が付されている。

「第三期はしかし、全織大会決定にもかかわらず、（中略）やがて全織より中労委へ再幹旋の申入れがなされ（九月八日）」という箇所に傍線が引かれ、「」と書き加えられている。『人権争議』では、「第三期は」を主語とする文章が、短くまとまっているので、傍線が引きにくく、三島も困ったようだ。

このように、争議は全部で三期に別れる。「開始」「長期化」「解決」である。

三島は、その中の第一期に焦点を絞って、『絹と明察』を書き下ろした。そして、第二期の終わりの時期に、駒沢と大槻の対話を設定したのである。第九章「駒沢善次郎の対話」が、「九月三日」に設定されたのは、『人権争議』で九月八日から第三期に入っており、九月十六日に会社側が中労委第三次調停案を受諾する目筋だからであろう。

社会で現実に生じた事件の「大枠」と時間の経過をきちんと整理して把握するのは、三島の流儀であった。

【組合設立までの経緯】

日本労働組合総同盟滋賀県連合会は、かねて近江絹糸を闘争の目標に設定していた。そして、オルグ活動を開始したのは、昭和二十三年に遡る。人権争議の六年も前のことである。三島は、この箇所にも赤で傍線を施している。「ただ総同盟青年部と会社側有志社員との連絡が比較的容易に行われていたという事情による」「工場外に存していた社員寮への出入は案外放任されており」の二箇所である（八十三頁）。

だがこの時には、組合の設立が失敗した。そして、昭和二十六年六月の庄死事件を機に、「近江絹糸民主化闘争委員会」が結成され、「全織同盟独特の民主化闘争委員会になってしまった」。このカギで括った箇所にも、赤の傍線がある。

「全織同盟独特の」と本書が述べているのは、全織同盟は社会党右派に属し、経営者と結託する傾向があり、社会党左派と結びつく総評の労働運動とは違っているという前提に立った立論である。

『夏川嘉久次と紡績事業』が近江絹糸の人権争議の背後に、「十大紡の経営者の陰謀」があったと推測し、三島がそれを肯定して『絹と明察』を書いたことは既に指摘した。『人権争議』百十五頁・二百五十二頁においても、全織同盟が十大紡の経営者側に立った活動に終始し、近江絹糸に関しても十大紡の経営者の何らかの関与があったことを匂わせている。

これらの粉本の叙述から三島は自信を得て、「村川」という人物を具体化させたのだ。

【争議直前の極秘活動】

八十七頁。昭和二十九年六月に近江絹糸の争議の火蓋を切ったのは、大阪本社だった。赤い傍線の付された箇所は、次の通り。

極秘裡に組合結成の準備交錯が進められ、（中略）

組合は表面化せず秘密裡に組合員の獲得工作、団交準備が行われた。そのため、会合は全く社外のお寺などが利用され、その連絡も背をたたく数でその時間を示したり、帳簿の中に場所などを記した紙切れをはさんだりして行われた。

三島は、大阪本社での活動を近江に置きかえて、『絹と明察』第六章を描いている。大槻たちは木村重成の首塚がある「仏光寺」というお寺で秘密の会合を持ったが、「その秘密の会合の時刻は、前夜の作業中、背中をたたく数で知らせ合った」。

興味深いことに、彦根市に「仏光寺」というお寺は実在しない。大坂夏の陣で戦死した木村重成の首塚があるのは、「宗安寺」である。『絹と明察』では、この寺の住職が労働組合から金を貰って秘密の組合活動に場所を提供したという設定なので、寺の名前を架空のものにしたのだろう。

大阪本社での組合は、六月二日に公然化した。それに対する会社側の妨害について述べた箇所にも、三島は赤で傍線を引いている。

【近江工場での新組合結成】

八十八頁。「七日には彦根工場で彦根支部が結成された」に赤で傍線を引いたあと、三島は次の箇所を、「」で大きくマークし、その途中に赤い傍線を引いている。中にそでない色の傍線が交じっているのは、ここを何度も読み返したからであろう。

六日夜には後に新組合の支部長になった朝倉氏を工場長夏川要三が呼出し、強硬な態度で全織は赤だ、会社をつぶそうとしている、ただちに運動を停止せよと要求し、ほとんど軟禁に近い状態におかれた。翌七日の午前二時頃から深夜番の男子工員（全員約一〇〇名）が一斉に職場放棄を行い、呼びかけを行った。四時頃になって女子寮の従業員も参加し、十時頃になってやっと結成大会が持たれた。この間、会社側はそこに出席する従業員の行動を監視し、寮生を寮内に軟禁したり、第一組合、全織の悪宣伝と個別説得を執拗に行った。しかし、結果は、総従業員二六八一名中約一三〇〇名が新組合に参加した。

この「朝倉氏」「朝倉克巳」が大槻のモデルであろうことは、既に何度も指摘した。大槻の監禁、午前二時の決起などは、『絹と明察』第六章のストーリーの根

幹を形成する部分としてそのまま採用されている。また、新組合への参加数は、『絹と明察』第七章に「加入者は半数を越したが」とあり、「二六八一名中約一三〇〇名」という「人権争議」の記述を踏まえていることがわかる。

ただし、三島が『絹と明察』を近江工場にのみ舞台を限定した以上、大阪本社を始め、各地の工場で続々と結成された新組合支部との共闘は、書かれるべくもなかった。「しなのめの四時半に、三台のトラックに分乗した応援隊が到着し」云々という箇所は、三島の創作である。

【食事停止】

『絹と明察』では、駒沢社長が暴行を受けて出血した怒りが、「食事停止」「食堂封鎖」の理由だった。『人権争議』九十二頁は、右上が折り曲げられている。そして、「会社側は全織の団交不参加とヒケの解除を団交再開の条件として要求し」の箇所に、傍線が引かれている。

「その後二日に社長が帰国し、一六日にいたって、会社側が団交再開を了解し」の箇所にも、青い傍線がある。ここには、欄外に三島の青ペンで「食事停止」という書き込みがある。

おそらく、『夏川嘉久次と紡績事業』の百六十一頁で、「食料絶ち」という書き込みをした時とほぼ同時に、『人権争議』の欄外に「食事停止」と書き込んだのではなかったか。三島は、二つの粉本を照らし合わせつつ、『絹と明察』のストーリーを組み立てている。

ついで、九十三頁、『夏川嘉久次と紡績事業』では、岸和田工場での暴行は六月二十九日となっているが、『人権争議』では七月四日のこととなっている。この箇所には、三島の書き込みや傍線はない。

「食事停止」について『人権争議』百二十七頁は、帰国した夏川社長たちの編み出した新戦術だと述べる（ここにも三島の傍線が引かれている）が、「殴打事件」との関連には触れていない。すなわち、「殴打事件」の憤怒による「食事停止」というストーリーは、三島の創見なのだ。現実には無関係に生じた二つの出来事を、一本のストーリーで結びつけることによって、駒沢社長の従業員を愛するがゆえの激越な怒りが、強調されている。

【会社側の団交拒否】

百七頁。三島は、赤い傍線を次の二箇所に引いている。

会社は争議の開始当初から徹底的に団交を回避する態度にでている。全織を含めない団交では組合側の負けを意味するわけであって、全織抜きでないと団交できぬと、会社は組合をはねつけているのだ。『絹と明察』には、次のように利用された。

……駒沢は団交を拒みつけて今日に及んでいた。これが少くとも解決を妨げる根本的な原因の一つであった。（大きく中略）

織維同盟との悪縁を絶ち切らない限り、団交に応じないという態度を、彼が立てとおしたのはそのためだ。

【ピラと発狂】

百十一頁の角は、折り曲げられている。そして、赤線の引かれた箇所。

会社は、組合は赤であるとする赤宣伝を職制、旧組合を通じたり、工場内および周辺にピラなどを配布することによっておこなった。また、長浜では組合の中堅を堅める深夜労働者の男子工員五四名に解雇を通告した。また旧組合のみに給与をはらったりジュースなどの物品を旧組合員のみ配布したりして新組合員を圧迫した。

百十二頁では、「七月一日に彦根で四名」「大量の発狂者をだした」という箇所にも、赤で傍線が引かれている。

「ピラ」の具体的文面は、百十七頁に掲載されている。『絹と明察』第八章で、房江が読むのは、この百十七頁の「ピラ」の文面とほとんど同じである。また、新組合員に月給が支払われないことも、発狂者を出したことも、『絹と明察』に触れられている。

ただし、三島が『絹と明察』で利用したピラは、実際には「東京都内」で飛行機から撒かれたものだった。近江絹織は、東京や大阪など、地域によって異なる文面を撒いた模様である。三島は、東京都内用のピラを、京都の弘子と房江が入手したように変更している。

【新組合員の家庭への葉書】

百二十一頁。会社側が、新組合員の家庭に送った葉書の文面が掲げられている。「拝啓今回のストにつき御心配の事と存じます」に始まり、「スト終了後は再び帰場して貰う事は歓迎します」で終わる葉書である。三島は、この本文八行の上欄に、赤鉛筆で丸パーレン記号を付けている。

ここもまた、『絹と明察』の第八章で、ほぼそのまま利用されている。

【社長防衛隊の暴力】

『人権争議』百二十八頁からしばらく、会社側が「特別警備隊」あるいは「社長防衛隊」として雇った土建人夫たちが、組合員に暴力を振るい、小競り合いを繰り返したことが、詳細に語られている。三島は、赤鉛筆で、何箇所も傍線を引いている。

『絹と明察』でも、「工場長が雇った土建人夫」たちが「社長防衛隊」の腕章を付けていること、「スト破りの暴力団との間にたえず小ぜり合いがくりかえされ」たことが、第八章で書かれている。

そして、三島が傍線を引いていた箇所は、入院中の弘子を訪れた女性の同僚が弘子と房江の前で「血なまぐさい争議の実情」を語る場面で巧みに利用されている。

中でも、『人権争議』百三十五頁に『総評』昭和二十九年九月号から転載されている女子労働者の投書は、ほぼそのまま同僚の口から語られている。人夫に殴られて鼻血を流しながら、鼻血と同じ赤い組合の旗を握り通した男子工員の印象的なエピソードである。ただし、ここにも三島の最小限の「斧鉞」によって、粉本記載のただの散文が、エモーショナルにして文芸的な香りを獲得しているのは、脱帽させられる。

【ロック・アウト】

百三十五頁。「ロック・アウト」という目次の右側に、三島は「工場封鎖」と書き加えている。そして、百三十八頁の「午後十一時のロック・アウト」については、『夏川嘉久次と紡績事業』の節で述べたとおりである。

三島は、「工場封鎖」「ロック・アウト」という言葉自体に、魅かれるものがあったようだ。『絹と明察』の執筆は、昭和三十九年。ちなみに、昭和四十四年に全国に大学紛争が飛び火して、大学当局による「大学封鎖」が起きるや、三島は俄然積極的に動き始める。

大学紛争に加わった全共闘の学生と対話する三島の写真は、あまりにも有名である。東京大学教養学部（駒場）の九〇番教室の壇上に立った三島の脳裏には、「駒沢の訥弁は大槻を説得できなかったけれども、能弁で論理的な自分ならば学生を論破できる」という想念が過ぎったのではなからうか。

【手帳を燃やす】

『人権争議』に戻る。百四十一頁。九月十六日に、やっと調停が成立し、その夜組合大会が開かれた。彦根工場では、

争議の原因を象徴的に著す緑色の『鑑』手帳を工場前広場にうず高く積み上げて焼き捨て、燃え盛る焰を中心に円陣を作り、労働歌と万歳で氣勢をあげつつスト終了の感激に酔ったのである。

と、されている。『絹と明察』では、次のように脚色される。

いよいよ争議が終ったその晩は、組合大会をひらいたのち、かつての忌わしい私物検査のための所持品申告カードを湖畔に堆く積んで焼き、湖に映る焰を囲んで、労働歌を歌ったり万歳を叫んだりしながら夜を徹した。すでに退院していた弘子もこの円陣に加わったが、彼女一人は労働歌を知らなかった。なので、大槻について歌った。

【最後の折り曲げ】

百四十五頁の角が折り曲げられているが、傍線も書き込みもない。人権争議を戦い抜いた一組合員の声が紹介され、「労働者としての成長を卒直に示すものである」と称賛されている。

大槻の成長を語ることに、『絹と明察』の一つの力点があったとすれば、そのヒントがここにあったということだろう。

5・2 その他

三島の書き込みや傍線がなくても、『絹と明察』に関連する箇所がある。ただし、いずれも「些事」であるので、ここでは省略する。

要するに、『人権争議』からの引用は多いが、小説にとつては「些事」である主題や人物造型については、『夏川嘉久次と紡績事業』で作られた。三島は、争議の細部を、『人権争議』に依拠したのだ。

6 『絹と明察』の本質

6・1 粉本によらぬ領域

本稿では、二冊の重要な粉本である、『夏川嘉久次と紡績事業』および『人権争

『議』になされた三島の書き込みについて、詳細な紹介を行ってきた。『絹と明察』には、この二冊の粉本をほぼそのまま依拠した領域、粉本を大きく改変した領域、粉本によらない独自の領域の三つに色分けすることができた。

駒沢善次郎の人物造型は『夏川嘉久次と紡績事業』に依拠し、大槻や弘子たちの工員たちの世界は『人権争議』に依拠している。人権争議が開始してからの描写でも、経営者側を描く際には『夏川嘉久次と紡績事業』に依拠し、労働者側を描く際には『人権争議』に依拠している。

粉本によらぬ領域、および粉本を大きく改変した領域の主要なものは、以下の通りである。けれどもこれらは、粉本と無関係というのではない。そもそも、三島がなぜ粉本に引きつけられたかを示唆すると考えるべきだ。

風景と芸術

・琵琶湖畔の彦根の風土。

近江八景と浮御堂（第一章）・八景亭（第三章）・彦根城（第三章）

第八章）・仏光寺（第六章）・石山寺（第九章）

・駒沢善次郎の風雅。

北斎と広重（第一章・第五章・第十章）

・「ヘルダーリンやハイデッガー」に代表される岡野の哲学。

人間性と性格

・駒沢善次郎と「天皇」

・大槻と「スサノオ」

・弘子・房江と「アマテラス」

・岡野と「帰郷者」

絹と故郷

・それぞれの登場人物にとっての「絹」の意味

・それぞれの登場人物にとっての「故郷」への「帰郷」

これらを概観しながら、『絹と明察』の深層に迫ってゆこう。

6・2 風景と芸術

【彦根の風土】

『決定版・三島由紀夫全集・第十巻』解題によれば、三島は昭和三十八年八月

三十日から九月六日まで、彦根と近江八景を取材旅行している。そして、『絹と明察』の起稿は昭和三十八年十月二十六日、脱稿は昭和三十九年八月十三日であった。『三島由紀夫研究年表』によれば、取材旅行に際しては「飛行機ぎらいのため、往きは第二富士、かえりは第二つばめに乗車」とある。また、東海道新幹線の開通する以前だったのだ。

おそらく、取材旅行に出発する時点で、第一章の琵琶湖周遊と近江八景めぐりを「九月一日」に、第九章の駒沢と大槻の対話を「九月三日」に設定するという構想が既に出来上がっていたので、八月下旬から九月上旬の取材旅行となったのだろう。

彦根は、琵琶湖に面する湖畔の都市である。「湖」海への憧れは、三島文学の根幹にある。ヘルダーリンの詩の世界ともつながる。

そして、江戸幕府の中核で活躍した井伊家の居城・彦根城の天守閣が街を見下ろしている。三島の祖母・夏子は、幕臣の子孫であることを生涯の誇りにしていた。「井伊の赤威し」で勇名を馳せた彦根武士も、鳥羽伏見の戦いで無惨な惨敗を喫して笑い物にされた。駒沢紡績に君臨した駒沢善次郎も、若き大槻の前に惨敗し、蹲る。

駒沢は、さしずめ桜田門外の変で暗殺された井伊直弼のような立場にある。水戸浪士たちが、争議に参加した労働者というところか。それでは、井伊直弼を暗殺し、江戸幕府を倒した明治新政府の実態はどのようなものであったか。

駒沢善次郎亡き後の世界は、明治維新の幻滅にも通じている。

【駒沢の風雅と世界認識】

彦根は、歌川広重（安藤広重）の「近江八景」と近接する風雅な都市である。『絹と明察』では、広重と北斎を駒沢善次郎の精神世界の比喩としてたびたび使っている。

日本の浮世絵は、西洋の遠近法の世界とは異なる原理で描かれる。だからこそ西洋の印象派の画家たちに大きな影響を与えることができた。駒沢善次郎の経営理念は、桜紡績の村川社長が信奉するアメリカ的経営方針とは似ても似つかない。だが、急成長によって侮れない力を蓄えつつあり、今ここで潰さなくては近江絹糸が世界市場に雄飛しかねない。

欧米は「仕組」理論で考え、駒沢は「心」で把握する。ところが、日本人の心ほど捉えがたいものはない。そして日本の美ほど、他人（民衆）の貧しさや悲

惨さや醜さを必要としているものもない。「人間の卑小さをありのままに包み込むのが風景である」という世界認識の表白は、芸術家の場合には高く評価され、経済人の場合には袋叩きに遭う。

駒沢がその生産に携わっている華やかな絹は、屑繭の埃と異臭の「暗い郷里」から生まれ落ちる。あたかも、どんなに理性的で清潔好きな人間でも、母胎から血塗れで臍の緒に繋がって生まれ落ちるかのよう。芸術もまた、人間の悪と汚泥の中から生まれ落ちるのである。「絹」は、現在の「明」と、過去の「暗」の二階建てになっている。

駒沢を否定する側の岡野や村川は、「明察」の人と考えるのが自然ではあろう。だが、村川は過度の潔癖性で、自分の会社の工場の「自在庫」ですら汚く感じられてしまう人間である。彼は、「暗」の大海に取り残された孤島の如き「明」に縋りついている。そして、岡野も、駒沢の死に伝染されて、「絹」の世界の経営に携わることになる。

「絹」にも「明察」にも、二面性がある。こう考えれば、岡野は、「明察」の世界から「絹」の世界へと転落してくるのではないだろう。駒沢も、「絹」の世界から「明察」の世界に登り詰めたのではないだろう。

絹の世界はすなわち明察の世界であり、明察の世界はそのまま絹の世界であったのだ。その世界のからくりは、病床の駒沢は気づいた。そして、岡野も気づいた。遙かな地平線の彼方にある「豊饒の海」と見えたものが、近寄ってみれば「水のない砂漠」であるように、澄明な明察の世界は絹の生まれ落ちる陰惨な世界だったのだ。

【彦根とヘルダーリン】

三島は、戦前から日本浪漫派の文学者たちと親しかった。だから、ヘルダーリンの世界は、彼の身と心に深く染みこんでいた。『絹と明察』に繰り返し使用されるヘルダーリンの詩、およびそれに関するハイデッガーの註解は、『絹と明察』の根幹をなす領域である。粉本によらない領域というよりは、三島が粉本に着目した理由を示唆するものである。

多くの批評家は、言う。『絹と明察』は、経済の領域と哲学・美学の領域の「接着縫合」がつまみくいていない失敗作である、と。そして、二つの世界の統合は無理があり不自然である、と。

けれども、その「矛盾を抱え込んだ不自然な接着」こそが、三島にとつての

「自然な」心の形であったし、「自然な」世界観であったことを私たちは理解せねばならない。そうでなくては、どうして金閣寺の放火犯や、殺人事件の少年などの醜悪な犯罪を材料として、「傑作」を書けるだろうか。

三島の心に並存する二つの世界をありのままに肯定する時、ヘルダーリンの澄明な世界認識（＝明察）への憧れが、近江絹糸の人権争議という日本の労資（労使）のドロドロ（＝絹）という素材に飛びつき、三島の自己表白の恰好の題材となったことが初めて納得できるだろう。

「綺麗は、汚い。汚いは、綺麗」。ここは直接に『絹と明察』には引用されていないものの、第八章で秋山と岡野が語り合った『マクベス』にある言葉である。日本は西洋で、西洋は日本である。岡野は駒沢で、駒沢は岡野である。絹は、明察なのだから。

ヘルダーリンの詩に、「絹」および「祭」休業」という言葉があることは、既に指摘した。ヘルダーリンへの愛着が、近江絹糸のストに対する異常な関心に転化する一瞬の三島の精神世界は、獣が獲物を狙う殺意と似ている。

そして、絹が明察と一体であるように、餌食となる得物は食べる側の「分身」でもあるのだ。自分が自分を食う共食いである。三島は、自分の「分身」を小説の主人公として人前に曝し、恥多き人生で破滅させることで、自分自身を血祭りに上げる。自分が自分を殺し続ける。

しかしその限界が、『絹と明察』の背後に透視できる。駒沢と大槻、そして駒沢と岡野の「共食い」あるいは「近親憎悪」は、三島にとつてぎりぎりの精神的な危機の相を照らし出している。

この『絹と明察』を書き上げた後、三島は最後の力を振り絞って、「豊饒の海」四部作を完成させる。それが、彼の限界点だった。

6・3 人間性と性格

既に第二章で、『絹と明察』の登場人物の人間性の輪郭は描写してある。反復を最小限に留めて、簡単に総括しておきたい。

【駒沢善次郎と天皇】

菊乃に看取られて死んでゆく駒沢が、日本の伝統文化の比喩であることは確かだろう。彦根城を造った戦国武将や、彦根城の天守閣から領民たちを悲惨を睥睨しつつ支配した江戸の大名、さらには国民の艱難辛苦を礎にして列強諸国に伍し

て興隆していった明治日本、そして女工たちの苦悶を必要悪として経済復興を遂げた戦後日本。……

これまでの数多の時代の「日本」の姿が、駒沢善次郎の人生に重なる。駒沢善次郎は、「ゾレン」としての理想の天皇ではなく、「ザイン」としての天皇の姿を示して余りある。

人間宣言をした天皇の苦悶も、天皇制に反対する「進歩人」も、ゾレンとしての天皇への愛と憧憬と渴望を抱いている点では、共通している。駒沢と岡野の心が地続きであるように。

三島は、『絹と明察』を書き上げることによって、自らの血に繋がる「父」への愛憎を総括しただけでなく、ゾレンとしての天皇への思いを強くしたのかもしれない。北斎や広重が世界的に称賛されるのと同じ行為をしているのに、駒沢は世界から疎外され、攻撃され、否定されてしまった。駒沢は、人間への強い愛情の念によって、愛する「芸術」の世界から足を踏み出して、「経済」現実」の世界に堕ちてしまったからである。

ゾレンとしての天皇、理念としての日本の父性は、あくまで「文化」の領域に留まらねばならないのだろうか。なぜ、天皇は現実世界でザインとして、あるいは人間としての経済活動をしてはならないのか。ここで、三島は天皇制という人生最後の難問と突き当たったのだと思われる。

しかし、三島にとつての天皇制の意味の探究は、もはや別稿に譲るしかない。

【大槻とスサノオ】

大槻は、現実的な人間と言うよりも、「破壊する喜び」に生きる人間である。既存の価値観や平穏な世界を擾乱し、攪拌し、崩壊させる。そして、新しい価値観と新しい世界の再生の扉を開くのだ。だからこそ、「荒魂」としてのスサノオのイメージを帯びる。

駒沢紡績の争議は、午前二時に、電源が消される暗闇の発生で開始した。これは、まさに世界を闇にしたスサノオの神話と、一致する。三島は、近江絹絲の争議開始が「午前二時」であることを知った時に、スサノオ神話との酷似を感じて興奮を禁じ得なかったであろう。三島が綿密にチェックした「粉本に描かれてある事実」は、三島の想念に永らく眠っていた神話世界への憧れに火をつけたのである。

忘れてはならない神話の伝承がある。重要なのは、スサノオの子孫が天皇には

ならなかったということである。アマテラスの孫に当たるニギノミコトが「天孫降臨」した際に、スサノオの系譜に繋がる大国主は身を引いて、「國譲り」せざるをえなかった。そして、姉のアマテラスの子孫の方が、日本の皇位を継承しつづけた。破壊するだけ破壊したスサノオの功績は、「女」の領有するところとなった。

「絹」の世界の苛酷な労働を厭って、大騒動を引き起こした大槻は、いずれ敗れるだろう。その時、かつて「絹」の世界を強制していた駒沢善次郎の心を理解することだろう。死にゆく駒沢は、それを知っているから、大槻を許した。

『絹と明察』では、駒沢善次郎が子どもだった頃の父には、言及しない。そして、大槻の子どもも、弘子の中絶によってまだ生まれていない。「父を持たない駒沢」と「子を持たない大槻」の二人であつてこそ、父子関係の真実を照らし出すことができたのである。それが、「万世一系」の連綿たる皇統を誇る天皇制と主題として関わるのが、面白い。

ともあれ、三島は粉本の一つ『人権争議』を、労働争議の書とは読まず、世界破壊の神話として読んだ。

【弘子・房江とアマテラス】

弘子は、子どもを中絶した。そして、房江は「石女」であつた。

娘を持たない房江。そして、両親と早くに死別して母を持たない娘である弘子。だからこそ、二人の姿は世界の「母と娘」の真実を照らし出す。

父と息子が対立し死闘を展開したのと違って、母と娘は連繫する。そして、世界が男たちによって破壊された後で、女たちは「再生」と「新生」を担うのである。このような女たちが、いつも世界を維持している。女たちがいる限り、世界は終焉を迎えない。あるいは、終末を迎えることができない。彼女たちの支配は、未来永劫に続くかもしれない。

男より優位に立ち、「男たちの人生を紡ぐ女」こそ、神話的な織女であり、現代の女工である。すなわち、アマテラスである。

【岡野と帰郷者】

『絹と明察』における岡野は、実質的な副主人公と言つてよい。駒沢の対立者として、彼の心の真実を照らし出す役割を果たしているからである。第十章の岡野は、ハイテッガーが「清澄な言葉」でヘルダーリンの「帰郷」を語る時に、

「実はもっとも不気味なものに行き当たったのではないか」と思い至る。

岡野は、実に「鬱屈した男」（第十章）である。どんなに「清澄」な明察の世界に憧れても、彼自身の魂の故郷は「鬱屈」あるいは「もっとも不気味なもの」の領域にある。

岡野は、『絹と明察』の冒頭部分からして既に、真実の自分の心、すなわち日本的なものへ向かって帰郷する旅人である。駒沢の死によって、もはや岡野が「絹」の世界を引き受けざるを得なくなり、駒沢紡績の社長の椅子に座ろうとする場面で、『絹と明察』は終了する。

「されどわが心にいやまさる楽しみは

聖なる門よ！ 汝をくぐりて故里へ帰りゆくこと」

そういう「帰郷」の詩句自体が、至高の晴れやかさの裡に、言いがたい暗さ、恐怖、不安、愚かしさ、滑稽さを秘し蔵しているように思われる。

ここに秘し蔵された「言いがたい暗さ、恐怖、不安、愚かしさ、滑稽さ」こそが、ヘルダーリンの詩にいうところの「宝」である。ハイデッガーも、この詩が「ドイツ的なもの」の不気味さを秘し蔵していたのだと気づいていたことに、岡野は気づく。岡野もまた、「日本的なるもの」の暗澹たる鉱床にぶち当たったのである。

その暗く不気味な「日本的なるもの」は、二面的なものであつて、ある視角からは輝かしい「絹」のような光沢を放つて輝いている。その輝きは、駒沢が感じていたものであり、岡野が否定したものであつた。自分が拒否したもの、かつてそこから旅立ったものへと向かって岡野は、帰郷する。

菊乃を芸者から寮母へ変貌させ、大槻を従順な少年から不逞な青年へと変貌させ、駒沢を社長から死者へと追い落とし岡野ではあるが、彼は「自分自身を変貌させてくれるもの」との邂逅を長い期間求めつづけていたのだろう。

岡野は、単なる労働争議の扇動者ではない。金の亡者でもない。「変わりたいたい」と念じている男女に出会ったら、彼らの「重石」ないし「束縛」となっているものを取り去ってやるだけである。だからこそ、自分の重石や束縛に人一倍苦しんでいたのである。

三島由紀夫もまた、何物かに生まれ変わりたかつたのであろう。何が、彼の変貌を妨げているのか。そして誰が、それを取り去ってくれるのか。もし、誰も重石を取り去ってくれぬ者が出現しなかったならば、どうやって後半生を生きてゆक्तつもりだったのか。そもそも、三島はどこへ向かって帰郷したかつたのか。

『絹と明察』は、多くのことを考えさせてくれる。それは、読者各自にとって、三島文学の故郷への旅の道程である。

6・4 絹と故郷

【各自にとっての「絹」の意味】

駒沢善次郎は、絹を商品とする駒沢紡績の社長である。この会社は、現実的には「綿」が主商品なのだが、三島は「綿」をほとんど無視し、「絹」にのみ光を当て続ける。三島にとって、日本的なるものの両義性を示すシンボルは、絹でなければならなかつたのだ。駒沢の肌は「絹」のようである、と繰り返し強調される。絹の世界の「明」を体現しているのが、駒沢善次郎であつた。

岡野は、最終的に「絹」を作る駒沢紡績の社長に就任する。

大槻は、絹を作る会社の労働者である。第九章で駒沢と対話した時には、「蛹のまま熱湯に漬けられるあの絹紡工場のように、絹はそうやって作られて来たんです」と、絹の世界の「暗」を駒沢に突きつける。しかし、駒沢にとっての絹は闇を覆うほどの光に溢れたものだったので、二人の会話は最後まで噛み合わなかつた。

原菊乃は、「絹」を纏う芸者を止めて、絹の故郷とも言える紡績会社の寮母になる。寮からは、魂の故郷のごとき琵琶湖が見える。彼女もまた、「絹の世界への帰郷者」たらんとしたのだ。しかし争議の勃発を境にして、彼女は自分が「現実と夢の境目を選んで揺れ動く絹の帷のような存在」ではないかと思ひ至る（第七章）。そして、菊乃が駒沢の愛人となつた時、駒沢は彼女の太腿をたたきながら、「こりゃ本絹や」と冗談を言うのだった（第八章）。菊乃が「絹のよつな肌」を持った時、彼女は遂に「駒沢善次郎」の世界へと帰郷を達成したのだ。

大槻弘子（旧姓は石戸弘子）は、「絹」を作るための苛酷な労働で肺を病む女工である。紡績会社の女工が肺を病むのは「絹の勲章」だと、第四章で書かれている。

駒沢房江は、「絹」を作るために肺を病んだ女工たちすべての恨みを一手に引き受けて肺を病む女である。房江は女工たちの怨恨だけでなく、大槻たち男子工員の怨恨もまた引き受けているのだろう。だからこそ、大槻は個人的な私怨に駆られているという「負い目」を感じることなく、真つ正面から「公憤」を振りかざして、駒沢の権威に向かって戦いを挑めたのである。房江にとっての争議と会

社の崩壊は、待望久しい「祭」であった。祭は、ヘルダーリンの詩句を介して、「絹さながらの地面」へと繋がっている（本稿「2・7」参照）。

【各自にとつての「故郷」への「帰郷」】

『絹と明察』のそれぞれの人物にとつて「帰郷」は、「湖」あるいは「水」を故郷としていたように思われる。琵琶湖が重要な舞台となつてゐることからも明らかである。それもまた、ヘルダーリンの詩句と響き合つてゐる。ヘルダーリンの詩では、大地が絹のように光る。『絹と明察』では、琵琶湖の輝きが印象的であり、それが絹の光なのだろう。

「行動の人」であるはずの大槻ですら、湖上をわたる爽やかな風に吹かれて、哲学的な思索に耽る場面がある（第六章）。そして、新婚の弘子に向かつて、琵琶湖の周囲の山々の名前を教える晴れやかな大槻（第九章）。しかし、死期の床にある駒沢は、いつか必ず大槻が「駒沢の世界」へと帰郷するだろうことを確信していた。だからこそ、大槻を優しく許したのだ。菊乃ですら、駒沢の世界に帰郷してくれたのだから。

そして、岡野という男。彼は、戦後十年間ずっと、「世間から身を隠した男」であつた（第五章）。岡野もまた、永い「岩戸籠もり」をしていたのだ。そして、外の世界へと姿を現す日の来ることを夢見ていた。暗い闇の世界に引きこもり、絹の光に溢れた外界（駒沢の世界）に憧れながら、嫌いな振りをしつづけた。口では、ヨーロッパの明澄な光の世界を理解していると嘯きながら。

明るい光は、暗い闇を必要としている。両者は一体である。岡野の岩戸籠もりは無意味である。だから、村川の「君もそろそろ世間の表面へ出ることを考えたらどうなんだ」という一言を、タチカラオの後押しとして、岡野も世間へ現れる決心をした。光を生み出すのは闇であり、闇があるからこそ光が清澄なものになる。それが、世間の真実である。このような自然な世界、すなわち駒沢の世界とも言うべき「日本」に、岡野はやつと帰郷できたからである。

そもそも、「實在」とは何か。そして、自分が「今、ここに在る」とは、どういふことなのだろうか。哲学的には、「ある」とは、直感に基づき、「ある」の世界と、分析に基づき、「ある」の世界とがあるという。前者は、「クリアー」な實在であり、後者は論理に基づいて可能性の根拠を求める、「ディステインクト」な實在である。

駒沢は「そこに既にある」實在を、そして大槻や岡野たちは「観念的な」實在

を求めていた。けれども両者の対立を統合するところに、真の「實在」があると、三島は考えたのではなかつたか。

だから、駒沢も、岡野も、大槻も、村川も、すべての男たちは「三島の分身」であり、「實在」を追想する帰郷者なのであつた。

ヘルダーリンの「追想」は、郷里の山を離れて海に注いだ水の心に、郷里への愛が甦り、烈しく故郷を恋うる感情を歌つてゐる。大槻も、一度は親愛の感情を抱いた「父」の駒沢の懐を離れて、背いた。駒沢の世界から遠く旅立つた大槻はやがて駒沢の心を思い出し、烈しく回帰したい思いに駆られるだろう。

岡野もまた、駒沢の世界と厳しく対立する「旅」を試練として持つことで、自分の心内なる「駒沢の世界観」への愛着と復帰とを意識する。大槻も、岡野も、彼らの人生は川の流れのようなものであつた。駒沢こそ、彼らの水源であり、「故郷」なのだつた。

7 おわりに 三島の旧蔵書群の調査の可能性

【創造力の基盤】

本稿は、『絹と明察』の世界の本質に少しでも迫ろうとして書かれた。最初にこの小説の輪郭を把握し、次に三島の旧蔵書を厳密に調査することで、この小説に込めた作者本人の「意図」を具体的に理解した。そのうえで、再度『絹と明察』の表現を読み直すことで、この小説の「真実」を発掘しようとした。

『絹と明察』という小説は、これまで「既に完成した芸術作品」として、我々の目の前にあつた。だが、近江絹糸の人権争議という複雑な現実を踏まえているという先入観によつて、この小説に内在する「澄明な光」が見えなくなつていた。小田切秀雄を筆頭とする文芸批評家たちは、まるで岡野が駒沢の前時代性を嘲笑するかのよつに、『絹と明察』を失敗作と断じて恥じなかつた。

私は、何よりも『絹と明察』という作品に対する誠実な帰郷者として、この作品に収蔵されている「宝」を発見しようと努めた。その過程で、三島由紀夫という創作の魂を抱え込んでいた「言いがたい暗さ、恐怖、不安、愚かしさ、滑稽さ」が少しずつ見えてきたように思う。それは、三島がこの小説の創作に利用した粉本類への書き込みなどの調査によつて、浮かび上がったものである。なぜなら、粉本によらない領域や、粉本を掴み取つた三島の精神の深奥を「白抜き」のよつに抽出できるからである。

読者は、ネガ写真のように暗転され白抜きされた三島の心象風景から、決して目を背けてはならない。そうではなくて、むしろこの心象風景に向かつて、自分の足を踏み出そうと決意する時、昭和四十五年十一月二十五日に自決した三島由紀夫の魂を、わが物にすることができると。なぜなら、三島本人もかつて心震えながらこの心象風景へと足を踏み入れたのであるから。

三島は、男性だった。近代小説は男しか書けるはずがなく、女性作家という概念は成立し得ない、とまで豪語したことがあった。だが、『絹と明察』を読めば、「物語」も「現実」も女たちが闇の世界から編み出した光の世界だと三島が理解していたことがわかる。

男の小説家は、どこまで「女」という世界の創造者に対峙・拮抗しつるのか。そのぎりぎりの心境から、三島の傑作群が生まれた。三島由紀夫という稀有の文学者・芸術家の創作の秘密を解こうとするならば、二面性・両義性を持つ「絹の世界」の中へ入ってゆかねばならない。ミイラ取りがミイラになる恐怖と戦いながら。

これまでの『絹と明察』は、良質の読者に恵まれない不幸な小説だった。まるで、親からも忌避され捨てられた、神話のヒルコのような。だが、ヒルコはエビスに変貌したと神話は教えている。失敗作とされた『絹と明察』は、解釈次第で傑作へと一変して、現代人の前に壮麗な姿を現すだろう。

【計り知れない資料的価値】

今回、笛吹川芸術文庫の貴重な資料群の一端を調査できた。その結果、少なくとも私自身の『絹と明察』に対する評価が一変したことを正直に告白したい。

四冊の旧蔵書は、三島の創作心理をつぶさに教えてくれた。構想を具体化させるための読書、登場人物一人一人の性格を決定して生きた「人間」とするための読書、そして執筆に際してディーテイルにリアリティを与えるための読書。利用できる箇所は、ほとんど「粉本」そのままの記述を用いる。その一方で、

大小さまざまな変化が大胆に施されている。

近江絹糸の人権争議に対する三島の異様なまでの関心は、風雅な湖畔都市である「彦根」一点に絞られた。そして、「ヘルダーリン」を加味することで、西洋と日本、古典と現代が対立する「思想小説」となった。

なおかつ、三島の「織る女」「紡ぐ女」への潜在的関心が、「絹」を製造する近江絹糸という会社に注目させたこと、三島の「破壊する英雄」「スサノオ」への先

天的関心が、人権争議という暴力的ストライキに注目させたことも推測された。

ところで、笛吹川芸術文庫に管理されている三島旧蔵書の計り知れない価値を、痛感する出来事があった。本稿の完成間近の頃、幡野武夫氏から「さらに一冊、『絹と明察』と関連する三島の旧蔵書を見付けた」という連絡を受けた。それは、ヘルダーリンに寄せる三島の思いを照らし出す書物であった。

・高坂正顕『ハイデッガーはニヒリストか』(フォルミカ選書・創文社・昭和二十八年)。

三島は、第一章「ハイデッガーはニヒリストか」の冒頭である四頁を、激しく折りたたんでいる。そして、次のハイデッガーの言葉に赤鉛筆で傍線を引いている。

「翻訳はただ文字に忠実であるだけでは、未だ言葉に忠実であるとは云ひ得ない。文字が言葉になつた時に、始めてその翻訳は言葉を忠実に訳したと云へる。」

三島は、自分の書いた日本語の小説が英語に翻訳されることを、熱望していた。ドナルド・キンたちが、その渴望を叶えてくれた。このハイデッガーの言葉は、『絹と明察』には直接には関わらないが、三島の願いを照らし出している。

三島は、第二章「預言者ハイデッガー」の「九 時は歴史を支へる地盤である」という節が始まる百十八頁の角を小さく三角形に折っている。

そして、百二十一頁を大胆に折りたたんでいる。畳み込まれた紙を上げてみると、ヘルダーリンの言葉に対するハイデッガーの説明部分に、のべ九行にわたって赤鉛筆の傍線がある。

ギリシャ人達にとつて、自国的なるもの、固有なるものは、「天からの焔」であった。そこにギリシャ人達が、神々の近くに住してあることの保證があった。しかしこのギリシャ人達にとつて固有なものである 天からの焔 は、透明な描写にまで齎されねばならなかつた。描写の明晰さ それはギリ

シャ人達にとつては、他国的なるもの、外々しきものであつたらう。しかし彼等はこの、自らにとつては異国的なるものを通過することによつて、真に自国的なるものを自己に固有のものとなすことができた。かくて神々もまたそこに関与するものとしてのギリシャのポリスが建設され、「聖なるものによつて規定された歴史の場」 即ちポリス が開かれた。

三島が傍線を施したのは、ここまでである。だがその直後の文章も、傍線こそ引かれていないものの、三島の心に深く刻印されたに相違ない。すなわち、ドイツ人達にとつての「固有なるもの」は「描写の明晰さ」であり、「天からの焰」が「異国的なるもの」である。だから、ドイツ人達が真に自国的なるものを自己に固有のものとするためには、異国的なる「天からの焰」に打たれねばならぬ。かかるプロセスが、「詩の法則」であり「歴史の根本法則」である。

このようにハイデッガーのヘルダーリン理解を語った後で、高坂正顕は論を敷衍する。ここには、「ドイツとギリシャ」の関係だけでなく、「日本と西欧」の関係の未来像が提示されているのだ。

日本人が「日本に固有なるもの」を真に自己のものとするには、「自己に外々しきもの」の中へと旅立つてゆくことが必要である。すなわち、これこそが『絹と明察』で岡野に託された重要な使命だったのである。岡野は日本人でありながら、ハイデッガーとヘルダーリンの「描写の明晰さ」を特徴とする西欧文明に憧れる。そして、「日本的なるもの」の典型と言つべき「駒沢善次郎の精神宇宙」と闘う。徹底的に闘うことで、遂に「真に日本的なるもの」を「自己に固有のもの」とすることができた。彼はハイデッガーとヘルダーリンに向かつて旅立つことで、日本に帰郷を果たした。

大槻もまた、駒沢と闘い、駒沢の生命を奪うことで、「父なるもの」から旅立つ。やがて、その旅の後に、駒沢の破滅が体現していた「日本人にとつての父なるもの」に帰郷することだろう。だからこそ、死の床で、駒沢は岡野も大槻も許せたのである。

『ハイデッガーはニヒリストか』という本は、昭和二十八年六月の刊行。『絹と明察』が起筆されたのが昭和三十八年十月。十年間の時間差はあるが、三島の心の中で、高坂正顕の解説が熟成し続けて『絹と明察』につながったと言えるだろう。

【創作以前の文学者の心】

このように、笛吹川芸術文庫が所有する三島旧蔵書は、宝の山である。自筆原稿以前、そして創作ノート以前の文学者の生の心を覗き込むことが可能になるからである。読書することで、ヒントを掴み取る眼力と腕力の強さ。「読む人」から「書く人」へ転身する一瞬の神秘。文学者を創作活動に駆り立てた、そもそもその情念と情動の正体。それを、旧蔵書への書き込みは照らし出す。

三島の創作工房の実態は、これから笛吹川芸術文庫のコレクションを一冊ずつ調査すれば、少しずつ明らかにされるだろう。もしかしたら、「どうしても明らかにできないものが最後に残る」ということが、明瞭になるのかもしれない。

笛吹川芸術文庫の三島旧蔵書は、「宝」である。この宝を探究し了えた三島は、この宝を用いて自分の文学世界を想像し、かつ創造した。三島文学の心の故郷には、目眩むばかりの光の地平線の底に、「言いがたい暗さ、恐怖、不安、愚かしさ、滑稽さ」が、二面性を帯びた宝として埋蔵されている。

私たちは、少なくとも私は、これからも三島の心の郷里への帰郷者として、一冊でも多くの三島旧蔵書を手にとって調査しなければならない。三島文学の故郷への出帆が、これから始まる。

その第一歩が『絹と明察』であったことは、これまで正当な評価のなされてこなかった三島文学の側からの異議申し立てであつたらう。まことに、象徴的である。

【初出雑誌と初版本の装幀】

もっと早くに記すべきだったかもしれないが、『絹と明察』の初出形態と初版本の装幀について、最後に触れて稿を閉じたい。

『絹と明察』が連載されたのは、講談社の『群像』である。昭和三十九年一月号から十月間の連載だということは、既に述べた。毎号に一章ずつ連載しようとしているが、第二章は二月号と三月号にまたがっている。つまり、三月号は第二章の残り、第三章の全部が掲載されている。

三島は、この連載時点から「正字正仮名」（旧字旧仮名）を用いて印刷している。第一章の近江八景遊覧の誤記を次号で訂正したりしているが、ほぼ連載通りの本文で単行本となっているようだ。些細な点だが「梳綿」のルビが初出では「りゆうめん」であつたのが、単行本では「りうめん」に訂正されていたりする。ちなみに、新潮文庫では「そめん」である。

『絹と明察』を『群像』に連載中にも、同じ『群像』誌上で三島の『喜びの琴』事件が創作合評されたり、匿名コラムで話題となつたりしている。三島は常に話題を振りまいており、かつ賛否両論であつた。

『絹と明察』の初版本（単行本）は、白い箱に収納されている。これは、蚕の「繭玉」のイメージであろう。箱から出すと、青い（濃いブルーの）繭の手ざわりの本体が現れる。この「青」は、明澄な琵琶湖のイメージだと思われる。むろ

ん、ヘルダーリンの色でもある。

表の見返しと裏の見返しには、どちらとも同じ画面で、歌川（安藤）広重筆の「近江八景の中」から「堅田の落雁」が選ばれて、薄く印刷されている。第一章で、駒沢が岡野に自分のコレクションを自慢して、「広重の近江八景も、名所図絵の版画が、みんなよく知ってはるとおり、人口に膾炙してまずけど、わしの蒐めた肉筆にも、八景のうち、瀬田の唐橋と、堅田の落雁だけは、こんな真正正銘のが残ってますさかい」と語る場面がある。その肉筆の「堅田の落雁」である。『絹と明察』は、琵琶湖・近江八景・彦根の「風雅」を母として誕生したのだ。

堅田の落雁の画面には、これも第一章の重要な舞台である浮御堂と、舟の帆が描かれている。そう言えば、この構図から、岡野はヘルダーリンの詩の一節を想起した。

遠くひろがる湖面には

帆影に起る喜悅の波。

払暁の町はかなたに

今花ひらき明るみかける

まさに、「琵琶湖」ヘルダーリンの詩の湖」である。三島も、広重の肉筆からストーリーのヒントを得たのだろう。

『絹と明察』の単行本の装丁者の名前は、明記されていない。あるいは、作者である三島自身の強い希望によるものだろうか。

定価は、六百五十円。帯文。表側。

美しい自然を背景に、烈しい解放への欲望に憑かれた若者たちに対し、自ら信ずる父家長倫理へ献身した男の孤独と挫折 年来の主題を描きつくした三島文学の最新傑作。

裏帯は、磯田光一の『図書新聞』文芸時評の抜粋が転載されている。ちなみに、「父家長」は現在ならば「家父長」の方が自然である。

【付記】

本稿執筆の過程で、ハイデッガーとヘルダーリンの思想に関して、東京大学名誉教授・渡邊二郎先生から口頭で御教示を賜る機会を持つことができた。私の咀嚼力の不足から、渡邊先生の深くて貴重な教えを活かせなかったことを、本当に申し訳なく思っている。これからも、「三島とハイデッガー・ヘルダーリン」については、探究しつづけたい。

また、英文要旨については、放送大学助教授・大石和欣氏のお力添えをいただいた。自分の作品が「美しい英語」に翻訳されることを心から望んでいた三島由紀夫を論じた本稿に、イギリス浪漫派に造詣の深い大石氏の格調高い英文要旨を掲げることができたことは、私の喜びとするところである。

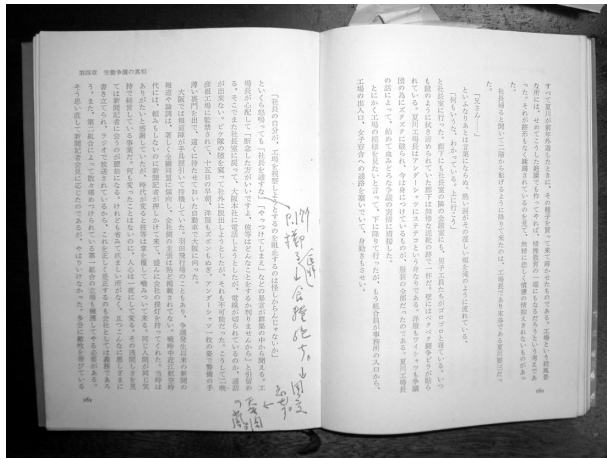
それから、東京大学附属総合図書館・東京大学経済学部図書館・武蔵大学図書館・放送大学図書館には、図書の閲覧と文献の複写などでお世話になった。

そして最後になったが、貴重な資料の熟覧と写真撮影、および本稿への写真掲載を許可いただいた笛吹川芸術文庫の幡野武夫氏には、心から感謝申し上げます。三島の旧蔵書を用いた新しい研究の開拓者の一人として、幡野氏が私を選んで下さったことは、三十五年以上も三島文学に魅せられてきた私には夢のような幸運だった。

総合文化講座

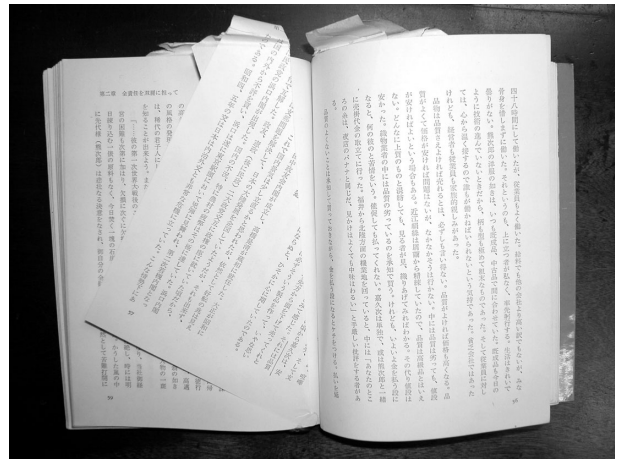
平成十七年十月十一日受理

写真



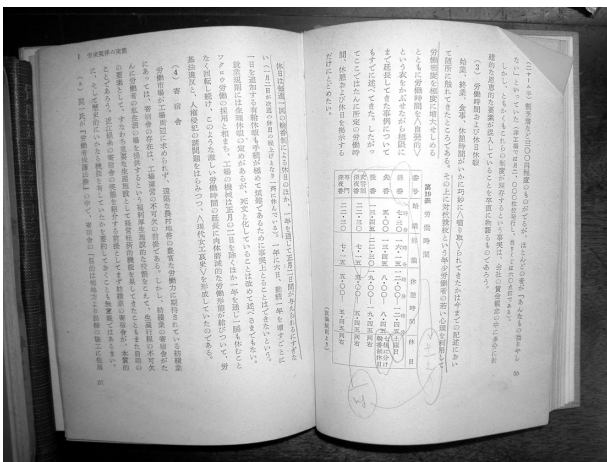
三島によるストーリー構築を照らし出す書き込み。
同前書 161ページ。

写真



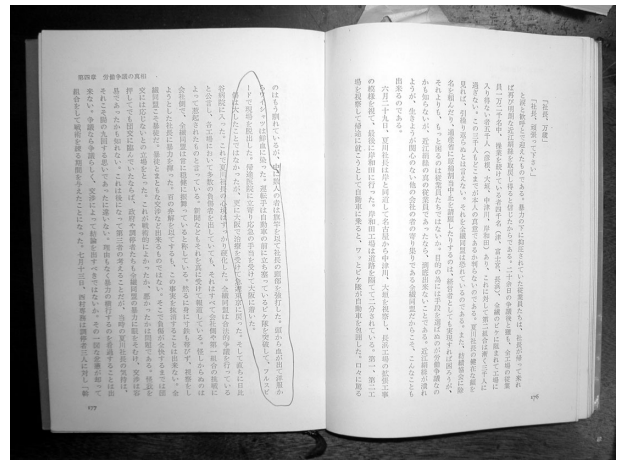
三島による大胆なページの折りたたみの実例。
『夏川嘉久次と紡績事業』57ページ。

写真



大槻と弘子のデート時間を決定するための書き込み。
『人権争議』50ページ。

写真



写真と連動する囲い込み。
同前書 177ページ。

The Making of *Silk and Enlightenment (Kinu to Meisatsu)*,
Integrating the Story of Industrial Actions: Enlightening Mishima Yukio's
Motives through Studies on his Library Books.

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

Mishima Yukio's *Silk and Enlightenment (Kinu to Meisatsu)*, 1964) is a long and a rather unfortunate novel in that it received uncertain reviews of both approvals and disapprovals by the critics. Where did Mishima's true intention lie in writing this full-length novel?

Fuefukigawa Art Library, where Mr. Hatano Takeo acts as the President, holds many of the books owned by Mishima himself. I was so fortunate to be given the opportunity to examine the four books that provided sources for *Silk and Enlightenment*. Indeed, I was the first scholar to be given access to these items, which are all concerned with the industrial actions that took place in the rapidly growing silk factory, Omi Kenshi.

In these four books, many underlines are drawn and marginalias scribbled in by Mishima himself. Also, whenever he found useful accounts for his novel, he folded the top corner of pages. In fact, there are applications of such relevant parts in *Silk and Enlightenment*. The pages, stained with Mishima's greasy hands, have now turned into almost black over forty years and his finger prints are clearly retained in some of them. By tracing the pages he referred to, we can investigate minutely into the process through which the novelist constructed the plot, created the characters, and rendered the novel as close as possible to the real historical incident.

Silk and Enlightenment compares the two contrasting spheres: the enlightened world of the West, which is represented by Heidegger and Hölderlin, and the chaotic reality of Japan as exposed through the industrial actions over the silk factory. Mishima's own thought on Japan during the industrialising period is made clearer by the above four books discovered in his library. It also elucidates his researches on the subject of the hitherto uncertain relationships between the world of West and that of Japan. Mishima had an eye for the uniqueness of Japanese society as well as an eye to observe the cultural universality.

Besides, this research becomes the key to understanding the root of Mishima's 'motivations as a novelist' which drove him in the first place to select out these four reference items on the industrial actions at Omi Kenshi. It sheds a new light upon his fundamental views on humanity and the world.

I am confident that this paper will present a model case for future studies on Mishima Yukio by making a close and detailed analysis of *Silk and Enlightenment (Kinu to Meisatsu)*, for the first time, by actually basing research on Mishima's marginalias on his own books.

キーワード : 三島由紀夫, 『絹と明察』, 笛吹川芸術文庫, 幡野武夫, ヘルダーリン,
ハイデッガー, 近江絹絲, 人権争議, モデル, 種本・粉本, 虚構化,